

第七調

「スポタ」の小晩課

「主よ、爾に呼ぶ」に四句を立てて本調の主日の讚頌三章を歌ふ、其第一は二次。

第七調。

句、我が^わ靈^{たましいしゅ}主^まを待つこと、番人^{ばんにん}の旦^{あさ}を待ち、番人^{ばんにん}の旦^{あさ}を待つより甚^まし。
來りて、死^しの權^{けん}を滅^{ほろぼ}し、人類^{じんるい}を照らし主^{てら}の爲^{しゆ}に喜びて、無形^{むけい}の者^{もの}と共に呼ばん、吾^わ
が造成^{ぞうせいしゅ}主^{およ}及び救世^{きゅうせいしゅ}主^{およ}よ、光榮^{こうえい}は爾^{なんじ}に歸す。
救世^{きゅうせいしゅ}主^{なんじ}よ、爾^{われ}は我等^{われ}の爲^{ため}に十字架^{じゅうじか}と葬^{ほうむり}とを忍び、神^しなるに因りて死^しを以て死^しを滅^{ほろぼ}
し給へり。故^{たま}に我等^{ゆえ}爾^{われ}の三日^{なんじ}目の復活^{みつかめ}に伏拜^{ふつかつ}す。主^{おほ}よ、光榮^{こうえい}は爾^{なんじ}に歸す。
使徒^{しと}等は造成^{ぞうせいしゅ}主^{ふつかつ}の復活^みを見て、奇^きとして、諸天使^{しよてんし}の讚美^{さんび}を歌へり、是^{これ}は教會^{きやうかい}の光榮^{こうえい}
なり、是^{これ}は國^{くに}の富^{とみ}なり。我等^{われ}の爲^{ため}に苦^{くるしみ}を受けし主^うよ、光榮^{こうえい}は爾^{なんじ}に歸す。

光榮、今も、生神女讚詞、定理歌。第七調。

無玷^{むてん}なる童貞^{どうていじよ}女^{なんじ}よ、爾^{おほ}に於て行はれし奥密^{おくみつ}は實^{じつ}に畏^{おそ}るべく言ひ難し。蓋^い爾^{がた}は智慧^{けだしなんじ}及
び言^{ことば}に超えて、萬有^{ばんゆう}の原因^{げんいん}たる言^{ことば}、聖神^{せいしん}に藉りて爾^{なんじ}より身^みを取り、本性^{ほんせい}を易^かへずし
て人^{ひと}と爲りし者^{もの}を生み給へり。彼^{かれ}は兩性^{りやうせい}合せられて、一^{ひとつ}の位^{くらい}に二^{ふたつ}の性^{せい}ある者^{もの}として出

第七調 「スポタ」の小晩課 四七三

第七調 「スポタ」の小晩課 四七四

で、全^{まった}き神^{かみ}及び全^{およ}き人^{また}として、兩性^{りやうせい}の完全^{かんぜん}、兩性^{りやうせい}の實質^{じつしつ}を顯し給へり。蓋^{あらわ}身^{たま}にて
十字架^{じゅうじか}に苦^{くるしみ}を受けて、神^{かみ}として苦^{くるしみ}に與らざる者と止まり、人^{ひと}として死^しして、神^{かみ}
として死^しの權^{けん}を滅^{ほろぼ}し、三日^{みつかめ}目に復活^{ふつかつ}して、人類^{じんるい}を朽壞^{きゅうかい}より救ひ給へり。神^{かみ}の母^{はは}よ、彼^{かれ}
が我が族^わの贖罪^{しよくざいしゅ}主^{およ}及び救世^{きゅうせいしゅ}主^{およ}たるに因りて、我等^{われ}に其大^{そのおほ}なる慈憐^{じれん}を降さんことを祈
り給へ。

次ぎて「穩なる光」。其^{ボロキメン}の後提綱、「主は王たり」、三次。句、主は能力を衣、又之を
帯にせり。

次に「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」。司祭聯禱を誦せず。我等直に左^{ステイヒラ}の讚頌
を歌ふ。

挿句に主日の讚頌、第七調。

世界^{せかい}の救主^{きゅうしゅ}よ、爾^{なんじ}は墓^{はか}より復活^{ふつかつ}して、人人^{ひとびと}を爾^{なんじ}の身^みと偕に興し給へり。主^{おほ}よ、光榮^{こうえい}
は爾^{なんじ}に歸す。

又至聖なる生神女の讚頌、第七調。

句、我爾の名を萬世に誌さしめん。
童貞^{どうていじよ}女^{なんじ}よ、爾^{われ}は無形^{むけい}の日の東^ひと爲れり、彼は出でて、西^{ひがし}に在りし我等^{われ}の性^{せい}に臨み給
へり。至りて讚美^{さんび}たる生神女^{しょうしんじよ}よ、勇^{いさみ}を有つ者として、彼^{かれ}に我等^{われ}の靈^{たましい}を無量^{むりやう}の諸罪^{しよざい}よ
り解かんことを祈り給へ。

句、女^{じよ}よ、之^{これ}を聴き、之^{これ}を觀、爾^{なんじ}の耳^{みみ}を傾けよ。

童貞女よ、爾はイエッセイの根より出でて、迷の植物を根より絶しし者を生み給へり。讚美たる者よ、勇を有つ者として、常に彼に祈りて、我が心の諸慾を根より絶し、彼を畏るる畏を其内に植えて、我を救はんことを求め給へ。

句、民中の富める者は爾の顔を拜まん。

神の門たる至聖なる童貞女よ、我を地獄の門より脱れしめて、我に痛悔の途を示し給へ、我が之に由りて生命に入る門を獲ん爲なり。迷ひし者の嚮導者よ、信者の族を護りて、我等の靈を救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

至聖なる生神童貞女よ、爾より言ひ難くハリストス我が神、實に永久なる神、及び新なる人は生れ給へり。彼は神として永在なる者なり、人として我等の爲に斯く爲りき、故に兩性の質を以て我等を救ふ。神性を以て奇跡を耀かし、人性を以て苦を受く、惟一なる者にして人として死し、神として興き給ふ。婚姻に與らざる潔き者よ、彼に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に主日の讚詞。

光榮、今も、其生神女讚詞、并に發放詞。

~~~~~

第七調 「スポタ」の小晩課 四七五

第七調 「スポタ」の大晩課 四七六

「スポタ」の大晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十句を立てて主日の左の讚頌を歌ふ、第七調。ダマスクのイオアンの作。

句、我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ。來りて、死の權を滅し、人類を照しし主の爲に喜びて、無形の者と共に呼ばん、吾が造成主及び救世主よ、光榮は爾に歸す。

句、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

救世主よ、爾は我等の爲に十字架と葬とを忍び、神なるに因りて死を以て死を滅し給へり。故に我等爾の三日目の復活に伏拜す。主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

使徒等は造成主の復活を見て、奇として、諸天使の讚美を歌へり、是は教會の光榮なり、是は國の富なり。我等の爲に苦を受けし主よ、光榮は爾に歸す。

又讚頌、アナトリーの作。同調。

句、願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

ハリストスよ、不法の人人に執はれたれども、爾は我の神なり、我耻ぢず、肩を打たれたれども、我諱まず、十字架に釘せられたれども、我隠さず、我爾の復活を誇

る、蓋爾の死は我の生命なり。全能にして人を愛する主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

ハリストスはダビドの預言を行ひて、シオンに於て己の尊大なるを門徒に顯して、己が常に父及び聖神と偕に讚美讚榮せらるる者なるを示せり。蓋彼は先に無形なる言にして、後に我等の爲に身を取り、人と爲りて殺され、權を以て復活せし仁愛の主として讚榮せらる。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

ハリストスよ、爾は欲せし如く地獄に降り、神及び主宰として死を滅し、三日目に復活して、アダムを地獄の桎梏及び朽壞より己と偕に復活せしめて、呼ばしめたり、獨人を愛する主よ、光榮は爾の復活に歸す。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

主よ、爾は寝ぬる者の如く墓に置かれ、能力の強き者として三日目に復活し、全能者としてアダムを己と偕に死の朽壞より復活せしめ給へり。

又生神女の讚頌、アモレイのパワェルの作。第二調。

第七調 「スポタ」の大晩課 四七七

第七調 「スポタ」の大晩課 四七八

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

讚美たる女宰、我等の轉達者よ、爾は天使等の歡喜、爾は人人の光榮、爾は信者の倚頼なり。神の聘女よ、我等爾を讚め歌ふ衆人は凡の危難の中に爾に趨り附く、爾の祈禱を以て敵の矢と、靈の惱と、種種の憂より脱れん爲なり。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

讚美たる生神女、夫を識らずして身にて世界の爲に神及び救世主を生みし女宰、獨ハリストティアニン等の避所なる者よ、爾は私の倚頼、爾は私の轉達者と、垣牆と、避所なり。爾の祈禱を以て我等を圍む誘惑と、危難と、患難より脱れしめ給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

生神童貞女よ、我が肉體の動揺を止め、我が慾の焰を滅し、我が望の惡熱を我より退け、我が頑固なる風習を改めて、我を惡鬼の攻撃より護り給へ、我が心の安靜、我が靈の無慾の中に爾讚美たる者を讚め歌はん爲なり。

光榮、今も、生神女讚詞。

生神女よ、爾は性に超えて母と識られ、言と智識に踰えて童貞女に止まれり、舌は爾の産の奇跡を言ふ能はず。蓋潔き者よ、爾の降孕は至榮にして、産の状は悟り難し、神の欲する所には天性の法勝たるればなり。故に我等皆爾を神の母と識りて、切に爾に求む、我等の靈の救はれんことを禱り給へ。

次ぎて「穩なる光」。提綱、「主は王たり」。其他常例の如し。

挿句に主日の讃頌、第七調。

世界の救主よ、爾は墓より復活して、人人を爾の身と偕に興し給へり。主よ、光榮は爾に歸す。

他の讃頌。

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

來りて、死より復活して、萬有を照しし主に伏拜せん、蓋彼は我等を地獄の苛虐より釋きて、其三日目の復活を以て我等に生命と大なる憐とを賜へり。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。

仁愛の主ハリストスよ、爾は地獄に降りて、死を虜にし、三日日に復活して、我等爾の全能の復活を讃榮する者を共に復活せしめ給へり。

句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

主よ、爾は寝ぬる者の如く墓に臥して、威嚴なる者と現れ、全能者として三日目に

第七調 「スポタ」の大晩課 四七九

第七調 「スポタ」の大晩課 四八〇

復活し、アダムを己と偕に復活せしめて、呼ばしめたり、獨人を愛する主よ、光榮は爾の復活に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

女宰よ、我等地に生るる者は皆爾の帡幪の下に趨り附きて、爾に呼ぶ、生神女、我が憑恃よ、我等を無数の愆尤より援けて、我等の靈を救ひ給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に、

主日の讃詞、第七調。

ハリストス神よ、爾は十字架にて死を滅し、盜賊の爲に樂園を開き、攜香女の悲を慰め、使徒に爾が復活して世界に大なる憐を賜ひしを傳へさせ給へり。

光榮、今も、生神女讃詞。

讃美たる者よ、爾我が復活の寶藏として、爾を頼む者を諸罪の穴及び淵より引き上げ給へ。蓋爾生む前に、童貞女、生む時も童貞女、生みて後も猶童貞女に止まる者は、我等の拯救を生みて、罪に服せし者を救ひ給へり。

次に發放詞。



「スポタ」の晩堂課

至聖なる生神女の規程、第七調。

第一歌頌

イルモス、己の臂にて敵を敗りて、騎兵軍將を沈めし主を、我等の贖罪主神として歌はん、彼光榮を顯したればなり。

附唱、至聖なる生神女よ、我等を救ひ給へ。

潔き者よ、我等は歌と感謝とを獻物として爾に奉りて慶べよと呼ぶ、爾我等に悲哀に易へて歡喜を賜ひしに因る。

至淨なる者よ、我等爾の仁慈の諸恩と帡幪の堅固とを崇め讚めん、爾我等を甚しき患難より救ひたればなり。 光榮

至淨なる者よ、我等は爾の母たる祈祷を以て種種の誘惑及び憂患より救はれて、皆心を合せて熱切に感謝の歌を爾に奉る。

### 今も

至淨なる者よ、爾は金繡の衣の如く諸徳と聖神の恩寵とに妝はれ、父の聘女として飾られて、實に神の母と現れ給へり。

### 第三歌頌

第七調 「スボタ」の晩堂課 四八一

第七調 「スボタ」の晩堂課 四八二

イルモス、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの能力を備へし主・救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。

我等の爲に神聖なる歡喜を生みし者に我等熱心に感謝の歌を奉りて、彼を我が轉達者として尊む。

聘女ならぬ母よ、我等皆爾に因りて諸難より脱れ、爾に由りて喜を獲たる者は爾を仁慈なる賦予者、及び讚美たる保護者として讚榮す。

### 光榮

ハリストス神の母よ、我等は爾の神聖なる祈祷に因りて諸罪諸難より救はれて、感謝の聲を以て熱信に爾を諸恩の縁由として崇め歌ふ。

### 今も

ハリストス神の母、我等の恩者は常に不死の喜悅の流を注ぎて、凡そ彼に趨り附く者を救ひ給ふ。

### 第四歌頌

イルモス、ハリストス神、人を愛する主よ、爾の攝理に由りて、爾の言ひ難き智慧の光榮は天を蔽へり。

潔よき童貞女よ、我等は爾の祈祷に因りて患難より救はれて、爾に適ふ喜の歌を樂しみて爾に奉る。

潔よき童貞女よ、我等は多くの憂ひより救はれて、喜びて感謝の歌を爾に奉る。

### 光榮

諸愆諸罪は多くの患難を我等に及せり。 潔き者よ、爾の神聖なる帡幪を以て我等を救ひ給へ。 今も

至淨なる生神女よ、爾を尊む者は實に福なり、蓋我等は爾に因りて罪及び憂より救はれたり。

## 第五歌頌

イルモス、ハリストスよ、夜は信ぜざる者の爲に明るからず、信者の爲には爾の言を甘ずるに因りて明るし。故に我朝の禱を爾に奉りて、爾の神性を讃め歌ふ。

童貞女よ、爾罪を滅す主ハリストスを生みしに、世界は彼に因りて諸難諸病より救はれたり。故に憂より脱れたる我等も爾に呼ぶ、慶べ。

潔き女宰よ、我等諸の災禍、憂愁、悲哀、及び甚しき誘惑ひに圍まれしに因りて望を失ひし者は爾を歡喜の頼として獲たり。

## 光榮

第七調 「スポタ」の晩堂課 四八三

第七調 「スポタ」の晩堂課 四八四

潔き者よ、爾は我等爾の諸僕の爲に救の避所として、諸難を遠ざけて、我等を之に害せられざる者として守り給ふ。故に我等爾の多くの恩に與る者は歌を以て爾に感謝す。

## 今も

至淨なる女宰よ、我等爾に因りて多くの罪、病、疾、及び甚しき誘惑より救はれて、爾に感謝す、蓋爾は信なる爾の諸僕の爲に堅固なる恃頼なり。

## 第六歌頌

イルモス、仁慈なる主よ、我罪の深處に陥りて、イオナが鯨より呼びし如く爾に呼ぶ、人を愛する主よ、我が生命を淪滅より引き上げて、我を救ひ給へ。

潔き者よ、天使等の口は宜しきに合ひて爾の讚美を歌ふ能はず。我等爾の諸僕は今敬みてガウリイルの如く慶べよを爾に奉る。

潔き生神童貞女よ、我等罪に由りて憂愁と災禍との深處に陥りたる者は爾に因りて其中より脱るるを得たり。

## 光榮

潔よき者よ、全世界は職として敬みて爾の諸恩の爲に爾に感謝と、讚美と、讚榮とを捧ぐべし、蓋我等は爾に由りて憂愁患難より救はれたり。

## 今も

至淨なる童貞女よ、我等熱信に爾を讚榮する者は夜に晝に、顯に隱に爾の帡幪の下に趨り附く。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

## 坐誦讚詞、第七調。

主よ、我等は爾の民、爾の草場の羊なり。牧師として我等迷ひし者を還し、我等誘惑に由りて散されし者を聚め給へ。獨罪なき者よ、生神女の祈禱に因りて爾の群を憐み、爾の民に慈憐を垂れ給へ。

## 第七歌頌

イルモス、敬虔の少者は火の爐に擲たれて、火を易へて露と爲し、歌を以て呼べり、主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

神の母よ、我等喜びて爾に感謝を奉る、實に爾に依りて凶悪者の凡の害より救は

れたればなり、心<sup>こころ</sup>を合<sup>あ</sup>せて爾<sup>なんじ</sup>に歌<sup>うた</sup>ふ、爾<sup>なんじ</sup>は祝<sup>しゆくふく</sup>福<sup>ふく</sup>せられたり。  
童<sup>どうていじよ</sup>貞<sup>じん</sup>女<sup>にょ</sup>よ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>夕<sup>ゆうべ</sup>に憂<sup>うれい</sup>に在<sup>あ</sup>りて禍<sup>わざわい</sup>を待<sup>ま</sup>てり、然<sup>しか</sup>れども爾<sup>なんじ</sup>の慈<sup>じれん</sup>憐<sup>れん</sup>なる帡<sup>おおい</sup>幪<sup>こうむ</sup>を蒙<sup>まう</sup>りて、  
朝<sup>あさ</sup>に喜<sup>よろこび</sup>を獲<sup>え</sup>たり、爾<sup>なんじ</sup>我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>を救<sup>すく</sup>ひたればなり。

光榮

至<sup>しじょう</sup>淨<sup>じよう</sup>なる者<sup>もの</sup>よ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>皆<sup>みな</sup>爾<sup>なんじ</sup>を神<sup>しん</sup>聖<sup>せい</sup>なる避<sup>かく</sup>所<sup>れが</sup>、及<sup>およ</sup>び神<sup>かみ</sup>の前<sup>まえ</sup>に轉<sup>てん</sup>達<sup>たつ</sup>者<sup>しや</sup>として獲<sup>え</sup>て、患<sup>かん</sup>難<sup>なん</sup>、窘<sup>きん</sup>逐<sup>ちく</sup>、  
諸<sup>しよざい</sup>罪<sup>うら</sup>の中に爾<sup>なんじ</sup>に趨<sup>はし</sup>り附<sup>つ</sup>きて、爾<sup>なんじ</sup>に由<sup>よ</sup>りて脱<sup>のが</sup>るるを得<sup>う</sup>。

今も、

第七調 「スポタ」の晩堂課 四八五

第七調 「スポタ」の晩堂課 四八六

光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>にして至<sup>しじょう</sup>淨<sup>じよう</sup>なる童<sup>どうていじよ</sup>貞<sup>じん</sup>女<sup>にょ</sup>よ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>は口<sup>くち</sup>と心<sup>こころ</sup>とを以<sup>もつ</sup>て爾<sup>なんじ</sup>の祈<sup>きとう</sup>禱<sup>おん</sup>の恩<sup>つた</sup>を傳<sup>け</sup>ふ、蓋<sup>けだし</sup>皆<sup>みな</sup>爾<sup>なんじ</sup>  
に依<sup>よ</sup>りて患<sup>かん</sup>難<sup>なん</sup>と颶<sup>くふう</sup>風<sup>はな</sup>、甚<sup>はな</sup>しき憂<sup>うれい</sup>、及<sup>およ</sup>び諸<sup>しよ</sup>慾<sup>よく</sup>に由<sup>よ</sup>る罪<sup>つみ</sup>より救<sup>すく</sup>はる。

### 第八歌頌

イルモス、世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>の造<sup>ぞう</sup>成<sup>せい</sup>主<sup>しゆ</sup>ヘル<sup>ため</sup>ワ<sup>おそ</sup>ィム<sup>め</sup>の爲<sup>た</sup>に畏<sup>おそ</sup>るべく、セラ<sup>ため</sup>フ<sup>き</sup>ィム<sup>い</sup>の爲<sup>た</sup>に奇<sup>き</sup>異<sup>い</sup>なる主<sup>しゆ</sup>を、  
司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>等<sup>ら</sup>と諸<sup>しよ</sup>僕<sup>ぼく</sup>と諸<sup>しよ</sup>義<sup>ぎ</sup>人<sup>にん</sup>の靈<sup>たましい</sup>よ、歌<sup>うた</sup>ひ、崇<sup>あが</sup>め、世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に彼<sup>かれ</sup>を讚<sup>ほ</sup>め揚<sup>あ</sup>げよ。

仁<sup>じん</sup>慈<sup>じ</sup>なる生<sup>しやう</sup>神<sup>しん</sup>女<sup>にょ</sup>よ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>は爾<sup>なんじ</sup>の祈<sup>きとう</sup>禱<sup>もつ</sup>を以<sup>しよ</sup>て諸<sup>しよ</sup>罪<sup>ざい</sup>諸<sup>しよ</sup>慾<sup>よく</sup>の暴<sup>あらし</sup>風<sup>およ</sup>及<sup>わざわい</sup>び災<sup>の</sup>禍<sup>もの</sup>より脱<sup>のが</sup>れし者<sup>もの</sup>と  
して感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>の聲<sup>こゑ</sup>を以<sup>もつ</sup>て爾<sup>なんじ</sup>に呼<sup>よ</sup>ぶ、慶<sup>よろこ</sup>べ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>爾<sup>なんじ</sup>に依<sup>よ</sup>りて悲<sup>かな</sup>しきより喜<sup>よろこ</sup>びに移<sup>うつ</sup>りたればなり。

仁<sup>じん</sup>慈<sup>じ</sup>にして至<sup>しじょう</sup>淨<sup>じよう</sup>なる者<sup>もの</sup>よ、諸<sup>しよ</sup>病<sup>びやう</sup>諸<sup>しよ</sup>難<sup>なん</sup>に圍<sup>かこ</sup>まるる我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>を棄<sup>す</sup>てずして、不<sup>ふ</sup>當<sup>とう</sup>なる祈<sup>いの</sup>禱<sup>り</sup>を聽<sup>き</sup>  
きて、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>を大<sup>おほ</sup>なる憂<sup>うれい</sup>患<sup>わづら</sup>ひより解<sup>と</sup>き給<sup>たま</sup>へ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>が信<sup>しん</sup>を以<sup>もつ</sup>て爾<sup>なんじ</sup>の祈<sup>きとう</sup>禱<sup>おん</sup>を歌<sup>か</sup>頌<sup>しょう</sup>せん爲<sup>た</sup>なり。

### 光榮

諸<sup>しよ</sup>罪<sup>ざい</sup>を滅<sup>ほろ</sup>す主<sup>しゆ</sup>を生<sup>う</sup>みし生<sup>しやう</sup>神<sup>しん</sup>女<sup>にょ</sup>よ、爾<sup>なんじ</sup>の神<sup>しん</sup>聖<sup>せい</sup>なる祈<sup>きとう</sup>禱<sup>もつ</sup>を以<sup>われ</sup>て我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>を諸<sup>もろ</sup>の憂<sup>うれい</sup>愁<sup>しう</sup>、災<sup>わざわい</sup>禍<sup>くわ</sup>、  
諸<sup>しよ</sup>慾<sup>よく</sup>、及<sup>およ</sup>び誘<sup>おほ</sup>惑<sup>おほ</sup>より防<sup>ふ</sup>ぎ護<sup>まも</sup>りて、此<sup>これ</sup>等<sup>ら</sup>より脱<sup>のが</sup>れしめ給<sup>たま</sup>へ。

今も

ハ<sup>じん</sup>リ<sup>じ</sup>スト<sup>ス</sup>仁<sup>じん</sup>慈<sup>じ</sup>なる救<sup>きゆう</sup>世<sup>せい</sup>主<sup>しゆ</sup>よ、爾<sup>なんじ</sup>を生<sup>う</sup>みし者<sup>もの</sup>の祈<sup>きとう</sup>禱<sup>よ</sup>に由<sup>つね</sup>りて恒<sup>しゆ</sup>に衆<sup>じゆ</sup>人<sup>じん</sup>に爾<sup>なんじ</sup>の洪<sup>こう</sup>恩<sup>おん</sup>は  
降<sup>くだ</sup>され、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>「ハ<sup>じん</sup>リ<sup>じ</sup>ス<sup>ティ</sup>ア<sup>ニ</sup>ン」等<sup>ら</sup>は爾<sup>なんじ</sup>の慈<sup>じれん</sup>憐<sup>れん</sup>を蒙<sup>こうむ</sup>る。

### 第九歌頌

イルモス、性<sup>せい</sup>に超<sup>こ</sup>えて母<sup>はは</sup>、性<sup>せい</sup>に順<sup>したが</sup>ひて童<sup>どうていじよ</sup>貞<sup>じん</sup>女<sup>にょ</sup>、女<sup>おんな</sup>の中に獨<sup>ひとり</sup>祝<sup>しゆく</sup>讚<sup>くさん</sup>せらるる者<sup>もの</sup>を、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>信<sup>しん</sup>者<sup>じゃ</sup>  
は歌<sup>うた</sup>を以<sup>もつ</sup>て生<sup>しやう</sup>神<sup>しん</sup>女<sup>にょ</sup>として崇<sup>あが</sup>め讚<sup>ほ</sup>む。

生<sup>しやう</sup>神<sup>しん</sup>童<sup>どう</sup>貞<sup>じん</sup>女<sup>にょ</sup>よ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>爾<sup>なんじ</sup>の祈<sup>きとう</sup>禱<sup>よ</sup>に由<sup>もろ</sup>りて諸<sup>いざ</sup>の誘<sup>ない</sup>惑<sup>すく</sup>より救<sup>すく</sup>はるる者<sup>もの</sup>は今<sup>いま</sup>宜<sup>よろ</sup>しき<sup>かな</sup>に合<sup>あ</sup>ひて  
呼<sup>よ</sup>ぶ聲<sup>こゑ</sup>を以<sup>もつ</sup>て天<sup>てん</sup>使<sup>し</sup>ガ<sup>う</sup>ウ<sup>り</sup>ィル<sup>る</sup>と偕<sup>とも</sup>に爾<sup>なんじ</sup>に慶<sup>よろこ</sup>べよを奉<sup>たてまつ</sup>る。

婚<sup>こん</sup>姻<sup>いん</sup>に與<sup>あ</sup>らざる童<sup>どうていじよ</sup>貞<sup>じん</sup>女<sup>にょ</sup>よ、爾<sup>なんじ</sup>は我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>に神<sup>しん</sup>聖<sup>せい</sup>なる喜<sup>よろこ</sup>と樂<sup>たの</sup>とを與<sup>あた</sup>へ給<sup>たま</sup>ふ、蓋<sup>けだし</sup>視<sup>み</sup>よ、  
我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>嘗<sup>かつ</sup>て甚<sup>はな</sup>しく憂<sup>うれい</sup>ひたる者<sup>もの</sup>は爾<sup>なんじ</sup>の祈<sup>きとう</sup>禱<sup>よ</sup>に由<sup>よ</sup>りて喜<sup>よろこ</sup>を獲<sup>え</sup>たり。

### 光榮

童<sup>どうていじよ</sup>貞<sup>じん</sup>女<sup>にょ</sup>よ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>は舌<sup>した</sup>と心<sup>こころ</sup>とを以<sup>もつ</sup>て讚<sup>さん</sup>美<sup>び</sup>の祭<sup>まつり</sup>、感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>の歌<sup>うた</sup>、及<sup>およ</sup>び熱<sup>ねつ</sup>切<sup>せつ</sup>なる祈<sup>きとう</sup>禱<sup>なんじ</sup>を爾<sup>なんじ</sup>に奉<sup>たてまつ</sup>  
る、願<sup>ねが</sup>はくは爾<sup>なんじ</sup>に因<sup>よ</sup>りて憂<sup>うれい</sup>の日<sup>ひ</sup>に救<sup>すく</sup>はれん。

今も

至<sup>しじょう</sup>淨<sup>じよう</sup>なる者<sup>もの</sup>よ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>敬<sup>けい</sup>虔<sup>けん</sup>の心<sup>こころ</sup>を抱<sup>いだ</sup>きて爾<sup>なんじ</sup>と偕<sup>とも</sup>に神<sup>しん</sup>聖<sup>せい</sup>なる爾<sup>なんじ</sup>の産<sup>さん</sup>を喜<sup>よろこ</sup>ぶ、蓋<sup>けだし</sup>爾<sup>なんじ</sup>は我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>  
を患<sup>かん</sup>難<sup>なん</sup>憂<sup>うれい</sup>愁<sup>しう</sup>より救<sup>すく</sup>ひて、喜<sup>よろこ</sup>を注<sup>そそ</sup>ぎ給<sup>たま</sup>へり。故<sup>ゆゑ</sup>に我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>熱<sup>ねつ</sup>信<sup>しん</sup>に爾<sup>なんじ</sup>を讚<sup>ほ</sup>め歌<sup>うた</sup>ひて、感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>の歌<sup>うた</sup>  
を奉<sup>たてまつ</sup>る。

次ぎて「常に福にして」。聖三祝文。「天に在す」の後に本調の小讃詞。其他常例の如し、并に發放詞。

~~~~~

第七調 「スポタ」の晩堂課 四八七
第七調 主日の夜半課 四八八

主日の朝、夜半課

生命を施す至聖なる三者の規程、其冠詞は、聖三者、一元なる神性よ、爾を崇め讃む。
ミトロファンの作。第七調。

第一歌頌

イルモス、主よ、曾て流れ易き性の水は爾の瞬にて地の姿に變れり、故にイズラ
イリは足を濡らさず渡りて、凱歌を爾に歌ふ。

附唱、至聖なる三者、我等の神よ、光榮は爾に歸す。
三光なる惟一者、萬有の神よ、我に心の無形の口と肉體の唇とを爾の讚美の爲に啓きて、爾光を施す主に感謝の歌を歌はしめ給へ。

能力の無量なる三者よ、爾は己の仁慈の溢るるを示さん爲に人を造り給へり、是れ唯爾原因たる造成主の塵に屬する像のみ。
無原なる智慧、同永在なる言を生み、同無原の神を輝かしし主よ、我等に爾性の惟一にして三位なる神に伏拜するを得しめ給へ。

生神女讃詞

神の言よ、爾はモイセイに棘の中に潔を爲す火、聊も焚かざる者として現れたり、是れ爾が童貞女より身を取りて、此を以て人人を改め造りしことを預象せり。

第三歌頌

イルモス、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの能力を備へし主・救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。

能力の無量なる神よ、我等爾惟一三光にして全功なる主宰を讃め歌ひて、諸罪及び誘惑より救はるるを求む、願はくは信を以て爾の仁慈を讚榮する者を棄てざらん。
無原なる根よりするが如く父より神言は芽として現れ、之と同能なる聖神は出で給へり、故に我等信者は位の三なる惟一の神を讚榮す。

我等衆信者は同榮にして三位なる神性を分れず又分れたる一元の三者として讚榮し、伏拜して諸罪の赦を求む。

生神女讃詞

神の言よ、爾は本性を易へずして萬事に於て人と同じくなり、潔き童貞女より出

第七調 主日の夜半課 四八九

第七調 主日の夜半課 四九〇

でて、衆人に三光の神元、變易なき三位の惟一なる神性を示し給へり。

次ぎて主憐めよ、三次。

セダレン
坐誦讚詞、第七調。

せい さんしや つみ おか なんじ しよ ぼく あわれ たま じんじ しゆ なんじ まえ つうかい もの
聖なる三者よ、罪を犯しし爾の諸僕を憐み給へ、仁慈なる主よ、爾の前に痛悔する者
を納れて、赦を獲しめ給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

じゆんけつ しょうしんじよ つみ よ なや われら たましい いや たま かみ よめ なんじ
純潔なる生神女よ、罪に由りて悩まされたる我等の靈を醫し給へ、神の聘女よ 爾
を歌ふ者を罪過より救ひ給へ。

第四歌頌

イルモス、ちち ふところ はな ち くだ かんじ かんじ おもんばかり ひみつ
イルモス、父の懷を離れずして、地に降りしハリストス神よ、我爾の慮の秘密
を聞きて、爾獨人を愛する主を讚榮せり。

ぜん の う さんこう ゆいいちしや ばんしゆう げんいん およ きゆうしよく しゆ いまなんじ うた もの まも うれい
全能なる三光の惟一者、萬衆の原因及び救贖なる主よ、今爾を歌ふ者を護りて、憂
と、諸愆と、凡の害より救ひ給へ。

ひと あい しゆ われら なんじ ほか がた さんこう しんせい しめ めいしよう かい なんじ
人を愛する主よ、我等は爾の量り難き三光なる神性を示す名稱を解せずして、爾を
歌頌し、爾の力を讚榮す。

ゆいいちしや およ さんしや われら わけい ひんい とち てん お ごと ち おい なんじ わか
惟一者及び三者よ、我等は無形の品位と偕に天に於けるが如く地に於て爾を分れず
して分れ、愛を以て萬有を司る主として讚榮す。

生神女讚詞

えいざい しゆ なんじ ちち こうえい はな じんじ よ あまん われら いや
永なる主よ、爾は父の光榮を離れずして、仁慈なるに因りて甘じて我等の卑しき
に降り、人體を取りて、之を神聖なる光榮に升せ給へり。

第五歌頌

イルモス、よ しん もの ため あか しんじや ため なんじ ことば
イルモス、ハリストスよ、夜は信ぜざる者の爲に明るからず、信者の爲には爾の言
を甘ずるに因りて明るし。故に我朝の禱を爾に奉りて、爾の神性を讃め歌ふ。

ひかり げんいん しんせい くらい みつ ぎてい こうえい さんき われら
光の原因たる神性、位の三にして議定と、光榮と、尊貴とに於て惟一なる主よ、我等
を爾の愛に堅め給へ。

われら ちえ ことば しん ゆいいち しんげん さんにちこう しんせい さんえい もろもろ いざない およ うれい
我等は智慧と、言と、神、惟一なる神元、三日光の神性を讚榮して、諸の誘惑及び憂愁
より救はれんことを求む。

生神女讚詞

かみ ことば なんじ せい どうていじよ ひと せい き ゆいいちしや うち どうせいどう ほうざ さんしや うた
神の言よ、爾は聖なる童貞女より人の性を衣て、惟一者の中に同性同寶座の三者を歌
はんことを教え給へり。

第六歌頌

イルモス、われよ おもんばかり ふち ただよ われ おお しょうざい なみ おほ たましい
イルモス、ハリストスよ、我世の慮の淵に漾ひ、我を覆へる諸罪の濤に溺れ、靈

第七調 主日の夜半課 四九一

第七調 主日の夜半課 四九二

ほろぼ もうじゆう なげう ごと なんじ よ し いた ふかみ われ ひ あ たま
を滅す猛獸に擲たれて、イオナの如く爾に呼ぶ、死を致す深處より我を引き上げ給
へ。

われら どうえい けん の う いちげん しんせい みつ くらい おい たがい へんえき ただ かくい しつ こと
我等は同榮なる權能、一元なる神性、三の位に於て互に變易なくして惟各位の質を異
にする主を讚榮す。

華麗なる天使の無形の品位は三日光の神元を讚美す。彼等と偕に我等も塵に屬する口を以て萬有の惟一なる原因を歌ひて、信を以て讚榮す。

生神女讚詞

童貞女は測り難き言に因りて言を生めり、是れ世の先に日たる父より輝ける他の日が末の時に於て童貞女より輝き出でしなり、彼は三位に於て惟一なる悟り難き神を傳へ給へり。

坐誦讚詞、第七調。

一性なる三者、三位なる惟一者、不死なる主よ、爾が造りし者を憐み、罪を行ふ者の悪を焼きて、爾の仁慈を歌ふ者の心を照し給へ。我が神よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讚詞。

女宰、無玷なる生神女よ、爾の慈憐の恩寵は日よりも明に、光よりも効力ありて、人人の罪を焼き、爾の偉大なるを讚め揚ぐる者の心を潤す。

第七歌頌

イルモス、敬虔の少者は火の爐に擲たれて、火を易へて露と爲し、歌を以て籲べり、主我が先祖の神よ、爾は崇め讚めらる。

永遠に輝ける三光の神、近づき難き永在の惟一者なる主宰よ、敬虔に爾を信じて、爾に伏拜する者を救ひ給へ。

我等は神聖なる預言者の言に従ひて、惟爾獨一なる萬有の神を三位の中に讚榮して、斯く呼ぶ、主我が先祖の神よ、爾は崇め讚めらる。

聖なる三者よ、我等は塵に屬する口にて無形の品位と偕に歌を以て爾を惟一の神性の中に歌ひて呼ぶ、主我が先祖の神よ、爾は崇め讚めらる。

生神女讚詞

純潔なる者よ、アダムを造りし主は之を改め造らん爲に爾に由りて人と爲り、人人を神成して、斯く呼ばしむ、至淨なる者よ、爾の腹の果は祝福せられたり。

第八歌頌

イルモス、燃ゆれども焚けざるシナイの棘は口鈍く言澁るモイセイに神を顯せり。神

第七調 主日の夜半課 四九三

第七調 主日の夜半課 四九四

を慕ふ熱心は三人の少者を火に焚かれざる者と爲して、歌はしめたり、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讚め揚げよ。

聖三者よ、三光の日の輝ける光線にて爾を歌ふ者の心の照さるるを得しめ給へ。惟一なる神よ、凡そ宜しきに合ふ信を以て萬世に爾の大なるを歌頌する者に其能するに従ひて恒の爾の華麗を仰ぐを得しめ給へ。

三位にして惟一なる無原の主宰よ、爾は萬有を保ちて、天地を司り給ふ。故に我を護りて、爾を愛する愛を以て恒に爾に歌はしめ給へ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讚め揚げよ。

仁愛なる恩主よ、我を爾の輝ける三光の殿と爲して、我を見えざる諸敵に近づかれず、肉體の諸慾に與らざる者と顯し給へ。一元なる我が神、主宰、光榮の主よ、我に爾を萬世に歌頌するを得しめ給へ。

生神女讚詞

至淨なる神の母よ、神元なる光は爾の腹より耀き出でて、全世界を三日の光にて照し、地を他の天の如き者と爲して、歌はしむ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

第九歌頌

イルモス、神の母又童貞女、生みし者又童貞を守る者、此れ天性の事に非ずして、神の寛容の事なり。故に我等は爾が獨斯る神の奇蹟に勝ふる者と爲りしを常に崇め讃む。

セラフィム等が最高きに於て絶えず歌頌する爾を我等塵に屬する者は宜しきに合ひて讚美して歌ふ能はざれども、勇を得て、萬有の主宰及び至りて人を愛する神として崇め讃む。

惟一にして分れざる三者よ、爾を歌ふ者を肉體の諸病と靈の諸慾より救ひて、凡の度生の誘惑に悩まされざる者として護らるるを得しめ給へ。

全能なる神元、三光なる權柄、變易せざる永在の仁慈よ、爾の諸僕に諸罪の赦を與へて、之を誘惑及び諸慾より脱れしめ給へ。

生神女讚詞

生神女よ、神言は智慧と靈と肉體の合成とを爾の至淨なる胎より受けて、實に人と現れて、人を神の性に與る者と爲し給へり。

次にグリゴリイ、シナイトの聖三讚歌、「爾神言を讚榮するは」、及び其夜半課の式。本書の末に載す。

~~~~~

第七調 主日の夜半課 四九五

第七調 主日の早課 四九六

### 主日の早課

六段の聖詠畢りて「主は神なり」、第七調に依りて歌ひ、後主日の讚詞、「ハリストス神よ、爾は十字架にて死を滅し」、二次。光榮、今も、生神女讚詞、「讚美たる者よ、爾我が復活の寶藏」。次に聖詠經の常例の誦讀。

### 第一の誦文の後に主日の坐誦讚詞、第七調。

生命は墓の内に臥し、印は石の上に貼けられ、兵卒は寝ぬる王の如くハリストスを守り、天使は不死の神として彼を讚榮し、女等は呼べり、主は復活して、世界に大なる憐を賜へり。

句、主我が神よ、起きて、爾の手を挙げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。  
人を愛する主として爾の三日の葬にて死を攜にし、爾の生命を施す復活にて朽ち  
たる人を復活せしめしハリストス神よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

生神童貞女よ、我等の爲に十字架に釘せられて復活し、死の權を滅ししハリストス吾  
が神に我等の靈を救はんことを恒に祈り給へ。

第二の誦文の後に主日の坐誦讃詞、第七調。

ハリストス神よ、墓は封印せられしに、爾生命たる者は墓より輝き出で、門は閉ぢ  
たるに、爾萬衆の復活なる者は門徒に現れて、彼等を以て我等に眞實の神を賜へり、  
爾の大なる憐に因りてなり。

句、主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。

兵卒が爾萬有の王を守れるに、女等は涙を流し香料を攜へて、墓に趨り、相語りて曰  
へり、誰か我等の爲に石を移さんと。大なる議事の使者は死を蹈みて復活せり。全能  
の主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

恩寵を蒙れる生神童貞女、人類の避所及び轉達なる者よ、慶べ、世界の救主が爾よ  
り身を取りたればなり、爾は獨母及び童貞女、恒に祝福讚美せらるる者なり。ハリス  
トス神に全地に平安を賜はんことを祈り給へ。

應答歌、第七調。

我等の形を取り、身にて十字架を忍び給ひしハリストス神よ、爾の復活を以て我を救  
ひ給へ、爾は人を愛する主なればなり。

品第詞、第七調。第一偈和詞。毎句復唱す。

ンオンの虜を迷より返しし救世主よ、我をも生かして、愆の奴役より脱れしめ給へ。

第七調 主日の早課 四九七

第七調 主日の早課 四九八

南風の時に齋と涙とを以て悲を播く者は、喜を以て永生の糧の束を刈らん。

光榮、

聖神には神聖なる寶の泉あり、彼より睿智、知識、敬畏は賜はる。彼に讚美と光榮、  
尊敬と權柄は歸す。

今も、同上。

第二偈和詞

若し主靈の家を造らざば、我等徒に勞す、蓋彼を外にしては、行も言も成らず。  
諸聖人は聖神に藉りて腹の果として、神の子と爲す諸父の教を生ず。

光榮

聖神には萬物の存在は繋る、蓋彼は萬有の先より在す神、一切の者の主、近づき難  
き光、萬有の生命なり。

今も、同上。

第三偈和詞

主を畏れて生命の道を得たる者は、今も何時も不朽の光榮の中に福樂を享く。

牧師長よ、爾の諸子が枝の如く爾の席を環れるを見て、喜び樂しみて、之をハリス  
トスに攜へよ。 光榮

聖神より恩賜の充滿、光榮の富、議事のなる深みは賜はる、彼は父及び子と同榮  
にして奉事せらるればなり。 今も、同上。

### 提綱、第七調。

主我が神よ、起きて、爾の手を挙げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。句、主  
よ、我心を盡して爾を讚め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。

「凡そ呼吸ある者」。句、「神を其聖所に讚め揚げよ」。

主日の福音經。「ハリストスの復活を見て」。第五十聖詠。及び其他次第に循ふ。

### 主日の規程、第七調。

#### 第一歌頌

イルモス、主よ、曾て流れ易き性の水は爾の瞬にて地の姿に變れり、故にイズラ  
イリは足を濡らさず渡りて、凱歌を爾に歌ふ。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主よ、爾非義の裁判を以て死に擬定せられしに、死の權は木に縁りて擬定せられた  
り、故に闇冥の君は爾に勝つ能はずして、義に合ひて逐はれたり。

救世主よ、地獄は爾に近づきたれども、齒を以て爾の身を碎く能はずして、頤を壞  
られたり。故に爾は死の苦しみを滅して、三日目に復活し給へり。

#### 生神女讚詞

第七調 主日の早課 四九九

第七調 主日の早課 五〇〇

至淨なる者よ、原母エワの苦は釋かれたり、爾苦を免れ、夫に與らずして生み  
たればなり。故に我等皆明に爾を生神女と知りて讚榮す。

### 又十字架復活の規程。

#### 第一歌頌、イルモス、「高き臂にて敵を敗る主は」。

救世主は十字架に在りて己の刺されたる脅より我等の爲に生を施す二の泉を流し  
給へり。我等彼に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

ハリストスは墓に入り、三日目に復活して、死に屬する者に其希望たる不朽を與へ給  
へり。我等彼に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

#### 生神女讚詞

爾は獨産の後にも童貞女と現れたり、世界の爲に身を取りし造成主を生みたればな  
り。故に我等皆爾に慶べよと呼ぶ。

### 又至聖なる生神女の規程、第七調。

#### イルモス、「主よ、曾て流れ易き性の水は」。

仁慈の淵を生みし童貞女よ、我が靈を爾の輝ける光にて照し給へ、我が宜しきに合

ひて爾の奇跡の淵を歌はん爲なり。

純潔なる者よ、言は我等が罪の矢に傷つけられしを見て、恩主として憐み給へり、故に至りて神聖なる者は言ひ難く爾より取りし身に合せられたり。

女宰よ、朽壞に屬して死すべき人の性は死に執らはれたり、爾は生命を孕みて、之を朽壞より生命に升せ給へり。

共頌、「我が口を開きて」。

第三歌頌

イルモス、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの能力を備へし主・救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。

慈憐なる救世主よ、爾は木に上りて、甘じて我等の爲に苦を受け、信者に和睦と救贖とを得しむる傷を忍び給へり。仁慈なる主よ、我等皆此の傷に由りて爾の父と和睦するを得たり。

ハリストスよ、爾は我靈を蛇に嚙まれて傷つけられし者の傷を淨めて、我昔幽暗と朽壞とに臥したる者に光を顯はせり、蓋十字架に由りて地獄に降りて、我を己と偕に復活せしめ給へり。

生神女讃詞

救世主よ、夫を識らざる爾の母の祈禱に由りて世界に平安を與へ、皇帝に敵に勝たしめ、爾を讃榮する者に言ひ難き爾の光榮を得しめ給へ。

又 イルモス、「言を以て天を堅め」。

第七調 主日の早課 五〇一

第七調 主日の早課 五〇二

十字架に苦しみを忍び、盜賊の爲に樂園を啓きし獨り仁愛なる主よ、恩主及び神として我が智慧を爾の旨に堅め給へ。

三日目に墓より復活して、世界に生命を輝かしし獨り仁愛なる主よ、生を施す主及び神として我が智慧を爾の旨に堅め給へ。

生神女讃詞

種なく神を孕みて、エワを詛より釋きたる童貞女母マリアムよ、爾より身を取りし神に爾の牧群を救はんことを祈り給へ。

又 イルモス、「元始に全能の言にて」。

母童貞女よ、蛇はエデムより葡ひ出でて、我を神と爲らん望に誘ひて、地に倒せり、然れども性の仁慈慈憐なる主は憐みて爾の腹に入り、我に似たる者と爲りて、我を神成し給へり。

生神童貞女、神の聘女、萬衆の歡喜よ、爾の腹の果は祝福せられたり、蓋爾は全世界の爲に喜と、實に罪の憂を散ずる樂とを生み給へり。

神の母童貞女よ、爾は我等の爲に永遠の生命と、光と、安和とを生み給へり、此の安和は、恩寵の信と承認とに因りて、昔の人人の神及び父に於ける仇を和ぐ。

第四歌頌

イルモス、父の懐を離れずして、地に降りしハリストス神よ、我爾の慮の秘密を聞きて、爾獨人を愛する主を讚榮せり。童貞女より身を取りし無垢なる主宰は己の肩を罪を犯しし僕に傷の爲に與へ、打たれて、我が諸罪を釋き給ふ。神として人を造り、義を以て地を審判する主は法に戻る審判者の前に立ちて、定罪せらるる者の如く詰られ、塵に屬する手にて批たる。

### 生神女讚詞

純潔なる者よ、實に神の母として爾の造成主及び子に祈りて、我を其光榮なる旨の救を得しむる港に向はしめんことを求め給へ。

### 又 イルモス、「ハリストスよ、預言者は」。

罪を識らざる主よ、爾は罪の爲に曾て有らざりし者と爲りて、本性に屬せざる人體を受け給へり、世界を救ひ、暴虐者を餌して殺さん爲なり。爾は十字架に擧げられて、原祖アダムアダムの罪を釋き給へり。故に我爾の能力の事、爾が凡そ爾の膏つけられし者を救はん爲に臨みしことを聞けり。

### 生神女讚詞

第七調 主日の早課 五〇三

第七調 主日の早課 五〇四

童貞女より生れし者よ、爾は死したれども、智慧の迷ひたるアダムアダムを活かし給へり。蓋死は爾の能力を畏れたり、爾が凡そ朽壞せし者を救半爲に臨みたればなり。

### 又 イルモス、「父の懐を離れずして」。

造成の先に神の前に選ばれたる者、極めて華麗光明なる者と現れし讚美たる童貞女よ、爾の豊なる光の輝煌にて爾を歌ふ者を照し給へ。潔き母童貞女よ、爾は人人の爲に爾の潔き血より身を取りし神、愛を以て爾を讚榮恭敬する者を多くの罪より救ふ主を生み給へり。至福にして讚美たる者よ、靈智なる性は今爾の産の言ひ難き奥密を曉りて、爾より輝き出でたる主に奉事す。

### 第五歌頌

イルモス、ハリストスよ、夜は信ぜざる者の爲に明るからず、信者の爲には爾の言を甘ずるに因りて明るし。故に我朝の禱を爾に奉りて、爾の神性を讚め歌ふ。ハリストスよ、爾は己の諸僕の爲に賣られ、頬を撲たるるを忍びて、彼等に自由を得しめ給ふ。故に彼等歌ひて曰ふ、朝の禱を爾に奉りて、爾の神性を讚め歌ふ。ハリストス救世主よ、爾は神たる力に因りて、肉體の弱きを以て強きを斃し、復活を以て我を死に勝つ者と顯し給へり。

### 生神女讚詞

讚美たる潔き母よ、爾より身を取りし神を爾は神に合ひて生み給へり、夫を識らずして、聖神に藉りて生みたればなり。

又 **イルモス**、「主我が神よ、我夜より寤めて」。

爾が罪犯者と偕に算へられて、髑髏の處に擧げられし時、光體は隠れ、地は震ひ、殿の飾なる幔は裂かれて、エウレイ民の背逆を示せり。

爾測り難き爾の神性の能力を以て暴虐者の一切の力を破り、爾の復活を以て死者を起しし主を我等歌を以て崇め讃む。

### 生神女讃詞

王及び神の母、讚美たる生神女よ、信と愛とに因りて常に歌を以て爾を讃め揚ぐる者に、爾の祈祷を以て諸罪の潔淨を降し給へ。

又 **イルモス**、「ハリストスよ、夜は信ぜざる者の爲に」。

婚姻に與らざる純潔なる女宰よ、イアコフは天に戻る梯を見て、爾の預象を悟れ

第七調 主日の早課 五〇五

第七調 主日の早課 五〇六

り、蓋爾に藉りて神は人人と體合し給へり。

童貞女よ、我等爾に倚りて永遠の救を得て、今熱心に爾に呼ぶ、神の聘女よ、慶べ、讚美たる者よ、我等爾の光を喜びて、歌を以て爾を崇め讃む。

純潔なる童貞女よ、新郎は獨爾を棘の中なる百合の花の如く、潔淨の徳と童貞の光とに輝ける者と見て、新婦として納れたり。

### 第六歌頌

**イルモス**、ハリストスよ、我世の慮の淵に漾ひ、我を覆へる諸罪の濤に溺れ、靈を滅す猛獸に擲たれて、イオナの如く爾に籲ぶ、死を致す深處より我を引き上げ給へ。

ハリストスよ、地獄に繋ぎ置かれたる義人等の靈は爾を記念して、爾に因る救を祈れり、爾は慈憐なるに因りて來りて、十字架を以て之を最卑きに在る者に與へ給へり。

使徒の會は手にて造られざる生ける爾の堂を、其苦の爲に壞たれしに因りて、再見る望を失ひたれども、望の外に之を拜みて、遍く復活せしを傳へたり。

### 生神女讃詞

神の聘女たる童貞女よ、我等の爲に成りし爾の言ひ難く玷なき産の景状は人誰か解くを得ん、蓋神言は象り難く爾に合せられて、爾に藉りて肉體と爲り給へり。

又 **イルモス**、「イオナは地獄の腹より呼べり」。

仁慈なる救世主よ、爾は甘じて十字架に上り、之に罪の書券を釘つけて、敵の權を奪ひ給へり。

救世主よ、爾は權を以て死より復活して、人の族を己と偕に起して、我等に生命と不朽とを賜へり、人を愛する主なればなり。

### 生神女讃詞

生神女、潔き永貞童女よ、爾が言ひ難く生みし我等の神に爾を歌ふ者を患難より脱れしめんことを絶えず祈り給へ。



又 **イルモス**、「ハリストスよ、我世の慮の淵に漾ひ」。

いさぎよ もの りつぼう よしやう よげんしや よげん あきらか なんじ ばんぶつ おん しゅ う もの  
潔き者よ、律法の預象と預言者の預言とは明に爾萬物の恩主を生まんとする者を  
しめ かれ しん もつ なんじ うた もの しばしば たほう もつ おん ほどこ たま  
示せり。彼は信を以て爾を歌ふ者に屢多方を以て恩を施し給へり。

こんいん あずか もの なんじ ざいか われ ら すく しゅ う むかし ひとごろし あくぼう よ  
婚姻に與らざる者よ、爾は罪過より我等を救ひし主を生みて、昔殺人者の悪謀に囚  
りて樂園の神聖なる 樂を奪はれし初めて造られたる アダムに復之を獲しめ給へり。

第七調 主日の早課 五〇七

第七調 主日の早課 五〇八

いさぎよ もの かみ むね よ ぜんとう ちから もつ ばんぶつ む つく しゅ なんじ はら  
潔き者よ、神たる旨に由りて、全能の力を以て萬物を無より造りし主は爾の腹よ  
り出でて、死の幽暗に在る者を神元の光にて照し給へり。

**小讃詞、第七調。**

し けん すで ひとびと とら あた けだし くだ その ちから やぶ ほろぼ たま  
死の權は已に人人を捕ふる能はず、蓋 ハリストスは降りて其力を敗りて滅し給へり。  
じごく しば よげんしや どうしん よろこ よ きゆうせいしゅ しん お もの あらわ しんじや  
地獄は縛られ、預言者は同心に喜びて呼ぶ、救世主は信に居る者に現れたり、信者  
よ、復活して出でよ。

**同讃詞**

いまいと ひく ところ じごく およ し せい さんしや いつ まえ おのの ち ふる じごく かどもり なんじ  
今最低き處に、地獄及び死は聖三者の一の前に戦けり。地は震ひ、地獄の門衛は爾  
を見て懼れたり。一切の造物は諸預言者と偕に喜びて、爾我等の神救世主、今死の力  
をやぶ しゅ かちうた たてまつ われ ら およ いた もの よ い  
を破りし主に凱歌を奉る。我等は アダム及び アダムより出づる者に呼びて云ふべし、  
木は復彼を樂園に入れたり、信者よ、復活して出でよ。

**第七歌頌**

いれん せうしや は せん じゆん かの いろり つゆ いた もの あらわ ひとつ かみ うた い なんじ  
**イルモス**、昔少者は燃ゆる 爐を露を出す者と顯して、一の神を歌ひて曰へり、爾  
は崇め讃めらるる先祖の神なり。

じゆう じゆう ふじゆん おこな き よ ころ じゆん よ またあらた  
アダムは自由不順を行ひて、木に縁りて殺され、ハリストスの順に縁りて復新に  
せらる、崇め讃めらるる神の子が我等の爲に釘せらるればなり。

あが ほ せんぞ かみ こ われ ら たため てい  
崇め讃めらるる ハリストスよ、萬物は爾墓より復活せし主を讃め歌へり。蓋 爾は地獄  
に在る者のいのち し もの ふっかつ くらやみ あ もの ひかり ほどこ たま  
に在る者に生命、死せし者に復活、幽暗に在る者に光を施し給へり。

**生神女讃詞**

ちり ぞく せんぞ せんぞ せんぞ せんぞ せんぞ せんぞ せんぞ せんぞ せんぞ せんぞ せんぞ せんぞ  
塵に屬する アダムの女よ、慶べ、獨神の聘女なる者よ、慶べ、朽壞を去りて、神  
を生子し者よ、慶べ。潔き者よ、彼に我等衆の救はれんことを祈り給へ。

又 **イルモス**、「敬虔の少者は火の爐に」。

じゆうじか き あ つみ はり にぶ なんじ わき き ほこ もつ つみ かきつけ  
十字架の木に在りて罪の刺を鈍くし、爾の脅を刺したる戈を以て アダムの罪の書券  
をやぶ たま しゅ わ せんぞ かみ なんじ あが ほ  
を破り給ひし主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

わき き せんせい ちんせい ちんせい ちんせい ちんせい ちんせい ちんせい ちんせい ちんせい ちんせい ちんせい ちんせい  
脅を刺されて、神聖なる血の注ぐを以て拜偶像の血にて汚されたる地を潔め給ひし主  
我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

**生神女讃詞**

かみ はは なんじ ひ ささき あ ひかり せかい たため かがや かれ しゆう  
神の母よ、爾は日より先に在りし光なる ハリストスを世界の爲に輝かせり。彼は衆  
を幽暗より救ひて、神を識る智識を以て照して呼ばしむ、我が先祖の神よ、爾は崇  
め讃めらる。

又 **イルモス**、「昔少者は燃ゆる爐を」。

童貞女よ、爾の造成者及び主、崇め讃めらるる先祖の神は爾を黄金にて飾られたる

第七調 主日の早課 五〇九

第七調 主日の早課 五一〇

最<sup>いと</sup>美<sup>うる</sup>し<sup>わ</sup>き<sup>う</sup>器<sup>つ</sup>として愛<sup>あい</sup>し<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>給<sup>たま</sup>へり。

少女<sup>しょうじよ</sup>よ、昔<sup>むかし</sup> イサイヤ<sup>いさいや</sup>は熾<sup>やけ</sup>炭<sup>ずみ</sup>を受けて、潔<sup>きよ</sup>められて、預<sup>よ</sup>象<sup>しょう</sup>の中に崇<sup>あが</sup>め讃<sup>ほ</sup>めらるる先祖<sup>せんぞ</sup>の神<sup>かみ</sup>を生<sup>う</sup>みし爾<sup>なんじ</sup>の産<sup>さん</sup>を見<sup>み</sup>たり。

昔<sup>むかし</sup>神<sup>しん</sup>聖<sup>せい</sup>なる諸<sup>しよ</sup>預<sup>よ</sup>言<sup>げん</sup>者<sup>しゃ</sup>は爾<sup>なんじ</sup>の神<sup>しん</sup>妙<sup>みょう</sup>なる産<sup>さん</sup>の預<sup>よ</sup>象<sup>しょう</sup>を見<sup>み</sup>て、欣<sup>よろこ</sup>ばしく歌<sup>うた</sup>ひて呼<sup>よ</sup>べり、先祖<sup>せんぞ</sup>の神<sup>かみ</sup>よ、爾<sup>なんじ</sup>は崇<sup>あが</sup>め讃<sup>ほ</sup>めらる。

第八歌頌

**イルモス**、燃<sup>も</sup>ゆれども焚<sup>や</sup>けざるシナイ<sup>いばら</sup>の棘<sup>くち</sup>は口<sup>くち</sup>鈍<sup>にぶ</sup>く言<sup>こと</sup>澁<sup>ぼ</sup>るモイセイ<sup>かみ</sup>に神<sup>あ</sup>を顯<sup>あ</sup>せり。神<sup>かみ</sup>を慕<sup>した</sup>ふ熱<sup>ねつ</sup>心<sup>しん</sup>は三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup>の少<sup>しょう</sup>者<sup>じや</sup>を火<sup>ひ</sup>に焚<sup>や</sup>かれざる者<sup>もの</sup>と爲<sup>な</sup>して、歌<sup>うた</sup>はしめたり、主<sup>しゅ</sup>の悉<sup>ことごと</sup>くの造<sup>ぞう</sup>物<sup>ぶつ</sup>は主<sup>しゅ</sup>を歌<sup>うた</sup>ひて、萬<sup>ばん</sup>世<sup>せい</sup>に讃<sup>ほ</sup>め揚<sup>あ</sup>げよ。

無<sup>む</sup>玷<sup>でん</sup>なる靈<sup>れい</sup>智<sup>ち</sup>の羔<sup>こひつじ</sup>は世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>の爲<sup>ため</sup>に屠<sup>ほ</sup>ふられて、律<sup>りつぽう</sup>法<sup>ぽう</sup>に循<sup>したが</sup>ふ獻<sup>きさげ</sup>物<sup>もの</sup>を息<sup>や</sup>め、神<sup>かみ</sup>として世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>を罪<sup>つみ</sup>より潔<sup>きよ</sup>めて、常<sup>つね</sup>に呼<sup>よ</sup>ばしむ、主<sup>しゅ</sup>の悉<sup>ことごと</sup>くの造<sup>ぞう</sup>物<sup>ぶつ</sup>は主<sup>しゅ</sup>を歌<sup>うた</sup>ひて、萬<sup>ばん</sup>世<sup>せい</sup>に讃<sup>ほ</sup>め揚<sup>あ</sup>げよ。

造<sup>ぞう</sup>物<sup>ぶつ</sup>主<sup>しゅ</sup>が取<sup>と</sup>り給<sup>たま</sup>ひし我<sup>わ</sup>が肉<sup>にく</sup>體<sup>たい</sup>は苦<sup>くる</sup>の昔<sup>さき</sup>には不<sup>ふ</sup>朽<sup>きう</sup>たらざりしに、苦<sup>くる</sup>と復<sup>ふ</sup>活<sup>かつ</sup>との後<sup>のち</sup>には朽<sup>きう</sup>壞<sup>わい</sup>に與<sup>あ</sup>からざる者<sup>もの</sup>と爲<sup>な</sup>りて、死<sup>し</sup>に屬<sup>ぞく</sup>する者<sup>もの</sup>を新<sup>あらた</sup>にして呼<sup>よ</sup>ばしむ、主<sup>しゅ</sup>の悉<sup>ことごと</sup>くの造<sup>ぞう</sup>物<sup>ぶつ</sup>は主<sup>しゅ</sup>を歌<sup>うた</sup>ひて、萬<sup>ばん</sup>世<sup>せい</sup>に讃<sup>ほ</sup>め揚<sup>あ</sup>げよ。 **生神女讃詞**

至<sup>しじょう</sup>淨<sup>じょう</sup>なる童<sup>どう</sup>貞<sup>てい</sup>女<sup>じよ</sup>よ、爾<sup>なんじ</sup>の潔<sup>けつ</sup>淨<sup>じょう</sup>と無<sup>む</sup>玷<sup>でん</sup>とは世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>の汚<sup>けが</sup>穢<sup>れ</sup>と憎<sup>にく</sup>むべき事<sup>こと</sup>とを潔<sup>きよ</sup>めて、爾<sup>なんじ</sup>我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>と神<sup>かみ</sup>との和<sup>わ</sup>睦<sup>ぼく</sup>の縁<sup>ゆえん</sup>由<sup>な</sup>と爲<sup>たま</sup>り給<sup>たま</sup>へり。故<sup>ゆえ</sup>に我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup> 悉<sup>ことごと</sup>くの造<sup>ぞう</sup>物<sup>ぶつ</sup>は爾<sup>なんじ</sup>童<sup>どう</sup>貞<sup>てい</sup>女<sup>じよ</sup>を崇<sup>あが</sup>め歌<sup>うた</sup>ひて、萬<sup>ばん</sup>世<sup>せい</sup>に讃<sup>ほ</sup>め揚<sup>あ</sup>ぐ。

又 **イルモス**、「惟一無原なる光榮の王」。

甘<sup>あまん</sup>じて苦<sup>くる</sup>を忍<sup>しの</sup>び、望<sup>のぞ</sup>みに由<sup>よ</sup>りて十<sup>じ</sup>字<sup>ごく</sup>架<sup>ぐん</sup>に釘<sup>やぶ</sup>せられて、地<sup>じ</sup>獄<sup>ごく</sup>の軍<sup>ぐん</sup>を敗<sup>やぶ</sup>りし主<sup>しゅ</sup>を、司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>よ、歌<sup>うた</sup>へ、人<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>よ、萬<sup>ばん</sup>世<sup>せい</sup>に讃<sup>ほ</sup>め揚<sup>あ</sup>げよ。

死<sup>し</sup>の權<sup>けん</sup>を虚<sup>むな</sup>しくし、光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>を以<sup>もつ</sup>て墓<sup>ほか</sup>より復<sup>ふ</sup>活<sup>かつ</sup>して、人<sup>じん</sup>類<sup>るい</sup>を救<sup>すく</sup>ひし主<sup>しゅ</sup>を、司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>よ、歌<sup>うた</sup>へ、人<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>よ、萬<sup>ばん</sup>世<sup>せい</sup>に讃<sup>ほ</sup>め揚<sup>あ</sup>げよ。 **生神女讃詞**

獨<sup>ひとり</sup>仁<sup>じん</sup>慈<sup>じ</sup>なる永<sup>えい</sup>久<sup>きう</sup>の言<sup>ごん</sup>、末<sup>すえ</sup>の日<sup>ひ</sup>に童<sup>どう</sup>貞<sup>てい</sup>女<sup>じよ</sup>より生<sup>うま</sup>れて、古<sup>いにしえ</sup>の詛<sup>のろい</sup>を釋<sup>と</sup>きたる主<sup>しゅ</sup>を、司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>よ、歌<sup>うた</sup>へ、人<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>よ、萬<sup>ばん</sup>世<sup>せい</sup>に讃<sup>ほ</sup>め揚<sup>あ</sup>げよ。

又 **イルモス**、「燃ゆれども焚けざるシナイの棘は」。

神<sup>かみ</sup>の母<sup>はは</sup>よ、爾<sup>なんじ</sup>は己<sup>おのれ</sup>の産<sup>さん</sup>の光<sup>ひかり</sup>にて靈<sup>れい</sup>妙<sup>みょう</sup>に世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>を照<sup>てら</sup>せり、蓋<sup>けだ</sup>誠<sup>しまこと</sup>に實<sup>じつ</sup>在<sup>ざい</sup>の神<sup>かみ</sup>を爾<sup>なんじ</sup>の手<sup>て</sup>に抱<sup>いだ</sup>き給<sup>たま</sup>へり。彼<sup>かれ</sup>は信<sup>しん</sup>者<sup>じや</sup>を照<sup>てら</sup>して常<sup>つね</sup>に呼<sup>よ</sup>ばしむ、主<sup>しゅ</sup>の悉<sup>ことごと</sup>くの造<sup>ぞう</sup>物<sup>ぶつ</sup>は主<sup>しゅ</sup>を歌<sup>うた</sup>ひて、萬<sup>ばん</sup>世<sup>せい</sup>に讃<sup>ほ</sup>め揚<sup>あ</sup>げよ。

潔<sup>いさぎよ</sup>き者<sup>もの</sup>よ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>敬<sup>けい</sup>虔<sup>けん</sup>に爾<sup>なんじ</sup>の腹<sup>はら</sup>を歌<sup>うた</sup>ふ、蓋<sup>けだ</sup>此<sup>これ</sup>は言<sup>い</sup>ひ難<sup>がた</sup>く人<sup>じん</sup>體<sup>たい</sup>を取<sup>と</sup>りたる神<sup>かみ</sup>を容<sup>い</sup>れたり。彼<sup>かれ</sup>は衆<sup>しゅう</sup>信<sup>しん</sup>者<sup>じや</sup>に神<sup>しん</sup>智<sup>ち</sup>の光<sup>こう</sup>照<sup>しょう</sup>を賜<sup>たま</sup>ひて常<sup>つね</sup>に呼<sup>よ</sup>ばしむ、主<sup>しゅ</sup>の悉<sup>ことごと</sup>くの造<sup>ぞう</sup>物<sup>ぶつ</sup>は主<sup>しゅ</sup>を歌<sup>うた</sup>ひて、

第七調 主日の早課 五一一

第七調 主日の早課 五一二

ばんせい ほ あ  
萬世に讃め揚げよ。  
ひかり はは いぎよ しょうしんじょ なんじ おのれ ひかり かがやき もつ なんじ うた もの てら たま けだしひかり  
光の母、潔き生神女よ、爾は己の光の耀を以て爾を歌ふ者を照し給へり。蓋光  
の居所と爲りて、凡の者を光照して呼ばしむ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世  
に讃め揚げよ。

次ぎて生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」、附唱と共に、「ヘルウィムより尊く」。

### 第九歌頌

イルモス、けがれ そ 汚に染まずして生み、よろずもの つく ことば にくたい あた おつと し はは  
生神童貞女、容れ難き者の器、限なき爾の造成主の住所よ、我等爾を崇め讃む。  
およ いたん と な かみ せい くるしみ う い もの くち と われら あが ほ  
凡そ異端を唱へて、神の性は苦を受けたりと云ふ者は口を緘ぢよ。我等が崇め讃む  
る一位にして両性を兼ねる光榮の主は神の性を以てするにあらずして、肉身を以て  
十字架に釘せられたり。  
にくたい ふっかつ しん もの はか ゆ まな けだしかれ ころ いのち  
肉體の復活を信ぜざる者はハリストスの墓に往きて學べ、蓋彼は殺されたれども、生  
を施す主の肉身は復活して、我等の望める最後の復活を信ぜしむ。

### 聖三者讃詞

われら どうと もの しんせい みつ くらい みつ またくらい ひとつ しんせい  
我等の尊める者は神性の三にあらずして、位の三なり、又位の一にあらずして、神性  
の三なり。我等は神性を分つ者を斷ち、又位を混淆する者を斥く。

### 又 イルモス、「神の母又童貞女」。

ひかり ひかり よ な さき はつ ちち こうえい かがやき くらやみ うち  
光よりする光、世の無き先より發する父の光榮の輝煌なるハリストスは、幽暗の中  
に在る人の生命を照して、之を蔽へる暗を散じ給へり。我等信者は絶えず彼を崇め讃  
む。

うち にくたい くるしみ しんせい のうりよく み その せい いつ おも もの はじ こうむ  
ハリストスの中に肉體の苦と神性の能力とを見て、其性を一なりと思ふ者は辱を蒙  
るべし、蓋彼は人として死し、萬有の造成主として起き給ふ。  
ふっかつ せんでんしや お ふくいん よ おんなたち こうりょう ししや ぞく  
復活の宣傳者はハリストスの起きたるを福音して呼べり、女等よ、香料は死者に屬  
す、生ける者には歌頌を獻ぜよ、涙は死する者に屬す、萬衆の生命には歌を獻ぜよ。

### 生神女讃詞

きょうかい なんじ よ しん いほうみん うち われ おのれ よめ ちら しゅ われなんじ  
教會は爾に呼ぶ、信ぜざる異邦民の中より我を己の聘女としして選びし主よ、我爾  
の外に他の神を識らず。言よ、慈憐なる主として、爾を生みし者の祈祷に因りて信者  
に救を施し給へ。

### 又 イルモス同上

えいていどうじょ なんじ きゅうせいしゅ う われら くれ すくい ほどこ かみ まこと しん もつ どうと  
永貞童女よ、爾は救世主を生みて、我等彼を救を施す神として、眞と神とを以て尊  
む者の爲に永遠の喜と樂との中保者と爲り給へり。

第七調 主日の早課 五一三

第七調 主日の早課 五一四

しじょう もの なんじ せんぞ なんじ うた しんみょう せいぶつ ひつ な  
至淨なる者よ、爾の先祖ダウイドは爾を歌ひて、神妙なる聖物の櫃と名づけたり、  
けだしなんじ ちち ふどころ ざ かみ せい こ い たま われら しんじや た くれ あが ほ  
蓋爾は父の懷に坐する神を性に超えて容れ給へり。我等信者は絶えず彼を崇め讃  
む。

少女よ、爾は實に悉くの造物より上なる者なり、萬物の造成主、人體を受けし者を我等の爲に生みたればなり。故に唯一の主宰の母として、並なく衆に勝り給ふ。

共頌の後に小聯禱。次ぎて主我等の神は聖なり、三次。早課の差遣詞。

「凡そ呼吸ある者」に主日の讚頌、第七調。

句、彼等の爲に記されし審判を行はん爲なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り。

ハリストスは死の械繫を壊りて、死より復活せり。地よ、大なる喜を福音せよ、天よ、神の光榮を歌へ。

句、神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ。

ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス、獨罪なき者を拜むべし。

句、其權能に依りて彼を讃め揚げよ、其至嚴なるに依りて彼を讃め揚げよ。

我等はハリストスの復活を拜みて止めず、聖なる主イイススは復活を顯して、我等を吾が不法より救ひ給へばなり。

句、角の聲を以て彼を讃め揚げよ、琴と瑟とを以て彼を讃め揚げよ。

凡そ主の我等に行ひし事には、我等何を以て報いん。我等の爲に神は人の間に在り、朽ちたる性の爲に言は肉體と成りて、我等の中に居りたり。恩を知らざる者には恩者、被擲者には自由と與ふる者、幽暗に坐する者には義の日臨めり。苦に與らざる者は十字架の上に、光は地獄に、生命は死の中に在り、復活は陥りし者の爲なり。我等彼に呼ばん、吾が神よ、光榮は爾に歸す。

又讚頌、アナトリイの作。同調。

句、鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ。

主よ、爾は地獄の門を破り、爾の堅固なる力を以て死の權を虚しくし、萬衆の王及び全能の神として、爾の神聖にして光榮なる復活を以て、古世より幽暗の中に寝ぬる死者を己と偕に起こし給へり。

句、和聲の鉦を以て彼を讃め揚げよ、大聲の鉦を以て彼を讃め揚げよ。凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ。

來りて、主の前に喜びて、其復活の爲に樂しまん、蓋彼は死者を地獄の解き難き縲綯より己と偕に起し、神として世界に永遠の生命と大なる憐とを賜へり。

第七調 主日の早課 五一五

第七調 主日の早課 五一六

句、主我が神よ、起きて、爾の手を擧げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ。

輝ける天使は生命を受けたる墓の石の上に坐して、攜香女に福音して云へり、主は復活せり、前に爾等に言ひしが如し、其門徒に告げて曰へ、彼は爾等に先だちてガリレヤに往く、且世界に永遠の生命と大なる憐とを賜ふ。

句、主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇跡を傳へん。

嗚呼至りて不法なるイウデヤ人よ、何ぞ屋隅の首石を棄てられたる者と爲しし、視よ、此れ神がシオンに置きたる者なり。彼は野に於て石より水を流しし者、我等に脅より

不死を流し給ふ者なり。此の石は乃人欲に由らずして童貞女の山より斫り分けられたる者なり、此はダニールの言ひし如く、天の雲に乗りて日の老いたる者の前に至る人の子なり、其國は永久なり。

光榮、早課の福音の讚頌。今も、「生神童貞女よ、爾は至りて讚美たる者なり」。大詠頌。

次ぎて復活の讚詞。

今救は世界に及べり。我等墓より復活せし吾が生命の首なる主に歌ふ、其死にて死を滅し、我等に勝利と大なる慈憐とを賜へばなり。

次ぎて聯禱、及び發放詞。



聖體禮儀の眞福詞、第七調。

美しくして食ふに善き果は我を殺せり。ハリストスは生命の樹なり、我是より食ひて死せず、乃盜賊と共に呼ぶ、主よ、爾の國に於て我を憶ひ給へ。

句、心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。

惠深き主よ、爾は十字架に上りて、アダムの古の罪の書券を抹し、全人類を迷より救ひ給へり。故に我等爾恩を施す主を崇め歌ふ。

句、和平を行ふ者は福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。

惠深きハリストスよ、爾は我等の罪を十字架に釘うちて、爾の死にて死を滅し、死せし者を死より起こし給へり。故に我等爾の聖なる復活に伏拜す。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

蛇は昔エワの耳に毒を注げり、ハリストスは十字架の木に在りて世界に生命の甘を流し給へり。故に我等呼ぶ、主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。

句、人我の爲に爾等を詬り、窘逐し、爾等の事を偽りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

萬有の生命たるハリストスよ、爾は死に屬する者の如く墓に置かれたれども、地獄の柱を折き、全能者として光榮を以て三日目に復活して、萬有を照し給へり。光榮

第七調 主日の聖體禮儀 五一七

第七調 主日の聖體禮儀 五一八

は爾の復活に歸す。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

主は三日目に死より復活して、己の平安を門徒に賜ひ、彼等を祝福して遣して云へり、萬民を我が國に來らしめよ。

光榮、聖三者讚詞。

父は光、子及び言は光、聖神は光なれども、三の者は一の光なり、蓋一の神は三位

にして、一性一源、分離せず混合せずして永遠なり。

今も、生神女讃詞。

生神女よ、爾は父の子及び言を我等の爲に身にて生み給へり、彼の自ら知るが如し。故に童貞女母よ、我等は爾に因りて神成せられて、爾に呼ぶ、「ハリストティアニン」等の恃頼よ、慶べ。

提綱、第七調。

主は其民に力を賜ひ、主は其民に平安の福を降さん。句、神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ。

「ア ril イヤ」、至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌ふは美なる哉。句、爾の憐みを朝に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉。



主日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に痛悔の讚頌、第七調。

句、主よ、もし爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

嗚呼我が靈よ、爾の目を擧げて、神の攝理と仁慈とを見よ、如何にして彼は天を傾けて地に降りたる、是れ爾を諸慾の淵より引き上げて、信の石に立てん爲なり。

嗚呼奇異にして畏るべき奇跡や。人を愛する主よ、光榮は爾の謙遜に歸す。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

嗚呼吾が靈よ、爾の至りて不法なる行を見て異め。如何ぞ地は尚爾を載する、如何ぞ裂けて爾を吞まざりし、如何ぞ猛獸は未だ爾を食はざる、如何ぞ入らざる日も爾を照すことを息めざりし。起きて痛悔して、主に呼べ、我爾の前に罪を犯し、罪を犯せり、我を憐み給へ。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

全能の主よ、我等恃頼を爾に負はせて、我等が凡の災禍と、諸慾と、憧擾より救はれんことを祈る、我等が平安に生を度り、潔淨を守りて、審判の日に於て爾寛容な

第七調 主日の晩課 五一九

第七調 主日の晩課 五二〇

る主宰の慈憐を蒙らん爲なり。

次に月課經の聖人の讚頌。若し月課經なくば、又聖なる無形天軍の讚頌、第七調。

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

聖三者の光に照さるる天使首よ、信を以て爾等を歌ふ者を照し給へ。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

げんし ひかり した あずか よ だいに ひかり もの われら だいに ひかり まえ た え  
原始の光に親しく與るに因りて第二の光たる者よ、我等が第二の光の前に立つを得  
んことを祈り給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

なんじら つばさ おおい もつ しゅうしんじや あくき まも くらやみ さん たま  
爾等の翼の覆庇を以て衆信者を悪鬼より護りて、黑暗を散じ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

われら みな てん しら とも うた もつ しゅうしんじよ よ けだしかれ せかい ため きゅうしゅ う さん のち  
我等皆天使等と偕に歌を以て生神女に呼ばん、蓋彼は世界の爲に救主を生み、産の後  
に復童貞女に止まり、其産を以て世界を迷惘より救ひ、乳にて吾が靈の贖罪主を養  
ひて、我等に竭きざる糧を與へ給へり。

次ぎて「穩なる光」。本日の提綱。「主よ、我等を守り」。

挿句に痛悔の讃頌、第七調。

じんじ かみ われ とうし ごと きた ひと あい しゅ われ ふふく もの なんじ やといびと ひとり  
仁慈なる神よ、我蕩子の如く來れり、人を愛する主よ、我俯伏する者を爾が傭人の一  
の如く納れて、我を憐み給へ。

句、天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦  
の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

ぬすびと あ もの きず ごと か われ おお つみ おちい わ たましいきず  
盜賊に遇ひたる者の傷つけられし如く、斯く我も多くの罪に陥りて、吾が靈傷つけ  
られたり。我罪なる者は誰にか趨り附かん、唯爾慈憐なる靈の醫師に就きて祈る、神  
よ、我に爾の大なる仁慈を沃ぎ給へ。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に鑿き足れり。我等の靈  
は驕る者の辱と誇る者の侮とに鑿き足れり。

致命者讃詞

かりすとす かみ こうえい なんじ き なんじ した ほまれ ちめいしゃ よるこび かれら おしえ いったい  
ハリストス神よ、光榮は爾に歸す、爾は使徒の譽、致命者の悦なり。彼等の教は一體  
の三者なり。

光榮、今も、生神女讃詞。

かみ よめ われら てん しら とも なんじ よるこ よ なんじ みや もん ひ ほうざ き  
神の聘女よ、我等は天使と偕に爾に慶べよと呼びて、爾を宮と門、火の寶座と截ら  
れざる山、及び焚かれぬ棘と稱ふ。

第七調 主日の晩課 五二一

第七調 主日の晩堂課 五二二

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、聯禱、  
及び發放詞。

~~~~~

主日の晩堂課

至聖なる生神女に奉る祈禱の規程、第七調。

第一歌頌

イルモス、主よ、曾て流れ易き性の水は爾の瞬にて地の姿に變れり、故にイズラ

イリは足を濡らさず渡りて、凱歌を爾に歌ふ。

至淨なる者よ、天使の品位は實に爾を萬有の神の母として尊む。今我が塵に屬する口よりも祈祷の歌を納れ給へ。

眞の生命を生みし純潔無玷なる者よ、我が肉體の中に尚活ける悪を殺して、爾の僕に諸愆諸罪より救を與へ給へ。 **光榮**

無原にして不可思議に光る言、日よりの日は定期に至りて輝き出でたり。童貞女よ、其光線にて我等の靈を照して、悟らしめ給へ。 **今も**

生神女よ、讚美の詞を常に爾に奉るは宜しきに合へり。然れども我等爾に祈る、潔き者よ、爾に趨り附く者を凡の度生の憂より救ひ給へ。

第三歌頌

イルモス、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの能力を備へし主・救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。

至淨なる女宰よ、我熱心に爾を歌ひ、敬みて諸恩の爲に爾に感謝を奉りて、爾衆人の救主たる言の母に祈る、我を世俗の諸の誘惑より脱れしめ給へ。

至淨なる女宰よ、爾は生命の首たる言を生みて、昔犯罪に因りて殺されたるアダムに更に善き生命を得しめ給へり。今我をも死罪より釋き給へ。

光榮

愆の法は我が肉體の中に固まりて、神の法を侵して、我が心を甚しき諸罪に進ましむ。至淨なる者よ、爾の祈祷を以て速に我に無愆の平安を與へ給へ。

今も

至淨なる者よ、爾は萬有を保つハリストスを言ひ難く孕みて、地に生るる者の性を地獄の縲紲より解き給へり。今も我を縛る諸愆の網を破り給へ。

第七調 主日の晩堂課 五二三

第七調 主日の晩堂課 五二四

第四歌頌

イルモス、父の懷を離れずして、地に降りしハリストス神よ、我爾の慮の秘密を聞きて、爾獨人を愛する主を讚榮せり。

諸罪の闇は我を蔽ひて、吾が思念を味ませり。光の門たる者よ、爾の光線を以て我を照して、速に我が憂を散じ給へ。

女宰よ、我多くの罪に縛られ、諸の誘惑に網せられて、今爾の助を呼ぶ、我を凡の苦より救ひ給へ。 **光榮**

讚美たる者よ、我を悪鬼の攻撃と詭譎なる人人の悪謀より護りて、我を度生の諸の憂より脱れしめ給へ。 **今も**

女宰よ、爾の祈祷の劍を以て我を圍みて滅さんと欲する諸敵を斬り、速に彼等の謀を破りて、我を凡の悲より脱れしめ給へ。

第五歌頌

イルモス、ハリストスよ、夜は信ぜざる者の爲に明るからず、信者の爲には爾の言を甘ずるに因りて明るし、故に我朝の禱を爾に奉りて、爾の神性を讃め歌ふ。信者の爲に壞られぬ牆たる童貞女よ、我爾の僕の爲にも帡幪と爲りて、我を凡の憂愁及び災禍より救ひ給へ。

我諸の誘惑に悩まされて、靈と體との諸病を疾む。至淨なる者よ、爾の祈禱を以て我が靈體を醫し給へ。 **光榮**

童貞女よ、我爾の僕は今爾の慈憐の淵に趨り附く、我を圍む諸敵の悪謀と攻撃と侵害より護り給へ。 **今も**

至淨なる童貞女母よ、爾の祈禱の光榮は遍く唱へらる、此を以て今我を度生の諸の禍より救ひ給へ。

第六歌頌

イルモス、ハリストスよ、我世の慮の淵に漾ひ、我を覆へる諸罪の濤に溺れ、靈を滅す猛獸に擲たれて、イオナの如く爾に籲ぶ、死を致す深處より我を引き上げ給へ。

潔き者よ、衆人の口と言とは熱切に爾を崇め讃む、爾の産を以て人類の罪債を釋きたればなり。今も爾を歌ふ者の禱を納れて、彼等を諸の誘惑及び憂愁より脱れしめ給へ。

至淨なる者よ、我悪慾の棘に刺され、痛く病みて、爾に趨り附きて醫治を求む、我を凡の病と苦と憂より救ひ給へ。 **光榮**

第七調 主日の晩堂課 五二五

第七調 主日の晩堂課 五二六

生神女よ、爾は光榮の王の宮と爲りて、地に生るる者の性を天に升せ給へり。求む、我を多くの罪と、禍と、諸慾との淵より引き上げ給へ。 **今も**

潔き童貞女よ、爾は言と智慧とに超えて身を取りし言。我等を無知より救ひし主を生み給へり。故に我等は敬虔なる言を以て絶えず爾を歌ひて、熱心に崇め讃む。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第七調。

女宰よ、我等爾の罪なる諸僕は爾の子の怒に觸れたり、甚しく其仁慈なる旨を侵したればなり、潔き者よ、求む、彼を慈憐に還し給へ。神の母よ、憐みて爾の祈禱を以て彼が我等の爲に寛容の者と爲りて、我等を救はんことを祈り給へ。

第七歌頌

イルモス、敬虔の少者は火の爐に擲たれて、火を易へて露と爲し、歌を以て籲べり、主我が先祖の神よ爾は崇め讃めらる。

潔淨の華美に妝はれたる至淨なる童貞女、祝讃せらるる女宰、我が族の轉達者よ、求む、今吾が靈の不淨なる悪を潔めて、神聖なる諸徳を以て之を飾り給へ。

悪鬼は甚しく猛りて我が衷に諸慾の火を燃す。我が族の轉達者よ、爾の仁愛の熱

きを以て彼等を焦がして拂ひ給へ。 **光榮**
至淨なる神の母よ、爾の祈祷を以て我等の爲に爾の子に絶えず祈りて、爾の諸僕を
世俗の憂愁及び災禍より救ひ給へ。 **今も**
童貞女よ、永在なる子は變易なく爾より身を受けて、人と爲りて、我等を救ひて歌
はしむ、至淨なる者よ、爾の腹の果は祝福せられたり。

第八歌頌

イルモス、少者は爐の中に露を注がれて呼べり、造物は言を以て萬有を造りし主を崇
めて、世に彼を讃め揚ぐへし。
女宰よ、諸慾の餌と多方の危きとは實に爾の僕を繞る。求む、我を其種種の誘惑よ
り救ひ給へ。
女宰よ、願はくは爾の權能の手は伸べられて、我等此を以て世俗の諸の憂患より援

第七調 主日の晩堂課 五二七

第七調 主日の晩堂課 五二八

けられん。 **光榮**
潔き神の母よ、詭譎なる人人の悪謀を破りて、爾の僕を其網より脱れしめ給へ。

今も

潔き童貞女、獨信者の神聖なる港よ、祈る、我を生命の海の颯風より援け給へ。

第九歌頌

イルモス、光明なる聘女、光を施す者の母よ、慶べ、容れ難き主を爾の腹に容れし者
よ、慶べ、ヘルワィムよりも尊くして、我が靈の救主を生みし者よ、慶べ。
我荒馬の如く主宰の戒の綱を斷ちて躍る。至淨なる者よ、願はくは爾の祈祷の勒
に制せられて、救の道に向はしめられん。
我無智に躓きて、深く罪に陥りたり。生神女よ、我を引き上げて、滅亡より救ひ給
へ。

光榮

生神女よ、爾は人の性の中に第一に醫治を得たる者と爲りて、アダムとエワとの死病
を醫し給へり。求む、爾の祈祷を以て我をも醫し給へ。 **今も**
女宰よ、我に貞潔の智慧、潔淨の心、善良の旨を與へ給へ、我が神の至淨なる誠
を守らん爲なり。

次ぎて「常に福にして」、及び叩拜。聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞。其他常例
の如し、并に發放詞。

~~~~~

### 月曜日の早課

第一の誦文の後に痛悔の坐誦讚詞、第七調

わ たましい つうかい りょうやく たも ちか ふふく たんそく よ れいたい いし じんあい  
我が 靈よ、痛悔の良薬を有ちて、近づきて俯伏し、歎息して呼べ、靈體の醫師、仁愛  
なる主よ、我を我が多くの罪より釋き給へ、神よ、我を罪女と、盜賊と、税吏とに加  
へて、我に不法の赦を與へて、我を救ひ給へ。

句、主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。

ペトルの違背を涙にて潔め、税吏の諸罪を歎息に由りて赦しし仁愛の主よ、我を憐  
み給へ。

### 光榮、今も、生神女讃詞。

しゅくさん しやうしんじよ なんじ てんぐん こ けだしかみ でん な たま わ  
祝讃せらるる生神女よ、爾は天軍に超えたり、蓋神の殿と爲り給へり、ハリストス吾  
が靈の救主を生みたればなり。

第七調 月曜日の早課 五二九

第七調 月曜日の早課 五三〇

### 第二の誦文の後に痛悔の坐誦讃詞、第七調。

われ ぜいり つうかい なら ざいじよ 涙みだ え か ごと きやうせい な よ  
我税吏の痛悔に倣はざりき、罪女の涙を得ざりき、是くの如き矯正を爲さざるに因  
りて望みを失ふ。求む、ハリストス神よ、爾の慈憐を以て我を救ひ給へ、爾は人を愛  
する主なればなり。

句、主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。

主よ、生命の海は我を濼はし、我が不法の激浪は我を沈む。人を愛する主宰よ、ペトル  
に於けるが如く爾の手を伸べて、我を救ひ給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

### 致命者讃詞

せい ちめいしや いの われら しょざい ゆるし たま し くつう らいせい くるしみ まぬか  
聖なる致命者よ、祈る、我等が諸罪の赦の賜はり、死の苦痛と來世の苦との免れ  
しめられんことを祈り給へ。

### 光榮、今も、生神女讃詞。

しせい どうていじよ なんじ こうえい とうと けだしかれら かみ ちから た  
至聖なる童貞女よ、爾は光榮なるヘルワイムより尊し、蓋彼等は神の力に勝へずし  
て、翼にて面を覆ひて奉事するに、爾は身を取りし言を親しく見て抱き給へり。彼  
に我等の靈の爲に息めずして祈り給へ。

### 第三の誦文の後に坐誦讃詞、第七調。

わ しゅじゅ よく ざいか あらし われ しつぼう ふかみ おぼ だいじんじ なんじ  
我が種種の愆と罪過との暴風は我を失望の深處に溺らす。大仁慈なるイイスよ、爾  
の諸天使の祈禱に因りて、我を蕩子の如く救ひ給へ。

吾が靈よ、爾の在世の時に於て來世の生命の爲に備を爲すを怠る母れ。蓋彼處に  
は富も力も、朋友も牧伯も、誰も助くる能はず、惟行の顯見と神の仁愛とあるのみ。

### 光榮、今も、生神女讃詞。

むてん しやうしんどうていじよ てんじやう ぐん とも なんじ こ いの われら しん もつ なんじ さんえい  
無玷なる生神童貞女よ、天上の軍と偕に爾の子に祈りて、我等信を以て爾を讚榮す  
る者に終の先に諸罪の赦を賜はんことを求め給へ。

我が主イイス ハリストス及び彼の聖致命者に奉る痛悔の規程。イオシフの作。第  
七調。

第一歌頌

イルモス、エギプトに於てモイセイにイスラエリ民を引き出すことを助け給ひし神、  
獨彼に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

我罪惡の海に陥りて、爾に呼ぶ、洪恩の主よ、我に手を伸べ給へ、仁愛の主よ、我  
をペトルの如く救ひ給へ。

ハリストスよ、我痛悔する者を罪女の如く多くの罪より爾の仁慈の指塵を以て滌ひ給

第七調 月曜日の早課 五三一

第七調 月曜日の早課 五三二

へ、我が信を以て爾を讚榮せん爲なり。

致命者讚詞

爾の聖なる者を多種の苦の爐を以て輝かししハリストスよ、彼等の祈祷に由りて我  
を諸慾の味より救ひ給へ。 致命者讚詞

聖なる致命者よ、爾等は苦の忍耐を以て潔められて、日よりも盛に輝きて、迷を味  
まし給へり。 生神女讚詞

讚美たる童貞女、信者の轉達者、罪を犯しし者を神に轉ぜしむる者よ、爾の祈祷を以  
て我を救ひ給へ。

又無形なる聖天軍の規程、其冠詞は、無形の者に第七の讚美を捧ぐ。フェオファンの  
作。第七調。

イルモス、ファラオンを紅の海に揺り墜しし神に凱歌を歌はん、彼光榮を顯したれ  
ばなり。

能力の無量なるハリストスよ、爾の光を以て我が智慧を照して、爾の諸天使を歌ふ爲  
に力を得しめへ。 二次。

天の品位は神元の源より出づる盛なる光明を有ちて、歌を以てハリストスを尊む。

生神女讚詞

潔き者よ、我等衆信者は爾を神聖なる光明に飾られたる者と知りて、朗に爾に慶  
べよと呼ぶ。

第三歌頌

イルモス、我が心は主の中に堅められ、我が角は我が神に在りて高くなり、我が口  
は我が敵に向ひて開けたり、我は爾の救の爲に樂しめり。

我夜中に不當なる罪に執はれたり。光を施す仁愛の主よ、今我を痛悔の光にて照し給  
へ、我が信を以て爾を讚榮せん爲なり。

我が生命の中に行きし途は皆我を逸樂の淵に墜せり。イイススよ、我に痛悔の神聖な  
る途を示し給へ。 致命者讚詞

至りて光榮なる致命者よ、爾等は勇敢にして戦を終へ、天の榮冠を冠りて、衆の爲  
に祈り給ふ。 致命者讚詞

受難者よ、爾等は千萬の苦を忍びしに因りて、千萬の福を獲て、千萬の無形の軍に合

せられたり。 **生神女讃詞**

てん おう かみ う どうていじょ われ うち おう つみ ほろぼ われ あわれ すく たま  
天の王たる神を生みし童貞女よ、我の中に王たる罪を滅して、我を憐みて救ひ給へ。

又

第七調 月曜日の早課 五三三

第七調 月曜日の早課 五三四

イルモス、ハリストスの教會は信を以て堅められたり、蓋絶えず歌を奉りて呼ぶ、主  
よ、爾は聖なり、我が神は爾を歌ふ。

しよひん てん し なんじら かみ あられ ちゆうほうしや な むけい た よ ひとびと たましい  
諸品の天使よ、爾等は神の顯見の中保者と爲りて、無形にして絶えず呼ぶ、人人の靈  
を救ふ主よ、爾は聖なり。

しよてんし なんじら せい あい もつ たがい しんせい こうみよう わか おごそか うた  
諸天使よ、爾等は聖なる愛を以て互に神聖なる光明を分ちて、嚴にハリストスに歌  
ふ、獨大仁慈なる主よ、爾は聖なり。

われ ら けいけん こころ いた だいいち ひかり い だいに ひかり もの いのち なら  
我等敬虔の心を抱きて、第一の光より出でたる第二の光なる者の生命に效ひて、ハ  
リストスに歌はん、我等の靈を救ふ主よ、爾は聖なり。

**生神女讃詞**

どうていじょ おのれ わね もつ いっさい む ゆう な ことば ひと あい しゅ じれん よ なんじ  
童貞女よ、己の旨を以て一切を無より有と爲しし言、人を愛する主は慈憐に由りて爾  
より身を取りて、人と爲り給へり。

**第四歌頌**

イルモス、ハリストス神、人を愛する主よ、爾の攝理に由りて、爾の言ひ難き智慧  
の光榮は天を蔽へり。

しゆうじん すくい え ほつ こうおん ことば われ なんじ いましめ そむ もの すく たま われ  
衆人が救を得んことを欲する洪恩なる言よ、我爾の誠に背きし者を救ひ給へ、我  
を遣つる母れ。

われ ふとう もの むち よく ふけ きんじゆう に もの な こうおん かみ ことば われ  
我不當の者は無知の慾に耽りて、禽獸に似たる者と爲れり。洪恩なる神の言よ、我  
を憐みて救ひ給へ。

**致命者讃詞**

ちめいしや なんじら けいけん おっしん も よ しば ひ や まよい や たま  
致命者よ、爾等は敬虔の熱心に燃ゆるに因りて、縛られ、火に焚かれて、迷を焚き給  
へり。

**致命者讃詞**

ふく もの なんじら ばんゆう ぞうせいしゅ なんじら うち いのち き たも しんれい  
福たる者よ、爾等は萬有の造成主ハリストスを爾等の中に生命の樹と有ちて、神靈  
の樂園と現れたり。

**生神女讃詞**

かみ おんちよう こうむ いさぎよ どうていじょ わ くら ちえ おんちよう ほどこ われ まった むち  
神の恩寵を蒙れる潔き童貞女よ、我が味みたる智慧に恩寵を施して、我を全く無智  
より釋き給へ。

又

イルモス、主よ、我爾の風聲を聞きて懼れたり、爾の作爲を悟りて驚けり。

しよひん てん し へら ほうじしや まえ た わ たましい きず いや  
諸品の天使よ、選ばれたる奉事者としてハリストスの前に立ちて、我が靈の傷を醫  
さんことを彼に祈り給へ。

しゅさい むけいしや ぐん つつし なんじ ほうざ めぐ つね よ しゅ こうえい なんじ ちから き  
主宰よ、無形者の軍は敬みて爾の寶座を繞りて、常に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸  
す。

ハリストスよ、天使の品位は爾が肉體を以て地上に死すべき人人と偕に居るを見て驚

きたり。

生神女讃詞

第七調 月曜日の早課 五三五

第七調 月曜日の早課 五三六

至浄なる神の母、言ひ難く身にて神を生みし讚美たる者よ、爾に祈る、我等が救はれんことを祈り給へ。

第五歌頌

イルモス、言よ、我等は爾の光榮と讚美との爲に夙に興きて、爾が我等に援助の爲に武器として賜ひし爾の十字架の形を絶えず讚め揚ぐ。

我慾に耽る者は怠惰の中に生を耗して、審判せられんとする逃れ難き爾の審判に戦く。主よ、我を憐み給へ。

瞽者の目を啓きたる言よ、吾が靈の大きく矇みたる眸子を啓きて、爾の誠の光を見るを得しめ給へ。

致命者讃詞

勇敢なる受難者よ、爾等は堅固なる意志を以てハリストスを承け認めて、種種の苦の傷を忍び給へり。故に讚美せらる。

致命者讃詞

致命者よ、爾等は凡の苦の激浪を躑えて、上なる國の港に到りて、誠の穩静を樂しみ給ふ。

生神女讃詞

童貞女よ、望を以て萬有を造りし神言は、言に超えて爾より身を取り給へり。彼に我等衆の爲に熱切に祈り給へ。

又

イルモス、慈憐なる主よ、我朝の禱を爾に奉りて、爾に呼ぶ、諸罪に味まされたる我が靈を爾の戒の光にて照して、導き給へ。

セラフィム等は無形の流光に耀かされて、聖にせられし口を以て無原至上なる神元を歌ふ。

至上なる睿智の造物たるヘルウィム等は神の光明を見るに勝へずして、聖にせられし輝ける翼にて蔽はる。

光榮なる寶座は極めて華麗豊富なる神の光明を樂しみて、天上の言ひ難き奥秘を見る者と現る。

生神女讃詞

至浄なる者よ、神の性は爾の純潔至聖なる腹に於て混淆なく變易なく人の性に合せられて、一位と爲り給へり。

第六歌頌

イルモス、イオナは地獄の腹より呼べり、我が生命を淪滅より引き上げ給へ、我等は爾に呼ぶ、全能の救世主よ、我等を憐み給へ。

諸罪の淵は我を圍みて、我滅込の深處に降りり。言よ、昔イオナを朽壞より生命に升せし如く、我を升せ給へ。

第七調 月曜日の早課 五三七

おもい あらなみ われ おぼ じれん しゆ われ まこと つうかい みなと むか わ ころ  
思念の激浪は我を溺らす。慈憐なる主よ、我を眞の痛悔の港に向はしめて、吾が心  
を穩静に護り給へ。 **致命者讃詞**

せい ちめいしや なんじ ら しん まち ぼうぎやくしや いざない わな のが てき や きず  
聖なる致命者よ 爾等は信に護られて、暴虐者の誘惑の機檻を脱れ、敵の矢に傷つ  
けられざりき。 **致命者讃詞**

ちめいしや なんじ ら あい もつ かみ あ よ あい にく ばんゆう ぞうせいしゆ とも な  
致命者よ、爾等は愛を以て神に擧げられ、世の愛を悪みて、萬有の造成主の友と爲  
り給へり。 **生神女讃詞**

さんび しょうじよ われ ら なんじてん ばんぐん もだ こえ もつ かしょう しせい ことば う  
讚美たる少女よ、我等は爾天の萬軍の黙さざる聲を以て歌頌する至聖なる言を生み  
し者を讚め歌ふ。

又 イルモス同上

しゆ せい ら しゆ こうみよう てら つね その い がた こうえい かしょう もの あらわ  
主制等は主の光明に照されて、恒に其言ひ難き光榮を歌頌する者と現る。 **二次。**  
しんせい のうりよく ら あた ところ のうりよく み あい もつ おごぞか これ さんえい  
神聖なる能力等は能はざる所なき能力を見て、愛を以て嚴に之を讚榮す。

生神女讃詞

どうていじよ なんじ おう ぞく い せい こ ばんゆう おう ことば う じつ どうていじよ  
童貞女よ、爾は王の族より出でて、性に超えて萬有の王たる言を生みて、實に童貞女  
に止まり給ふ。

第七歌頌

イルモス、きゆうせいしゆ なんじ も いろり つゆ そそ しょうしや すく うた しゆ  
イルモス、救世主よ、爾は燃ゆる爐に露を注ぎ、少者を救ひて歌はしめたり、主  
わが せんぞ かみ なんじ よよ あが ほ  
我が先祖の神よ、爾は世世に崇め讚めらる。

たましい さんび まつり かみ たてまつ つと つうかい いま いのち ぼうえき おこな あいだ ぼうえき  
靈よ、讚美の祭を神に奉りて、務めて痛悔し、今の生の貿易の行はるる間に貿易  
して、ぜんこう と え  
善行の利を獲よ。

たましい し おの ちか かいかい かな み むす おそ み むす き ごと  
靈よ、死の斧は邇づく、悔改に合ふ果を結べ、恐らくは果を結ばざる樹の如く「ゲ  
エンナ」の火に投げられて、哭きて慰を獲ざらん。

致命者讃詞

せい ちめいしや ち あめ まよい いろり け しょうしや ごと よ わ せんぞ かみ なんじ  
聖なる致命者は血の雨にて迷の爐を滅して、少者の如く呼べり、我が先祖の神よ、爾  
はあが ほ  
は崇め讚めらる。 **致命者讃詞**

ちめいしや なんじ ら ひかり こ な した ひかり あわ ゆえ およ くらやみ あ もの  
致命者よ、爾等は光の子と爲りて、慕ひし光に合せられたり、故に凡そ幽暗に在る者  
を照して、まよい やみ さん たま  
迷の暗を散じ給ふ。 **生神女讃詞**

いさぎよ どうていじよ や なんじ いばら なんじ よしょう けだしなんじ へんえき ひ う たま ゆえ  
潔き童貞女よ、焚かれぬ棘は爾を預象せり、蓋爾は變易せざる火を生み給へり。故  
にわれ なんじ よ わ がっしつ よく や たま  
に我爾に呼ぶ、我が物質の慾を焚き給へ。

又

イルモス、けいけん しょうしや ひ いろり なげう ひ か つゆ な うた もつ よ  
イルモス、敬虔の少者は火の爐に擲たれて、火を易へて露と爲し、歌を以て籲べり、  
しゆ わ せんぞ かみ なんじ あが ほ  
主我が先祖の神よ、爾は崇め讚めらる。

おごぞか なんじ ほうざ めぐ てん し ひんい た なんじ さんえい よ しゆ  
ハリストスよ、嚴に爾の寶座を繞れる天使の品位は絶えず爾を讚榮して呼ぶ、主  
わが かみ なんじ あが ほ  
我が神よ、爾は崇め讚めらる。 **二次。**

ねっしん しゅりょう ら なんじ ゆいいち わげん しゅりょう めぐ た さんえい たてまつ よ しゅ  
熱心なる首領等は爾唯一無原なる首領を繞りて、絶えざる讃榮を奉りて呼ぶ、主  
わ かみ なんじ あが ほ  
我が神よ、爾は崇め讃めらる。 **生神女讃詞**  
かみ はは なんじ たお ゆいいち にせい いちい わ せんぞ かみ おそ  
神の母よ、爾は種なく唯一のハリストス、二性にして一位なる我が先祖の神、畏る  
せつり おこな もの う たま  
べき攝理を行ふ者を生み給へり。

### 第八歌頌

イルモス、我等屬神の露を受けし者は、爐に在る少者に效いて、信を以て呼ばん、主  
ぞうぶつ しゅ あが ほ  
の造物は主を崇め讃めよ。

われ ふとう もの かがや ともしび ごと ことば う むち よく かたが つね あく くらやみ  
我不當の者は輝ける燈の如く言を受けたれども、無知の慾に傾きて、常に悪の幽暗  
うち ゆ  
の中を行く。

しゅ ちか われ ら しん ごと たましい つと う なか けいせい いさ よ こうおん  
主は近し、我等の信ずるが如し。靈よ、勤めて倦む勿れ、警醒して勇ましく呼べ、洪恩  
にして仁愛なる主よ、我を救ひ給へ。 **致命者讃詞**

ちめいしや なんじら しんせい あまみ な くるしみ にが しの いま かみ ことば いた みずか  
致命者よ、爾等は神聖なる甘を嘗めて、苦の苦きを忍びたり、今は神言と至りて親  
しくなりたるを以て楽しみ給ふ。 **致命者讃詞**

いた さんび ちめいしや なんじら しんせい あんそく い のぞ ところ ふく え ゆえ  
至りて讃美たる致命者よ、爾等は神聖なる安息に入りて、望みし所の福を獲たり。故  
われ ら よろ かな なんじら さんよう  
に我等宜しきに合ひて爾等を讃揚す。 **生神女讃詞**

どうていじょ なんじ さん よ ひと せい のろい ど けだしなんじ いた しゅくふく  
童貞女よ、爾の産に因りて人の性は詛より解かれたり。蓋爾は至りて祝福せられ  
しゅ しゅくふく もつ ばんしゅう かざ もの う たま  
たる主、祝福を以て萬衆を飾る者を生み給へり。

又

イルモス、唯一無原なる光榮の王、天軍の崇め讃め、天使の品位の戦く主を、司祭  
うた ひとびと かれ よよ ほ あ  
よ、歌へ、人人よ、彼を世世に讃め揚げよ。

いっさい のぞみ かみ ぞく かしこ かがや ひかり たの てんししゅ なんじら かしよう もの しょうなん  
一切の望を神に屬し、彼處より輝ける光を楽しむ天使首よ、爾等を歌頌する者が諸難  
より救はれんことをハリストス萬有の王に祈り給へ。 **二次。**

ああ しょうてんし いた どうと しんれい いっさい ぶつしつ よく あずか もの およ あい もつ なんじら  
嗚呼諸天使、至りて尊き神靈、一切の物質の慾に與らざる者よ、凡そ愛を以て爾等  
とも ばんせい  
と偕に萬世にハリストスを讃め揚ぐる者を救ひ給へ。 **生神女讃詞**

しょうしんどうていじょ なんじ い がた なんじ はら うち ちか ひかり う いのち くらやみ あ  
生神童貞女よ、爾は言ひ難く爾の腹の内に近づかれぬ光を受けて、生命の幽暗に在  
る者を照して、不可思議に爾より出でたるハリストスを敬虔に讃榮するを得しめ給  
もの てら ふかしぎ なんじ い けいげん さんえい え たま  
へり。

第七調 月曜日の早課 五四一

第七調 月曜日の早課 五四二

次ぎて生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」、**附唱と共に**、「ヘルウィムより尊く」。  
并に叩拜。

### 第九歌頌

イルモス、性に超えて母、性に順ひて童貞女、女の中に獨祝讃せらるる者を、我等信者  
うた もつ しょうしんじょ あが ほ  
は歌を以て生神女として崇め讃む。

み しんばん ちか われ ていざい あた おこない たも みずか のぞみ うしな ぎ しんばんしや  
視よ、審判は近づく、我定罪に當る行を有ちて、自ら望を失ふ。義なる審判者ハ  
リストス神よ、我を定罪する勿れ。



人を愛する主よ、我信あるハナアンの婦の如く爾に呼ぶ、我を憐め、昔の偃みたる婦の如く我を直くして、正しく爾の蹤に隨はしめ給へ。

致命者讃詞

受難者よ、爾等は衣と共に凡の悪を脱して、劇しき苦の衣を以て己の爲に光榮の衣服を求め得たり。

致命者讃詞

受難者よ、生ける者の神聖なる國、天上の域邑シオンは爾等功勞の華美を以て輝ける冢子を受けたり。

生神女讃詞

潔き童貞女よ、爾より輝き出でたる言の光れる光線にて我諸罪諸愆の黒暗に蔽はるる者を照し給へ。

又

イルモス、天より高き讚美たる者よ、爾は無原なる言を種なく孕みて、肉體を取りし神を人人の爲に生み給へり。故に我等皆爾を崇め讃む。

衆天使の品位は神元の流光の輝煌を楽しみて、絶えず至榮なる神を歌頌して、恒に崇めて讚榮す。二次。

嗚呼ヘルウィム及びセラフィム、能力、權柄、天使、天使首、首領と寶座、及び主制よ、我が諸愆の執より救はれんことを熱切にハリストスに祈り給へ。

生神女讃詞

至聖なる生神女よ、爾の子の前に母の勇敢を有つ者として、今愛を以て爾を歌ふ者を諸罪、諸病、諸難より救ひ給へ、我等皆常に爾を崇め讃めん爲なり。

次に「常に福にして」、及び叩拜。聯禱、光耀歌、及び常例の聖詠。

挿句に痛悔の讃頌、第七調。

救世主よ、果を結ばざる無花果樹の如く、我罪人を斫る勿れ、求む、多年之を待ちて、吾が靈を痛悔の涙にて濕し給へ、我が爾に矜恤の果を捧げん爲なり。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。

爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を楽しましめ給へ。願はく

第七調 月曜日の早課 五四三

第七調 月曜日の眞福詞 五四四

は爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

義なる日として爾を歌ふ者の心を照し給へ、主よ、光榮は爾に歸す。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給へ、我が手の工作を助け給へ。

我等は爾の聖なる受難者の記憶を祭りて、爾を讃め歌ふ、主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

我等爾に、仁慈なる主よ、光榮は爾に歸すと呼ぶ者の生命を、生神女の祈禱に由りて、平安ならしめ給へ。

次ぎて「至上者よ、主を讚榮し」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、聯禱。次に

第一時課、并に發放詞。



月曜日の眞福詞、第七調。

美しくして食ふに善き果は我を殺せり。ハリストスは生命の樹なり、我是より食ひて死せず、乃ち盜賊と共に呼ぶ、主よ、爾の國に於て我を憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

我信あるハナアンの婦の如く、吾が心の痛の中に呼ぶ、救世主よ、仁慈なるに因りて我を憐み給へ、我敵の種種の悪謀に悩まされて、常に荒らさるる靈を有てばなり。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

主恩主よ、ヘルワイムとセラフィムと寶座、首領と能力、天使首と天使の軍、主制と睿智なる權柄の會は常に爾を讚榮す。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

受難者は神に擧げられて、悪敵の驕りを全く斃し、勝利者と現れて、今天に歡喜の中に居りて、不朽の光榮を以て耀く。

光榮

分れざる三者、一性の惟一者、三位の性、父、子、聖神よ、我等は天上の軍と偕に爾惟一の神性、惟一の能力に伏拜す。神は一にして、三者は一體なり。

今も

童貞女よ、我度生の逸樂に汚されて、爾無玷の者に趨り附く、我が至りて不當なる靈を凡の傷及び諸罪より救ひ給へ、我が爾永福なる者を讚美せん爲なり。



第七調 月曜日の眞福詞 五四五

第七調 月曜日の晩課 五四六

月曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に痛悔の讚頌、第七調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

大仁慈なる主宰及び神よ、爾が知る所の法を以て我が心の中に爾を畏るる畏を納れ、我に凶悪者の行爲を忌むを賜へ、我に靈を全うして爾を愛し、救を施す爾の旨を行ふを賜へ、爾は、求めよ、然らば得んと言ひ給ひし我等の神なればなり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

我悪鬼の爲には嘲笑、人の爲には恥辱、義者の爲には歎息、天使等の爲には悲愁、空氣と地と水との爲には汚穢と爲れり、蓋無數の行を以て體を汚し、靈及び思を汚

して、神の敵と爲れり。嗚呼主よ、我爾の前に罪を犯し罪を犯せり、我を赦し給へ。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

主宰よ、爾に祈る、我果を結ばざる者を永く忍びて、果を結ばざる樹の如く死の斧を以て我を斫る勿れ、火に擲つ勿れ。我が救世主ハリストスよ、祈る、人を愛する主として、我を果を結ぶ者と爲し、我に痛悔の時を與へ給へ、我が多くの罪を滌はん爲なり。

次に月課經の聖人の讚頌。光榮、聖人の、今も、本調の生神女讚詞。若し月課經なくば、又聖大前驅イオアンの讚頌。第七調。

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

荒野に玷なき生を送りし前驅よ、罪に由りて荒れたる我が心を新になし給へ。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

預言者よ、我等は爾を世に居る者の爲に神聖なる春を預象する最美しき班鳩と知りて讚榮す。

句、蓋彼が我等に施す憐みは大なり、主の眞實は永く存す。

我が生命の轉達者、我が靈の守護者たる神聖なる前驅よ、我爾の僕を人の謫の舌より救ひ給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

女宰よ、我怠惰の紛擾れに荒らさるる者を救の穩静なる港に向はしめ給へ。

第七調 月曜日の晩課 四五七

第七調 月曜日の晩課 四五八

次ぎて「穩なる光」本日の提綱。「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」。

挿句に痛悔の讚頌、第七調。

仁慈なる神よ、我蕩子の如く來れり、人を愛する主よ、我俯伏する者を爾が傭人の一の如く納れて、我を憐み給へ。

句、天に居る者よ、我目を舉げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我等の神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

盜賊に遇ひたる者の傷つけられし如く、斯く我も多くの罪に陥りて、吾が靈傷つけられたり。我罪なる者は誰にか趨り附かん、唯爾慈憐なる靈の醫師に就きて祈る、神よ、我に爾の大なる仁慈を沃ぎ給へ。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に鑿き足れり。我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに鑿き足れり。

致命者讚詞

聖なる致命者、善く難を受けて榮冠を冠りし者よ、我等の靈の救はれんことを主に祈り給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

無形なる言ひ難き日の雲よ、慶べ、至りて光明なる燈よ、慶べ、純金の燈臺よ、慶べ、至聖なる女宰よ、爾に由りてエウは呪詛より解かれたり。至淨なる者よ、爾の寛容なる子及び神の前に勇敢を有つ者として、爾の母たる祈祷を以て絶えず我等の爲に捧り給へ。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひて」、聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、聯祷、及び發放詞。

~~~~~

月曜日の晩堂課

至聖なる生神女に奉る祈祷の規程、第七調。

第一歌頌

イルモス、己の臂にて敵を敗りて、騎兵軍將を沈めし主を、我等の贖罪主神として歌はん、彼光榮を顯したればなり。
至淨なる者よ、我等は爾我が救及び神聖なる贖罪の緣由なる者に祈る、我等の救はれんことを祈り給へ。

第七調 月曜日の晩堂課 五四九

第七調 月曜日の晩堂課 五五〇

至淨なる者よ、我全身劇しき誘惑、患難、諸罪の中に在る者は爾に呼ぶ、我爾の僕を救ひ給へ。 光榮
我等爾 潔き童貞女、造成主の母に祈る、我等を悪鬼の種種の害より脱れしめ給へ。

今も

言に超えて身にて言たる生命の首ハリストス我が神を生みし者よ、我等の救はれんことを祈り給へ。

第三歌頌

イルモス、ハリストスの教會は信を以て堅められたり、蓋絶えず歌を奉りて呼ぶ、主よ、爾は聖なり、我が神は爾を歌ふ。
我極めて害ある悪の途を行きて、我が救ひの途を得ざりき。至りて無玷なる女宰よ、爾我を之に向はしめ給へ。
純潔なる者よ、我獨爾を能力及び堅固、佑助及び倚頼として有つ。我が逝世の時に爾我の爲に保護者と爲り給へ。 光榮
至りて無玷なる者よ、我常に爾に祈る、我が死する時に現れて、爾の僕を苦より脱れしめ給へ。 今も
主我が救世主よ、爾は言ひ難く童貞女より生れ、欲せし如く現れて、世界を新にし給へり。

第四歌頌

イルモス、主よ、我爾の風聲を聞きて懼れたり、爾の作為を悟りて驚けり。
我が主宰の戒に背きて、我は諸敵に執はれ易き者と爲れり。女宰よ、爾我を脱れしめ給へ。

至淨なる者よ、死の時に我を援けて、我が愆に染みたる靈を悪鬼より救ひ給へ。

光榮

至淨なる女宰よ、我が諸罪の縲紲を解きて、爾の祈禱を以て我に永遠の生命を得しむる轉達者と爲り給へ。

今も

至淨なる者よ、我等は爾の産の後に爾を復童貞女として歌頌し、爾を我が神の母とし讃榮す。

第五歌頌

イルモス、言よ、我等は爾の光榮と讚美との爲に夙に興きて、爾が我等に援助の爲に武器として賜ひし爾の十字架の形を絶えず讃め揚ぐ。

烈しき暴風に擾さるる者の爲に港、信を以て救はるる者の爲に救の門たる仁慈なる童貞女よ、我爾の僕を救ひ給へ。

第七調 月曜日の晩堂課 五五一

第七調 月曜日の晩堂課 五五二

生神童貞女よ、爾の多くの慈憐を豊に我爾の僕の上に現して、我を畏るべき將來の審判より脱れしめ給へ。

光榮

諸愆の深き夜は吾が靈を圍みて、滅亡の淵に送る。生神女よ、爾の祈禱の光を以て我爾の僕を救ひ給へ。

今も

恩寵を蒙れる至聖なる童貞女、言に超えて定期に言を生みし者よ、彼に我等の靈を救はんことを祈り給へ。

第六歌頌

イルモス、イオナは地獄の腹より呼べり、我が生命を淪滅より引き上げ給へ、我等は爾に呼ぶ、全能の救世主よ、我等を憐み給へ。

永貞童女よ、我等は爾を誘惑の中に堅固なる保護者、憂愁の中に有力なる救、悲哀の中に安息、患難の中に扶助として有つ。

至淨なる者よ、爾は我が爲に生涯の守護者なり、爾我を死の時に悪鬼より救ひ、爾死の後も我を安息せしめ給へ。

光榮

生神童貞女よ、爾は尊貴なる聖天使等の飾、衆人の喜悅なり。爾我を生命に導き給へ。

今も

至りて無玷なる者よ、爾我の不當なる靈、度生の誘惑ひと力の不能とを甚しく病める者を醫し給へ。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第七調。

ハリストス神よ、爾は仁慈の恩澤に因りて聖なる童貞女より甘じて身を取り給へり。
人を愛する主として、彼に因りて我等の生命を守り給へ。

第七歌頌

イルモス、救世主よ、爾は燃ゆる爐に露を注ぎ、少者を救ひて歌はしめたり、主
我が先祖の神よ、爾は世世に崇め讃めらる。

至りて無玷なる童貞女よ、我が罪の多きを思の中に入れて望を失ふ、故に爾に呼
ぶ、我を助け給へ、我が終に至るまで亾びざらん爲なり。

潔き者よ、我爾を生命の實在の母と知りて、爾に呼ぶ、我を靈の死より救ひて、永遠
の生命を得しめ給へ。

光榮

至りて無玷なる者よ、歌を以て熱信に爾を尊む者を諸難、諸慾、諸病、誘惑と度生
の諸罪、及び永遠に滅えざる火より救ひ給へ。

今も

讚美たる潔き生神女よ、凡の舌は爾を我が族の實の光榮と美譽、及び迷ひし者の

第七調 月曜日の晩堂課 五五三

第七調 月曜日の晩堂課 五五四

嚮導師として讚榮す。

第八歌頌

イルモス、世界の造成主、ヘルウィムの爲に畏るべく、セラフィムの爲に奇異なる主
を、司祭等と諸僕と諸義人の靈よ、歌ひ、崇め、世世に彼を讃め揚げよ。

我至りて不當なる者は我が一生を怠惰の中に費し、今終に近づきて惑ふ。女宰よ、我
を助け給へ。

女宰よ、爾は罪なる者の避所、倒されし者の更新なり。故に我爾の帡幪に趨り附く、我
を救ひ給へ。

光榮

眠らずして祈り給ふ世界の純潔なる女宰よ、信を以て爾の聖像を尊む者を將來の
審判より脱れしめ給へ。

今も

童貞女、神の聘女よ、凡の舌は爾を讚榮して歌ふ、爾讚美たる神を生みたればなり。

爾を歌ふ者の靈を救はんことを絶えず彼に祈り給へ。

第九歌頌

イルモス、性に超えて母、性に順ひて童貞女、女の中に獨祝讃せらるる者を、我等信者
は歌を以て生神女として崇め讃む。

生神女よ、信を以て爾の慈憐の下に趨り附く者は生命の憂愁及び災禍より救はる。故
に我も爾の帡幪に趨り附きたり。

堅固なる保護者、憂ふる者の壊られぬ墻たる潔き者よ、我を諸慾、諸罪、及び永遠
の火より救ひ給へ。

光榮

潔き童貞女よ、爾より輝き出でたる言の光明なる光線を以て我を照し、仁慈なる
に由りて我を救ひて、苦より脱れしめ給へ。

今も

潔き者よ、爾は萬物を保つ主を爾の聖なる手に保ち給へり。彼に我等を敵の悪事

に悩まされぬ者として救はんことを祈り給へ。

次ぎて「常に福にして」、及び叩拜。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞。其他常例の如し、并に發放詞。

~~~~~

第七調 月曜日の晩堂課 五五五  
第七調 火曜日の早課 五五六

火曜日の早課

第一の誦文の後に痛悔の坐誦讃詞、第七調。

我が靈よ、痛悔の良薬を有ちて、近づきて俯伏し、歎息して呼べ、靈體の醫師、仁愛なる主よ、我を我が多くの罪より釋き給へ、神よ、我を罪女と、盜賊と、税吏とに加へて、我に不法の赦を與へて、我を救ひ給へ。

句、主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。

ペトルの違背を涙にて潔め、税吏の諸罪を歎息に由りて赦しし仁愛の主よ、我を憐み給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

諸天に容れられぬ主を爾の腹に容れし者よ、慶べ、諸預言者の宣傳なる童貞女、之に由りてエムマヌイルの輝き出でたる者よ、慶べ、ハリストス神の母よ、慶べ。

第二の誦文の後に坐誦讃詞、第七調。

我税吏の痛悔に效はざりき、罪女の涙を得ざりき、是くの如き矯正を爲さざるに因りて望を失ふ。求む、神よ、爾の慈憐を以て我を救ひ給へ、爾は人を愛する主なればなり。

句、主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ。

罪女の涙及びペトルの涕泣を受け、深處より歎息せし税吏を義と爲しし救世主よ、我が行に由りて失望せし我をも憐みて救ひ給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

致命者讃詞

主よ、爾の聖者は地上に戦ひて、敵に勝ちて、偶像の迷を虚しくせり。故に爾人を愛する主宰、仁慈なる神、世界に大なる憐を賜ふ主より榮冠を受けたり。

光榮、今も、生神女讃詞。

祝讃せらるる生神女よ、爾は天軍に超えたり、蓋神の殿と爲り給へり、ハリストス我が靈の救主を生みたればなり。

第三の誦文の後に坐誦讃詞、第七調。

人を愛する主よ、我罪女の如く爾の前に俯伏し、傷感の涙を獻げて祈る、仁慈の主よ、彼の如く我を憐みて、前驅の祈禱に因りて我を救ひ給へ。

主よ、爾洪恩なるに因りて、爾の慈憐を垂れて、仁慈の「イソプ」を以て吾が靈の汚を洗へ。救世主よ、我を憐みて、諸愆の滓より潔め給へ。獨大仁慈なる主宰よ、爾の前驅の祈禱に由りて爾の造物を救ひ給へ。

第七調 火曜日の早課 五五七

第七調 火曜日の早課 五五八

### 光榮、今も、生神女讃詞。

讚美たる生神女よ、爾は「ハリストス」等の熱切なる轉達者及び保護者なり。故に前驅と偕に爾の子に慈憐を我等に垂れんことを祈り給へ。

我が主イイソス ハリストス及び其聖致命者に奉る痛悔の規程。イオシフの作。第七調。

### 第一歌頌

イルモス、己の臂にて敵を敗りて、騎兵軍將を沈めし主を、我等の贖罪主神として歌はん、彼光榮を顯したればなり。

ハリストスよ、我常に罪を行ひて、爾恒忍を以て我が痛悔を待つ主を畏れず。仁慈なる主として我に反正の思を興へて、我を遣つる母れ。

ハリストスよ、我不當の者は罪に罪を加へて、常に之を息めず。獨罪なき仁慈なる主よ、我を憐みて救ひ給へ。 致命者讃詞

勇敢なる受難者は勇ましく相招きて曰へり、此の演武場は功勞を満てたり、趨り附かん、戦の首たるハリストスは彼處に首座を取りて、敵に勝つ者に榮冠を賜ふ。

### 致命者讃詞

睿智なる致命者よ、爾等は多種の苦に因りて肉體を脱し、不朽の衣を衣て、仁慈の父の子と爲り給へり。 生神女讃詞

神の母童貞女よ、多くの罪に惱まされたる吾が靈を醫し給へ、吾が感謝の聲を以て恒に熱切に爾を讚榮せん爲なり。

又聖大前驅イオアンの規程。イオシフの作。第七調。

イルモス、主よ、曾て流れ易き性の水は爾の瞬にて地の姿に變れり、故にイズライリは足を濡らさず渡りて、凱歌を爾に歌ふ。

福たる前驅よ、爾は自ら飾られて、教會の飾と爲れり。常に之を爾の祈禱を以て凡の異端の暴風より救ひて、堅固なる動かされぬ者として護り給へ。

神聖なる前驅よ、爾は無玷なる聖にせられたる祭として造物主に獻げられて、悪なき羔の如く屠られたり。故に我信を以て爾に祈る、凡の敵の悪より我を救ひ給へ。

至榮なる前驅よ、慈憐に因りて衆人の恙及び病を負ひたりし言に常に祈りて、我等の體と靈との諸病を醫し給へ。 生神女讃詞

至聖なる者よ、爾は悟り難き言、神性を以て我が性と一位に合せられし主を身に生み給へり。信を以て恒に爾を讚美する者を救はんことを絶えず彼に祈り給へ。

第七調 火曜日の早課 五五九



## 第三歌頌

イルモス、言を以て天を堅め、地の基を多水の上に定めし仁愛の主よ、我が智慧を爾の旨に堅め給へ。

多くの仁愛に因りて人人の諸罪を顧みざるハリストス、唯一の救世主よ、我が多くの悪を顧みる勿れ、我が爾至仁なる主を讃榮せん爲なり。

ハリストスよ、我恥を知らざる者は肉體の望を行はん爲に爾の望を棄てたり、故に焰の苦を畏る。言よ、我を此より脱れしめ給へ。 致命者讃詞

致命者は肉體の苦に遭はせられて、苦なき生命と安息とに目を注げり、之を獲て喜びて、常に信者を苦の中に安ぜしめ給ふ。 致命者讃詞

受難者は功勞の輝煌を以て迷の深き夜を散じ、暮れざる光に移りて、常に我等の苦の暗を拂ひ給ふ。 生神女讃詞

至淨なる童貞女よ、預言者は爾を神聖なる門と預見せり、獨神が、親ら知れる如く、過り給ひし者なり。故に我爾に祈る、爾親ら我が爲に痛悔の門を啓き給へ。

## 又

イルモス、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの能力を備へし主・救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。

前驅よ、爾は日の如き光にて一切の造物を照し給ふ、靈智なる日の輝ける星として現れたればなり。彼に大く病める我等の心より諸慾の暗を拂はんことを熱切に祈り給へ。

神聖なる預言者よ、爾は律法と恩寵との間に立ちて、明かに衆人に其一の廢せられ、其一の盛に輝きて、罪に由りて古びたる者の爲に全き更新と爲らんことを知らしめ給ふ。

ハリストスの授洗者よ、我等呼ぶ、至仁なる主に祈りて、我等を悪鬼の攻撃。度生の誘惑、諸の憂愁より救ひて、審判の日に苦を免れしめ給へ。

## 生神女讃詞

祝福せられし童貞女、言ひ難く神を生みし潔き女宰よ、其神聖なる授洗者と偕に、我等度生の誘惑に陥りて、罪に縛らるる者の爲に絶えず祈り給へ。

## 第四歌頌

イルモス、ハリストスよ、預言者アウワクムは爾が肉體を以て來るを信ぜしめて呼

べり、主よ光榮は爾の力に歸す。

我生命に往く途に離れて、諸悪の穴に陥りたり。救世主よ、我を棄つる勿れ。

主宰神の言よ、我に涙の流を與へ給へ、我が多くの罪の泥を洗はん爲なり。

## 致命者讃詞

こひつじ ごと ほふり ため ひ ちめいしゃ たたか てき ほふ こうえい え  
羔の如く屠の爲に牽かるる致命者は戦ふ敵を屠りて、光榮を獲たり。

### 致命者讃詞

さんび せい ちめいしゃ その ち ながれ もつ しゅう ため あまみ ながれ う そな  
讚美たる聖致命者は其血の流を以て衆の爲に甘の流を受くることを備へたり。

### 生神女讃詞

しょうじょ しゅ なんじ いさぎよ ち み と なんじ てんたつ もつ しゅうじん つうかい たま  
少女よ、主は爾の潔き血より身を取りて、爾の轉達を以て衆人に痛悔を賜ふ。

又

イルモス、ちち ふところ はな ち くだ かんみ われなんじ おもんばかり ひみつ  
イルモス、父の懐を離れずして、地に降りしハリストス神よ、我爾の慮の秘密  
を聞いて、爾獨人を愛する主を讚榮せり。

こうめい ゆうかん もつ てき ぐん たお じゅせんしゃ われなんじ いの なんじ きとう もつ わ うち  
光明なる勇敢を以て敵する軍を斃しし授洗者よ、我爾に祈る、爾の祈禱を以て我が内  
に王たる罪を斃し給へ。

ふく もの なんじ れいち ともしび あらわ ひとびと おおい ぎ ひ しめ  
福たる者よ、爾は靈智なる燈と現れて、人人に大なる義の日たるイイススを示せ  
り。彼に由りて衆人の心の照されんことを祈り給へ。

われ ふほう ぼら うま もの おこたり うち いのち わた かしこ くるしみ おそ じゅせんしゃ かんみ  
我不法に妊まれて生れし者は怠惰の中に生を度りて、彼處の苦を畏る。授洗者よ、神  
に祈りて、我を是より脱れしめ給へ。

じゅせんしゃ いの われ なんじ どうと もの ため かんみ きとう さき たま くれ われ ち およそ はなはだ  
授洗者よ、祈る、我等爾を尊む者の爲に神に祈禱を捧げ給へ、彼が我等を凡の甚  
しき患難及び悪鬼の害より脱れしめん爲なり。

### 生神女讃詞

じゅんけつ もの りっぽう かげ たほう もつ なんじ かんみ う もの よしょう くれ われ およそ  
純潔なる者よ、律法の影は多方を以て爾神を生みし者を預象せり。彼に我を凡の  
不法及び肉慾より救はんことを祈り給へ。

### 第五歌頌

イルモス、はじめ ふち やみ しりぞ はじ つく ひかり せかい かがや ばんゆう ぞうせいしゅ  
イルモス、元始の淵の暗を退けて、始めて造られし光を世界に輝かしし萬有の造成主  
よ、諸慾の夜を退けて、靈智なる光を我に輝かし給へ。

ことば ち しんぼん ととき われ なんじ ぎ いかり のが たま ひとり ばんゆう ぞうせいしゅ  
言よ、地を審判せん時、我を爾の義なる怒より脱れしめ給へ。獨萬有の造成主よ、  
痛悔を以て我を多くの罪より潔めて、爾の仁慈の殿と爲し給へ。

われ しょよく はなはだ やみ よ ちえ くら ところ むかんかく な し  
我諸慾の甚しき暗に由りて智慧は味まされ、心は無感覺と爲りて、何を爲すを知ら  
ず。ハリストスよ、我を反正せしめて、我に汚を潔むる痛悔を與へ給へ。

### 致命者讃詞

じゅなんしゃ なんじら いさ ち あせ うるお えんぶじょう は てん こうみょう いた  
受難者よ、爾等は勇ましく血の汗に霑されたる演武場を聘せて、天の光明に至りて、

第七調 火曜日の早課 五六三

第七調 火曜日の早課 五六四

いのち ほどこ て しょうり そんえい う ゆえ いまよこ たま  
生を施す手より勝利の尊榮を受けたり。故に今喜び給ふ。

### 致命者讃詞

じゅなんしゃ なんじら せい くるしみ もつ まこと あく かしら へび くる これ ころ  
受難者よ、爾等は聖にせられし苦を以て、實に悪の魁たる蛇を苦しめて之を殺し  
て、樂園の甘味を獲たり。故に爾等を崇め讚む。

### 生神女讃詞

ひ こうめい くも われ ため まこと つうかい れいち ひかり かがや あ おもい やみ さん たま  
日の光明なる雲よ、我の爲に眞の痛悔の靈智の光を輝かして、悪しき思の暗を散じ給

へ、我が信を以て爾を信者の救として歌はん爲なり。

又

イルモス、主我が神よ、我夜より寤めて爾に祈る、我に諸罪の赦を與へて、我が途を爾の誠の光に向はしめ給へ。

睿智なる者よ、爾は荒れたる思念の内に神を識らしむる呼ぶ聲と現れたり。故に爾に祈る、種種の犯罪に由りて荒れたる吾が靈を新になし給へ。

神聖なる預言者よ、爾は主宰の尊貴なる器と現れたり。爾の祈祷を以て我を不潔の行より脱れしめて、永遠の尊貴を獲しめんことを恩主に祈り給へ。

怠りの門に由りて諸の不法は我が内に入りたり。福たる前驅よ、我を痛悔の則に習はしめ給へ、我が熱心に主の道を行かん爲なり。

### 生神女讃詞

神の力に由りて死を以て死を滅しし生命を生みたる至聖純潔なる生神女よ、我が肉體の地上の思を殺し給へ。

### 第六歌頌

イルモス、仁慈なる主よ、我罪の深處に陥りて、イオナが鯨より呼びし如く爾に呼ぶ、人を愛する主よ、我が生命を淪滅より引き上げて、我を救ひ給へ。

我は新なる蕩子と爲り、逸樂の慾に従ひて、汚はしく生を送れり。ハリストス吾が神よ、我を反正せしめて、人を愛する主なるに因りて我を救ひ給へ。

嗚呼吾が靈よ、歎息せよ、歎息を免れん爲なり、涙を流せ、彼處に於て間斷なき涕泣、最苦しくして一も益を爲さざる者より救はれん爲なり。

### 致命者讃詞

尊貴なる大致命者よ、爾等はハリストスの教會の榮冠の中に入りたる寶玉と現れて、其至りて美しき飾と爲り給へり。

### 致命者讃詞

睿智なる致命者よ、爾等は神に於て宜しきに合ふ終を得て、終なき褒賞を繼ぎたり。故に我等が痛悔を以て終らんことを祈り給へ。

第七調 火曜日の早課 五六五

第七調 火曜日の早課 五六六

### 生神女讃詞

慈憐の淵を生みし仁慈なる永貞童女よ、我を無量の惡の深處より引き上げて、我に涙の泉を與へ給へ。

又

イルモス、イオナは地獄の腹より呼べり、我が生命を淪滅より引き上げ給へ、我等は爾に呼ぶ、全能の救世主よ、我等を憐み給へ。

靈智なる東の親しき友よ、爾は諸徳の光線にて光り、光明なる苦にて輝きて、一切の造物を照し給ふ。

ふく もの なんじ たい あ ろうふ い ゆえ なんじ よ おお つみ よ  
福たる者よ、爾は胎の荒れたる老婦より出でたり。故に爾に呼ぶ、多くの罪に因り  
て古びたる我を痛悔の徳を以て新になし給へ、爾の祈祷に因りてなり。  
く ひかり ともしび しんせい よげんしゃ なんじ きとう もつ わ ところ き ともしび ともし  
暮れざる光の燈、神聖なる預言者よ、爾の祈祷を以て吾が心の滅えたる燈を燃  
して、我を神の光に與る者と爲し給へ。 **生神女讃詞**  
しじょう どうていじよ ことば あめ ごと なんじ たいない くだ なんじ いの かれ わ かりょう あく  
至淨なる童貞女よ、言は雨の如く爾の胎内に降りり。爾に祈る、彼に我が無量の悪  
の流を涸らさんことを祈り給へ。

### 第七歌頌

イルモス、救世主よ、火は爐に在る爾の少者に觸れざりき、彼等を懼れしめざりき。  
そのとき ひとり ひとつ くち ごと うた しゅくさん い わ せんぞ かみ なんじ あが ほ  
其時三人は一の口の如く歌ひて、祝讃して云へり、我が先祖の神よ 爾は崇め讃め  
らる。  
きゅうせいしゅ われ は よく おちい きんじゅう に もの な くら なんじ われ ま  
救世主よ、我恥づべき愆に陥り、禽獸に似たる者と爲り、味まされて、爾が我を待  
ち給ふ恒忍を見ず。言よ、我に反正の時を與へて、我を救ひ給へ。  
われ おこたり うち いのち ついや おこな な み いま むかんかく じごく  
我怠惰の中に生を費して、行ふべからざることを爲せり、視よ、今無感覺にして地獄  
の門に近づけり。 ハリストス、獨仁慈なる主よ、我を棄つる勿れ。

### 致命者讃詞

えいち じゆなんしゃ なんじ ら えいえん いのち した よ たため ころ てき まった ころ てん  
睿智なる受難者よ、爾等は永遠の生命を慕ひて、世の爲に殺され、敵を全く殺して、天  
に飛び揚りて、恒に我等の爲に祈り給ふ。

### 致命者讃詞

ちめいしゃ なんじ ら にくたい きなん と まよい かせ と ねつせつ あい もつ たまい  
致命者よ、爾等は肉體の危難より釋かれて、迷の桎梏を釋き、熱切なる愛を以て靈  
を ハリストス、身にて繋がれて詛を釋きたる主に繋ぎたり。

### 生神女讃詞

いさぎよ もの よげんしゃ なんじ あらた まきもの そのうち ちち ことば しる もの よげん  
潔き者よ、預言者は爾を新たなる巻軸、其中に父の言の録されたる者として預見  
せり。故に祈る、我の多くの悪の書券を裂きて、我が生ける者の書に録されんことを祈  
り給へ。

第七調 火曜日の早課 五六七

第七調 火曜日の早課 五六八

### 又

イルモス、昔少者は燃ゆる爐を露を出す者し顯して、一の神を歌ひて曰へり、爾  
は崇め讃めらるる先祖の神なり。  
かわ ながれ もつ じれん ふち あら ぜんく なんじ きとう よ われ なみだ あめ たま  
河の流を以て慈憐の淵を洗ひし前驅よ 爾の祈祷に由りて我に涙の雨を賜ひて、  
わ にくたい しんれい けがれ まった きよ たま  
我が肉體と神靈との汚を全く潔め給へ。  
ふく もの ばんゆう うえ あ われら かみ いのり たてまつ その じれん よ われ おお つみ  
福たる者よ、萬有の上に在る我等の神に祈を奉りて、其慈憐なるに因りて、我多く罪  
を犯して今猶之を息めざる者をも憐まんことを求め給へ。  
み むす たましい つと つうかい おそ かみ しんぱん なんじ み むす いちじく  
果を結ばざる靈よ、務めて痛悔せよ、恐らくは神の審判は爾を果を結ばざる無花果樹  
の如く根より斫らん。主宰に呼べ、神よ、我を潔めて救ひ給へ。

### 生神女讃詞

じよさい われ ざいあく ころ たましい たも もの なんじおのれ さん もつ じごく ころ もの いの  
女宰よ、我罪惡に殺されたる靈を有つ者は、爾己の産を以て地獄を殺しし者に祈  
る、痛悔の方法を以て我を活かし給へ。

### 第八歌頌

イルモス、至高きに於て諸天使に黙さずして讚榮せらるる神を、諸天の天と地、山と岡  
と深處、及び悉くの人の族は歌を以て、造物主及び贖罪主として崇め讚めよ。

我無知なる者は害を爲す逸樂を多く樂しみて、凡の罪人に超えたり。至りて多くの  
慈憐を有つ主よ、我に諸罪の潔淨を與へ給へ。

新娶者は今門の側に在り、靈よ、燈を飾りて、矜恤と種種の善行との油を以て之  
に満てよ。門の未だ閉されざる先にハリストスと偕に言ひ難き喜に入らんことを務  
めよ。

### 致命者讚詞

ゆうかん じゆなんしや くるしみ おそ よ み よ い おとき みな けんご たましい  
勇敢なる受難者は苦を畏れずして呼べり、視よ、嘉く納るべき時なり、皆堅固なる靈  
を以て立ちて、僅なる苦に因りて苦なき生命と老いざる福樂とを獲ん。

### 致命者讚詞

つね しんせい みず の きゆうせいしゆ じゆなんしや なんじら おのれ こうろう なら もつ  
常に神聖なる水を飲ませらるる救世主の受難者よ、爾等は己の功勞に效はしむるを以  
て全地を濕して、之をハリストスに因りて世世に豊に諸徳の果を結ぶ者と爲し給ふ。

### 生神女讚詞

しょうしんじよ けんご てんたつ ら たのみ おそ ひ おい われ おお つみ  
生神女、堅固なる轉達、「ハリストティアニン」等の恃頼よ、畏るべき日に於て我多く罪  
を行ひし者に現れて、我を畏るべき「ゲエンナ」より脱れしめて、右なる羊に加へ給  
へ。

又

第七調 火曜日の早課 五六九

第七調 火曜日の早課 五七〇

イルモス、唯一無原なる光榮の王、天軍の崇め讚め、天使の品位の戦く主を、司祭  
よ、歌へ、人人よ、彼を世世に讚め揚げよ。

預言者よ、縛られて縛られし者に解釋を賜ひし唯一の贖罪主に、我常に爾を讚榮す  
る者の多くの罪の縲紲を解かんことを絶えず祈り給へ。

前驅よ、我逸樂の武器に傷つけられて、心の痛の中に爾に呼ぶ、唯一の靈體の醫師  
ハリストスに我が靈の病を醫さんことを祈り給へ。

前驅よ、爾の手を以て洗を授けし言に常に祈りて、我多く罪を行ひて定罪せられ卑微  
なる者を罪の手より脱れしめんことを求め給へ。

我は神より我に托せられし金錢を無知にして地に埋めたるに因りて苦しき罰を待つ。  
授洗者よ、爾の祈禱を以て我を之より脱れしめ給へ、熱信に爾に祈る。

### 生神女讚詞

どうていじよ なんじ た がた ひ たいない う や もの とど いの いま つうかい  
童貞女よ、爾は堪へ難き火を胎内に受けて、焚かれぬ者として止まれり。祈る、今痛悔  
の涙にて我を霑して、滅えざる火より脱れしめ給へ。

次に生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」、及び躬拜。

第九歌頌

イルモス、種なき受孕は人の中に孰か云はん、不朽の産は地上の者の中に孰か奇とせざらん、故に我等地の諸族は爾生神女を崇め讃む。我等信者は將來の福を繼がん爲に、猶痛悔と祈祷との時のある間に、涕泣し、歎息してハリストスに祈らん。我ハナアンの婦の如く爾に呼ぶ、ハリストスよ、我を憐み給へ、イイスよ。昔の僂みたる婦の如く我を直くし給へ、救世主よ、ペトルの如く我罪に溺るる者を救ひ給へ。

致命者讃詞

憂愁と牢獄と苛虐とに狭められたる受難者致命者は安息の廣きに移りて、我等を諸罪の狭迫より脱れしめ給ふ。致命者讃詞 爾等の體は今地中に覆はれたるに、爾等の聖なる神は天に在りて、恒に光榮の寶座の前に立ちて、天使等と偕に悦ぶ。

生神女讃詞

至淨なる童貞女よ、主は我を衣て爾より出で給へり。今我より諸慾の最重き檻褻を脱がせて、我に光の衣を衣せんことを彼に祈り給へ。

又

イルモス、汚に染まずして生み、萬の物を造りし言に肉體を予へし夫を識らざ母、生神童貞女、容れ難き者の器、限なき爾の造成主の住所よ、我等爾を崇め讃む。

第七調 火曜日の早課 五七一

第七調 火曜日の早課 五七二

預言者よ、爾は聖にせられし根より出でて、惡の根を盡く絶せり。福たる者よ、是に壓せられて不當の者と爲りたる我を顧みて、神聖なる痛悔の果を結ぶを得しめ給へ。

大なる前驅よ、教會は爾を最美しき班鳩及び鶯なりと識る、蓋爾は荒れて惡を生ずる靈に痛悔の歌を唱へたり。故に我等信を以て爾を讃揚す。

光榮なる前驅よ、爾は衆に救の門に至らしむる途を示せり。我生命の無道に迷ひ、誘はれて惡を爲しし者を此の途を行かん爲に固め給へ。

畏るべき日は近づきて門の側に在り、我定罪に當る行を有つ者は哭く。主よ、主よ、獨仁慈なる者よ、爾の前驅及び諸聖人の祈祷に因りて、其時我に定罪を免れしめ給へ。

生神女讃詞

神聖なる光を生みし神の恩寵を蒙れる者よ、祈る、犯罪に味まされたる吾が靈を照して、永遠の幽暗より脱れしめ給へ、我が爾常に福なる者を讃美讃榮せん爲なり。

次ぎて「常に福にして」。及び叩拜。小聯禱。光耀歌、及び常例の聖詠。

挿句に痛悔の讃頌、第七調。

救世主よ、果を結ばざる無花果樹の如く、我罪人を斫る勿れ、求む、多年之を待ちて、吾が靈を痛悔の涙にて濕し給へ、我が爾に矜恤の果を捧げん爲なり。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。

爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

義なる日として爾を歌ふ者の心を照し給へ、主よ、光榮は爾に歸す。

句、願はくは主吾が神の恵みは我等に在らん、願はくは我が手の工作进行を我等に助け給へ、我が手の工作进行を助け給へ。致命者讃詞

爾の受難者は法に戻る者の審判場の中に歡びて呼べり、主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

ハリストスよ、爾は童貞女より光として輝き出でて、人類を照し給へり。主よ、光榮は爾に歸す。

次ぎて「至上者よ、主を讃榮し」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、聯禱。次に第一時課、并に發放詞。



第七調 火曜日の早課 五七三

第七調 火曜日の眞福詞 五七四

火曜日の眞福詞、第七調。

美しくして食ふに善き果は我を殺せり。ハリストスは生命の樹なり、我是より食ひて死せず、乃盜賊と共に呼ぶ、主よ、爾の國に於て我を憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

主よ、獨靈體の醫師として、吾が心の醫し難き傷を醫して、我に常に正しく救の途を行くを得しめ給へ。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

義の日に前驅せしハリストスの授洗者よ、多くの悪に滅されたる吾が靈の燈を爾の神聖なる祈祷を以て燃し給へ、我が救はれて常に爾を讃美せん爲なり。

句、喜樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

致命者讃詞

睿智なる致命者よ、爾等は苦を受け榮冠を冠りて、敵を辱しめたり。今は天に居り、近づき難き光に満てられて、我等の靈の爲に祈り給ふ。

光榮

神聖なる三者よ、吾が靈の醫し難き慾を醫し給へ。惟一の神性に於て敬虔に讃榮せらるる主よ、我を諸の誘惑及び「ゲエンナ」より脱れしめて、我に永遠の國を與へ給

へ。

今も

潔き母よ、爾は容れられぬ者を狭からず胎内に容れ給へり。常に彼に祈りて、愛を以て爾を讃榮する爾の諸僕を凡の狭迫、及び諸愆の興起より脱れしめんことを求め給へ。



火曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十字架の讃頌、第七調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

ハリストスよ、昔樹は我を樂園より逐ひ出せり、今爾釘せられしに、木は我を樂園に升せたり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

第七調 火曜日の晩課 五七五

第七調 火曜日の晩課 五七六

畏るべき奇跡や、如何ぞ造物主は人人の救の爲に造物の前に立ち、定罪せられて、十字架に釘せらるる。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

ハリストスの十字架、聖天使等の爲には奇跡、悪魔及び悪鬼の爲には大なる懊惱たる者よ、爾の諸僕を救へ。

次ぎて若し之あらば、月課經の聖人の讃頌。光榮、聖人の、今も、調の十字架生神女讃詞。若し月課經なくば、又生神女の讃頌。第七調。

句、願はくはイスライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイスライリを其悉くの不法より贖はん。

無玷なる牝羊及び童貞女は羔が二の盜賊の間に木に懸けられしを見て呼べり、嗚呼吾が甘愛なる子よ、此の奇異にして至榮なる秘密は何ぞや、如何ぞ不法の會は爾を十字架に擧げたる、「マンナ」を以て人人を養ひし者に膽を飲ませたる。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

我がハリストスよ、童貞女爾の母は爾がイウデヤ人の法に戻る裁判に由りて髑髏の處に十字架に釘せられしを見し時呼べり、嗚呼吾が至愛なる子よ、此の奇異なる顯現は何ぞや、如何ぞエウレイの無知なる諸子は爾萬有の主を十字架に釘する。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

至聖なる女宰よ、我等皆獨爾が産の後に童貞女と現れしを知れり。至淨なる者は種なく生みし主が木の上に甘じて其手を釘せられしを見て、哭きて呼べり、恒忍なる主



よ、爾は甘じて死して、爾を歌ふ衆人を死より救ひ給ふ。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

女宰、至聖なる童貞女よ、爾が生みし主、慈憐に由りて十字架に釘せられて、世界の爲に生命の流を注ぎし者に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。我等信者は獨爾を避所と垣牆、及び保護として有てばなり、故に爾の帡幪の下に趨り附く。

次ぎて「穩なる光」。本日の提綱。「主よ、我等を守り」。

挿句に十字架の讃頌、第七調。

我等は爾の十字架を恃頼として有ちて、已に生命の樹に就くを禁ぜられず。主よ、光榮は爾に歸す。

句、天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦

第七調 火曜日の晩課 五七七

第七調 火曜日の晩課 五七八

の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

不死なる者よ爾は木に懸けられて、悪魔の網を破り給へり。主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に躰き足れり、我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに躰き足れり。

致命者讃詞

聖なる致命者よ、爾等は一切地上の事を顧みずして、勇ましく審判處にハリストスを傳へて、苦の爲に彼より報賞を受け給へり。祈る、勇敢を有つ者として爾等に趨り附く我等の靈の救はんことを、其全能の神なるに因りて、彼に祈り給へ。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

至淨なる者よ、昔爾己の子が木の上にいるを見る時、爾の心は悲の劍に刺されたり。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひ」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、聯禱及び發放詞。



火曜日の晩堂課

至聖なる生神女の規程、第七調。

第一歌頌

イルモス、主よ、曾て流れ易き性の水は爾の瞬にて地の姿に變れり、故にイズライリは足を濡らさず渡りて、凱歌を爾に歌ふ。

至りて無玷なる者よ、爾の神聖なる祈禱の安靜を以て我が逸樂と諸慾との暴風を鎮め給へ、我が安靜の心を以て爾の言ひ難き産を讚榮せん爲なり。

生神女よ、救の希望と甘味とは悉く爾の産に由りて成就せり。女宰よ、諸慾と諸罪

との一切の苦味を爾の諸僕より除き給へ。 **光榮**  
至淨なる者よ、我を悪鬼の誘惑と、攻撃と、害及び迷より救ひ給へ、我が信を以て爾神に亞ぎて實に我の保護及び悌憐なる者を讚榮せん爲なり。 **今も**  
神の言よ、爾はモイセイに棘の中に燃ゆれども聊も焚かざる火と現れて、爾が童貞女より生るるを形れり、爾は彼に由りて人の形を受け給へり。

### 第三歌頌

第七調 火曜日の晩堂課 五七九

第七調 火曜日の晩堂課 五八〇

**イルモス**、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの能力を備へし主・救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。  
生神女、世界の恃頼、衆信者の轉達なる者よ、十字架の上りて地獄を滅しし主に、信を以て常に聖詠と歌頌とを爾に捧ぐる者の爲に熱切に祈り給へ。  
天より高くして光榮並なくヘルワィムに超ゆる者よ、爾は孕みて神を生み給へり。故に彼に奉る爾の慈憐なる祈禱を以て、又言に超ゆる爾の力を以て我を諸の罪及び畏るべき定罪より脱れしめ給へ。 **光榮**  
爾の産を以て人人を死の朽壞より救ひし女宰よ、我を諸慾諸病の朽壞及び甚しき諸罪より救ひて、爾の神聖なる轉達を以て我に老いざる生命を與へ給へ。

### 今も

神の言よ、爾は本性を易へずして、全く人人に似たる者と爲り、潔き童貞女より出でて、衆に分れざる神性と易らざる位との中に三光の神元を現し給へり。

### 第四歌頌

**イルモス**、父の懷を離れずして、地に降りしハリストス神よ、我爾の慮の秘密を聞きて、爾獨人を愛する主を讚榮せり。  
潔き者よ、爾の仁慈と慈憐とを常に爾に祈る爾の諸僕に垂れて、爾の祈禱を以て之を畏るべき苦より脱れしめ給へ。  
至りて潔き者よ、我忠信なる祈禱と熱切なる信とを以て爾に趨り附く、爾我が爲に多くの罪の潔淨と爲りて、我を是より脱れしめて救ひ給へ。 **光榮**  
至淨なる女宰よ、爾は己の産を以て我等の歡喜の中保者と現れ給へり。至りて無玷なる者よ、爾より生れし主に我を諸難より救ひて永遠の生命を得しめんことを祈り給へ。

### 今も

父の懷を離れずして、童貞女より身を取りしハリストス神よ、爾の攝理の神聖なる方法を尊敬する爾の牧群を護り給へ。

### 第五歌頌

**イルモス**、ハリストスよ、夜は信ぜざる者の爲に明るからず、信者の爲には爾の言を甘ずるに因りて明るし。故に我朝の禱を爾に奉りて、爾の神性を讚め歌ふ。

いさぎよ どうていじょ なんじ いの わ たましい くら つみ すく なんじ じれん た つうかい  
潔き童貞女よ、爾に祈る、吾が靈を暗き罪より救ひて、爾の慈憐を垂れて、痛悔

第七調 火曜日の晩堂課 五八一

第七調 火曜日の晩堂課 五八二

しんせい こうせん もつ かがや たま  
の神聖なる光線を以て輝かし給へ。  
しせい しけつ どうていじょ はなはだ ゆうかん かんなん ふち あ もの なんじ きがん もつ のが  
至聖至潔なる童貞女よ、甚しき誘惑と患難との淵に在る者を爾の祈禱冀願を以て脱  
れしめて、爾を讃め揚ぐる者を救ひ給へ。 光榮

どうてい たいない かみ はら これ う しせい しょうしんじょ なんじ うた もの えいえん ていざい  
童貞の胎内に神を孕みて、之を生みし至聖なる生神女よ、爾を歌ふ者を永遠の定罪  
より救ひ給へ。 今も

いさぎよ もの われら なんじ かみ ははおよ われら ほごしゃ し なんじ こうおん しゅ われら  
潔き者よ、我等は爾を神の母及び我等の保護者なりと知りて、爾を洪恩の主に我等  
の救の轉達者として進む。

### 第六歌頌

じれん ふか しゅ われうれい ときなんじ よ なんじ わ いのち ほろび たす たま  
イルモス、慈憐深き主よ、我憂の時爾に呼びしに、爾は我が生命を淪滅より援け給  
へり。

じよさい じゅうじか あ ひとびと きゅうかい のが なんじ こ われら すく  
女宰よ、十字架に擧げられて、人人を朽壞より脱れしめし爾の子に我等を救はんこ  
とを祈り給へ。

しじょう じよさい われ なんじ たの もの す すみやか われ なんじ たすけ た たま  
至淨なる女宰よ、我爾を頼む者を遣てずして、亟に我に爾の援助を垂れ給へ。

### 光榮

なんじ しんせい な よ もの うれい のが おそ くるしみ すく たま  
爾の神聖なる名を呼ぶ者を憂より脱れしめて、畏るべき苦より救ひ給へ。

### 今も

しじょう じよさい けんご たのみ あい もつ なんじ まこと しょうしんじょ うた もの まも たま  
至淨なる女宰、堅固なる恃頼よ、愛を以て爾を眞の生神女として歌ふ者を護り給へ。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

### 坐誦讚詞、第七調。

しょうしんどうていじょ われら ため じゅうじか てい し けん ほろぼ かみ た  
生神童貞女よ、我等の爲に十字架に釘せられて、死の權を滅ししハリストス神に絶  
えず我等の靈を救はんことを祈り給へ。

### 第七歌頌

むかししりや も いろり つゆ いだ もの あらわ ひとつ かみ うた い なんじ  
イルモス、昔少者は燃ゆる爐を露を出す者と顯して、一の神を歌ひて曰へり、爾  
は崇め讃めらるる先祖の神なり。

しじょう もの われ まよい うれい わざわい あ ねつせつ わ ころろ なんじ よ いさぎよ  
至淨なる者よ、我は迷惑と、憂愁と、災禍とに在りて熱切に吾が心より爾を呼ぶ、潔  
き者よ、速に我を援けて、我に慰藉を與へ給へ。

わ ざいか しょよく ならなみ われ おぼ ほろび ふかみ くだ しょうしんじょ われ あわれ  
我が罪過と諸愆との激浪は我を溺らして、淪喪の深處に下す。生神女よ、我を憐み  
て、我に手を授けて、爾の力を以て救ひ給へ。 光榮

ひと あい きゅうせいしゅ われ なんじ はは きどうしや なんじ すす これ い われ しょうい およ  
人を愛する救世主よ、我爾の母を祈禱者として爾に進む、之を納れて、我を諸罪及

第七調 火曜日の晩堂課 五八三

第七調 火曜日の晩堂課 五八四

しょうらい ていざい のが えいえん くるしみ すく たま  
び將來の定罪より脱れしめて、永遠の苦より救ひ給へ。

### 今も

女宰よ、我甚しき罪過にて吾が靈を殺して、爾己の産を以て地獄を殺しし者に祈る、痛悔の方法を以て我を活かし給へ。

第八歌頌

イルモス、我等は眞の神、萬有の存在の起原者たるハリストスを崇めて、萬世に讃め歌ふ。

至淨なる者よ、我を諸難と、朽壞と、諸慾より救ひ給へ、我は爾我が恃頼及び神聖なる拯救に趨り附けばなり。

女宰童貞女よ、終の時に於て我を甚しき讒者より脱れしめて、親ら我を神聖なる居所に向はしめ給へ。

光榮

嗚呼靈よ、起きて、生神女の前に俯伏して呼べ、衆人の恃頼及び拯救よ、我を永遠の火より脱れしめ給へ。

今も

女の中に獨祝福せられし童貞女を歌頌して、ハリストスを萬世に讚美讚榮せん。

第九歌頌

イルモス、神の母又童貞女、生みし者又童貞を守る者、此れ天性の事に非ずして、神の寛容の事なり。故に我等は爾が獨斯る神の奇蹟に勝ふる者と爲りしを常に崇め讃む。

主宰ハリストスよ、生神女は爾に我が爲に禱を奉る、之を納れて、我を諸の苦より脱れしめ給へ。

女宰よ、我常に爾に祈る、我が卑微なる靈を將來の審判及び苦より脱れしめ給へ。

光榮

童貞女よ、我が造成主及び贖罪主に我を畏るべき審判より救ひて、我に生命を賜はんことを祈り給へ。

今も

純潔無玷なる母童貞女よ、爾を崇め讃むる爾の牧群を靈の汚より救ひ給へ。

次ぎて「常に福にして」。聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞。其他常例の如し、并に發放詞。



第七調 火曜日の晩堂課 五八五  
第七調 水曜日の早課 五八六

水曜日の早課

第一の誦文の後に十字架の坐誦讚詞、第七調。

ハリストス神よ、教會は杉、黄楊、及び松に於て爾に伏拜して呼ぶ、生神女に由りて吾が皇帝に勝利を與へて、我等を憐み給へ。

句、主我が神を崇め讃め、其足凳に伏し拜めよ、是れ聖なり。

われ ため じゅうじか てい の たま かみ わ けいせい さんび い  
我の爲に十字架に釘せらるるを忍び給ひしハリストス神よ、我が警醒の讚美を納れて、  
われ すく たま  
我を救ひ給へ。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

しょうしんどうていじょ われ ら ため じゅうじか てい し けん ほろぼ かみ た  
生神童貞女よ、我等の爲に十字架に釘せられて、死の權を滅ししハリストス神に絶  
えずわれ たましい すく いの たま  
えず我等の靈を救はんことを祈り給へ。

第二の誦文の後に十字架の坐誦讚詞、第七調。

ハリストスよ、爾は己の十字架の木を火よりも明に、焰よりも力ある者と顯して、  
爾が甘じて其上に受けし死を歌ふ人人の罪を焚き、心を照す者と爲し給へり。ハリ  
ストス神よ、光榮は爾に歸す。

句、神我が古世よりの王は救ひを地の中に作せり。

むけい ぐん つかさど かんじ かんじ わ たましい おごたり し しゅ なんじ じゅうじか もつ われ すく  
無形の軍を司るハリストス神、吾が靈の怠惰を知る主よ、爾の十字架を以て我を救  
ひ給へ、爾は人を愛する主なればなり。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

致命者讚詞

ぎじん よろこ てんじょう もの たの ちめいしや ちじょう たたか てき ふ  
義人よ、慶べ、天上の者は楽しむべし、致命者が地上に戦ひて、敵を踐みたればな  
り。教會は凱旋の歌を奉りて、獨戦ふ者の首にして勝利を與ふるハリストス神、世界  
におおい あわれみ たま しゅ まつ  
に大なる憐を賜ふ主を祭るべし。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

しゅ どうていじょ なんじ じゅうじか てい み とき な なんじ よ ああ わ こ  
主よ、童貞女は爾が十字架に釘せらるるを觀る時、泣きて爾に呼べり、嗚呼吾が子  
よ、我爾の言ひ難き恒忍と、人人に於ける神聖なる至極の寛容とを歌頌す。

第三の誦文の後に坐誦讚詞、第七調。

しゅざい なんじ じゅうじか てい てき しげ し ころ じごく いとしも  
主宰ハリストスよ、爾十字架に釘せられしに、敵は縛られ、死は死され、地獄に最下  
なる處に囚われたる靈は縲紲より解かれたり。

われ ら ため あまん ていけい う しゅ なんじまこと かみ う と てき やぶ われ ら すく  
我等の爲に甘じて釘刑を受けし主よ、爾眞の神を承け認めざる敵を敗りて、我等を救  
ひ給へ。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

第七調 水曜日の早課 五八七

第七調 水曜日の早課 五八八

さんび しょうしんどうていじょ われ ら なんじ こ じゅうじか よ つね まも あくき こうげき  
讚美たる生神童貞女よ、我等は爾の子の十字架に由りて恒に護られて、悪鬼の攻撃  
より救はる、故に職として爾を讚め歌ひて讚榮す。

尊貴にして生命を施す主の十字架の規程、其冠詞は、十字架は植えられて、迷を抜き  
たり。イオシフ師の作。第七調。

第一歌頌

イルモス、主よ、曾て流れ易き性の水は爾の瞬にて地の姿に變れり、故にイズラ  
イリは足を濡らさず渡りて、凱歌を爾に歌ふ。

しゅざい じゅうじか てい はずかしめ の ひと あい しゅ ひとと はずかしめ しりぞ ほこ  
主宰は十字架に釘せらるる辱を忍びて、人を愛する主として、人人の辱を退け、戈

にて脅を刺されて、此を以て戦ふ敵を刺し殺し給ふ。  
仁慈なる救世主よ、爾は己の十字架を弓の如く張りて、釘の矢を以て戦ふ敵に傷つけて、昔之に傷つけられし人人を醫し給へり。

### 致命者讃詞

聖者の血に因りて偶像に捧ぐる汚はしき血の祭は息められ、全地は聖にせられて、讃歌を以て常に彼等を讃頌す。

### 致命者讃詞

地上の者が肉體に在りて肉體なき者と戦ふを見て、天軍は歌ひ、戦ふ者の首たる主は勝ちたる者に榮冠を冠らせ給へり。

### 生神女讃詞

至淨なる女宰は呼べり、子よ、爾戈を以て刺されしに、アダムの書券は裂かれたり、故に主宰よ、我は衆人に苦なきを流す爾の苦を讃め歌ふ。

又至聖なる生神女の規程。イオシフの作。第七調。

### イルモス同上

潔き生神女よ、愛を以て爾の偉大なるを歌ふ爾の民を護りて、諸害より脱れしめ給へ、爾は衆人の轉達者と、教導師と、保固なればなり。

不死の泉を生みし童貞女よ、我等に醫治の水を流して、吾が靈體の死を致す諸愆を滌ひ給へ。

神の恩寵を蒙れる者よ、爾は原祖の性を尊くせし主宰の爲に尊き居所と現れたり。故に潔き者よ、我等爾に祈る、我等を諸愆の恥辱より脱れしめ給へ。

世界の爲に義の日を生みし純潔なる少女よ、信を以て斯の光明なる爾の聖堂に爾を讃め歌ふ者より幽暗を拂ひ給へ。

### 第三歌頌

イルモス、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの能力を備へし主・救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。

第七調 水曜日の早課 五八九

第七調 水曜日の早課 五九〇

天を幔の如くに張りたるイイススよ、爾は木の上に手を伸べて、仁慈なるに因りて、アダムの不節制の手の罪を醫し、衆を詭譎なる敵の手より出し給へり。

ハリストス王よ、法に戻る民は、爾人人に光榮を冠らせ、アダムの犯罪の棘を絶し、衆の爲に神を識る智識の樹を植え給ひし主に棘を冠らす。

### 致命者讃詞

死に屬する性を有つ睿智なる致命者よ、爾等は斯の性の中に在りて不死を學ばんことを望めり。故に迫害と憂愁、打撃と傷創、及び百體の寸斷を悉く喜びて忍び給へり。

### 致命者讃詞

受難者よ、爾等は堅き志を立て、傲慢なる敵を滅さんことを定めて、ハリストスに於ける謙卑を武器と爲し、神聖なる權能に擧げられて、敵を卑くくし給へり。

生神女讃詞

母及び牝羊は苦の爲に來りし羔が甘じて屠られしを視て、涙の泉を流して云へり、聖にせられし子よ、此れ何ぞや、衆死者を活かさんと謀りて、何如ぞ殺さるる。

又 イルモス同上

潔き者よ、爾の諸僕に此の爾の神聖なる堂に於て救ひの願ひを應はせ、之を奇跡の泉と爲し、常に神聖なる感動を與へて、我等を永遠の苦より脱れしめ給へ。智識と言とに超えて慈憐の淵、萬福の泉たるハリストスを生みし潔き者よ、爾は此の爾の聖堂を己の神聖なる帡幪を以て常に諸愆の潔淨と現し給ふ。生神童貞女、神の聘女、衆人の歡喜よ、爾の腹の果は祝福せられたり。蓋爾は全世界の爲に實に喜及び樂なる仁愛の主を生みて、諸罪の哀を散じ給へり。靈智なる櫃、實に不朽の「マンナ」を世界の爲に生みし童貞女よ、此の時我等の内に臨みて、我等潔く爾を讚美する者を凡の汚より潔め給へ。

第四歌頌

イルモス、父の懷を離れずして、地に降りしハリストス神よ、我爾の慮の秘密を聞きて、爾獨人を愛する主を讚榮せり。主宰よ、爾は人として地に現れて、人人を天の者と爲し、木の上に擧げられて、爾の苦を歌頌する衆を己と偕に擧げ給へり。生命よ、爾は死に屬する者の爲に死す、我が義なるイイススよ、爾は不義者の爲に恥づべき苦を忍ひ給ふ。恒忍の主よ、我等爾の無量なる慈憐を讚め歌ふ。

致命者讃詞

第七調 水曜日の早課 五九一

第七調 水曜日の早課 五九二

致命者よ、爾等は猛獸に嚙まるること、火に焚かるること、手と足との斷たるること、百體の割かるること、及び其他の諸の苦を忍びて、神聖なる福樂を獲給へり。

致命者讃詞

受難者よ、爾等は肉體の中より呼びしに、ハリストス萬有の神は之を聞きて、爾等に神靈の樂を與へ給へり。

生神女讃詞

生神女よ、爾より身を取りし主に我等の爲に禱を捧げ給へ、彼の苦を讚榮する我等が艱難の時に其助を獲ん爲なり。

又 イルモス同上

至淨なる生神女よ、昔アウワクムは爾を諸徳の蔭の繁き山と稱へたり、女宰よ、爾は實に衆を覆ひて、惡の魁たる敵に焚かるるを免れしめ給ふ。女宰よ、爾の至淨なる血より身を取りし主に禱を奉りて、職として爾を讚美する爾の民を凡の害より救はんことを求め給へ。此の爾の神聖なる堂は信を以て爾を讚美する者の爲に神の恩寵を流して、靈體の病を醫し、諸愆を潔むるを致す。

じよさい どうていじよ およ あい もつ なんじ おおい はし つ もの のぞ そのぜんりよう ねがい かな  
女宰童貞女よ、凡そ愛を以て爾の帡幪に趨り附く者に臨みて、其善良なる願を應は  
せ、爾の熱切にして尊貴なる保護を以て彼等を救ひ給へ。

### 第五歌頌

イルモス、主我が神よ、我夜より寤めて爾に祈る、我に諸罪の赦を與へて、我が途  
を爾の誠の光に向はしめ給へ。

神の言よ、爾は釘刑を受けて悪を斥け、膽を嘗めて甘き食の苦き害を除き給へり。  
光榮は爾の大なる慈憐に歸す。

主宰よ、爾は十字架に擧げられ、神たる權能を以て全地を動かして、其痛傷を醫し、爾  
を識る智識を以て動かさるる心を堅め給ふ。

### 致命者讚詞

ワエリアルは普く悪の網を張りたれども、ハリストスの致命者を蔽はざりき、彼等火  
の翅を受けて、神聖なる居所に擧りたればなり。

### 致命者讚詞

睿智なる受難者は神の指麾に従ひて、聊かも最劇しき苦難を懼れずして、他人の身  
に於けるが如く、斯く苦を受け給へり。

### 生神女讚詞

潔き童貞女は大きく哭きて呼べり、吾が子よ、十字架に懸れるに、我何の目を以てか  
盡くの淵を涸らす爾の目の瞑さるるを見ん。

第七調 水曜日の早課 五九三

第七調 水曜日の早課 五九四

### 又

イルモス、ハリストスよ、夜は信ぜざる者の爲に明るからず、信者の爲には爾の言  
を甘ずるに因りて明るし。故に我朝の禱を爾に奉りて、爾の神性を讃め歌ふ。

潔き神身の聘女よ、罪の眠に因りて倦みたる我等を覺まし給へ、爾の至尊なる堂  
に於て爾が警醒せしむる神聖なる祈祷を以て我等を堅め給へ。

潔き者よ、我等衆爾に趨り附く者に援助の手を授けて、爾の祈祷を以て我等の諸悪  
の汚を洗ひ、諸病を醫し給へ。

童貞の胎に神を孕みて、之を生みし至淨なる生神女よ、爾を歌ふ者を永遠の定罪よ  
り脱れしめ給へ。

至りて無玷なる者よ、信を以て爾の堂に来る人人の靈、罪に由りて古びたる者は新  
にせらる、故に皆宜しきに合ひて爾を讚榮す。

### 第六歌頌

イルモス、ハリストスよ、我世の慮の淵に漾ひ、我を覆へる諸罪の濤に溺れ、靈  
を滅す猛獸に擲うたれて、イオナの如く爾に籲ぶ、死を致す深處より我を引き上げ給  
へ。

惟一の贖罪主、至仁なるハリストスよ、爾は價として己の救の血を付して、我等擲



にせられし者を贖ひ、十字架にて強暴者を殺して、我等を爾の父に攜へ給へり。  
我等昔不節制に因りて甚しく墮落せり、ハリストスは木に擧げられ、手を伸べて、  
墮落せし我を起し、甘じて傷つけられて、我が悉くの傷を醫し給へり。

### 致命者讃詞

福たる致命者よ、爾等は聊も迷の坐睡に眠らずして、迫害者の凡の強暴を眠らせ、宜しきに合ふ義なる眠を以て眠りて、衆人の爲に眠らざる祈祷者と爲り給へり。

### 致命者讃詞

至榮なる致命者よ、爾等はハリストスの神聖なる戒の石に堅められて、敵の悪謀に動かされぬ者と止まり、神智を以て之を足下に倒して、嚴に神に上り給へり。

### 生神女讃詞

至りて無玷なる生神女よ、爾は世の無き先に父より生れし子を赤子として生み給へり。彼は悪の魁の愆の罪に由りて古びたる人類を十字架にて新にし給へり。

又

第七調 水曜日の早課 五九五

第七調 水曜日の早課 五九六

イルモス、イオナは地獄の腹より呼べり、我が生命を淪滅より引き上げ給へ、我等は爾に呼ぶ、全能の救世主よ、我等を憐み給へ。

獨潔き童貞女よ、爾は獨我等に救の水を流して、爾の諸僕の爲に迷の火を滅し、眞理を知る智識を霑し給へり。

我が神の活ける城邑よ、爾の群を無神の諸敵、諸難、及び諸の誘惑より護り給へ。生神女よ、爾の祈祷の沃を以て我等の靈の傷、肉體の病を醫し給へ、我等が敬虔の聲を以て爾を讃め歌はん爲なり。

爾の至淨なる産を以てエワを苦より釋き給ひし童貞女よ、我が靈體を諸愆諸病より釋き給へ。

### 第七歌頌

イルモス、昔少者は燃ゆる爐を露を出す者と顯して、一の神を歌ひて曰へり、爾は崇め讃めらるる先祖の神なり。

大仁慈なるイイスス ハリストスよ、爾が甘じて十字架に苦を受け、死者と爲り、蛇を殺ししに因りて、原祖は苦なき生命を獲たり。

我等皆律法の詛より釋かれたり、蓋立法者は十字架に上りて、常に流るる祝福と、恩寵と、慈憐と、朽壞の滅亾とを沃ぎ給へり。

### 致命者讃詞

致命者は甘じて苦に進みたり、甘じて苦を受けし主を靈の目にて視たればなり。彼等は主より榮冠を受けて、今諸天使と偕に慶賀す。

### 致命者讃詞

至りて讃美たる致命者よ、爾等は肉體を種種の苦に付し、血の流に無形の敵を溺

らして、<sup>いやし いずみ そそ たま</sup>醫治の泉を沃ぎ給ふ。

生神女讃詞

<sup>どうていじよ はは よ かんあい こ われなんじ じゅうじか み いかん な いた</sup>童貞女母は呼べり、甘愛なる子よ、我爾を十字架に見て、如何ぞ泣かざらん、至りて義なる審判者よ、爾が非義に苦しめらるるを見て、如何ぞ涕泣せざらん。

又 イルモス同上

<sup>しんせい ひ う さんび どうていじよ いの われら なんじ かしょう もの しょよく かくれき ごと</sup>神聖なる火を生みし讚美たる童貞女よ、祈る、我等爾を歌頌する者の諸慾を枯草のごとく焚きて、衆を痛悔の光にて照し給へ。

<sup>ふきゆう どうていじよ われら きゆうかい すく たま かみ い みや われら なんじ どう おい つね</sup>不朽なる童貞女よ、我等を朽壞より救ひ給へ。神の活ける宮よ、我等爾の堂に於て常に信を以て爾を歌ふ者を聖神の殿と爲し給へ。

<sup>しん もつ なんじ うた もの せいしん でん な たま</sup>生神女よ、爾は衆の爲に醫治の流を沃ぎ給ふ、<sup>しょうしんじよ なんじ しゅう ため いやし ながれ そそ たま いのち いずみ う</sup>生命の泉を生みたればなり。神の聘女よ、<sup>なんじ ねつせつ きとう こ なんじ ぐん けがれ きよ たま</sup>爾の熱切なる祈禱を以て此の爾の群を汚より潔め給へ。

第七調 水曜日の早課 五九七

第七調 水曜日の早課 五九八

<sup>せい しょ よげんしゃ なんじ しんせい さん しゅじゅ よしやう み よるこ うた よ せんぞ</sup>聖なる諸預言者は爾の神聖なる産の種種の預象を見て、欣ばしく歌ひて呼べり、先祖の讚美たる神よ、<sup>さんび かみ なんじ あが ほ</sup>爾は崇め讃めらる。

第八歌頌

<sup>も や いばら ぐち にぶ ことばしぶ かみ あらわ かみ</sup>イルモス、燃ゆれども焚けざるシナイの棘は口鈍く言澁るモイセイに神を顯せり。神を慕ふ熱心は三人の少者を火に焚かれざる者と爲して、<sup>した ねっしん みにたり しょうしゃ ひ や もの な うた しゅ ことごと</sup>歌はしめたり、主の悉くの造物は主を歌ひて、<sup>ぞうぶつ しゅ うた ばんせい ほ あ</sup>萬世に讚め揚げよ。

<sup>きゅうせいしゅ なんじ わき なが い ち みず ぜんせかい あらた ふきゆう そそ にく</sup>救世主よ、爾の脇より流れ出でたる血と水とは全世界を新たにし、不朽を注ぎ、憎むべき祭と汚はしき血の流とを止めたり。故に我等悉くの造物は爾を主として歌ひて、<sup>まつり けがら ち ながれ とど ゆえ われら ことごと ぞうぶつ なんじ しゅ うた</sup>萬世に讚め揚げよ。

<sup>きゅうせいしゅ なんじ いばら かんむり こうむ す い な つばき わち じゅうじか あ</sup>救世主よ、爾は棘の冠を冠り、醜と膽とを嘗め、唾せられ、<sup>うた せいしん ことごと ぞうぶつ しゅ うた ばんせい け</sup>答うたれ、十字架に擧げられ、釘せらるるを受け給へり、此等を以て我救はれて爾に呼ぶ、主の悉くの造物は主を歌ひて、<sup>しゅ うた ばんせい かれ ほ あ</sup>萬世に彼を讚め揚げよ。

致命者讃詞

<sup>じゆなんしゃ なんじ ら しんり つ たから ゆたか とみ う およそ ぐうぞう まず はず</sup>受難者よ、爾等は眞理の竭くされぬ寶より豊に富を享け、凡の偶像の貧しきを辱かして、<sup>ひんじや と もの あらわ よ しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ うた ばんせい かれ</sup>貧者を富ます者と現れて呼べり、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に彼を讚め揚げよ。

致命者讃詞

<sup>ちめいしゃ なんじ ら ふげんしゃ ほう かえり しょうしゃ ごと も ひ な その うち</sup>致命者よ、爾等是不虔者の法を顧みずして、少者の如く燃ゆる火に投げられ、其中に爾等を涼しくする神の露を得て呼べり、<sup>なんじ ら すず かみ つゆ え よ しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ うた ばんせい かれ</sup>主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に彼を讚め揚げよ。

生神女讃詞

<sup>いさぎよ もの むかし りっぽう やくひつ なんじ せきばん りっぽうしゃ おのれ うち い</sup>潔き者よ、昔律法の約匱は爾、石板にあらざして立法者ハリストスを己の内に容れし者を預象せり。彼は法に戻る民に由りて十字架に釘せられて、我等を救ひて呼ばしむ、<sup>もの よしやう かれ ほう もと たみ よ じゅうじか てい われら すく よ</sup>主の悉くの造物は主を歌ひて、<sup>しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ うた ばんせい かれ ほ あ</sup>萬世に彼を讚め揚げよ。

又

<sup>ゆいいち むげん こうえい おう てん ぐん あが ほ てん し ひんい おの しゅ しいい</sup>イルモス、唯一無原なる光榮の王、天軍の崇め讃め、天使の品位の戦く主を、司祭

よ、歌へ、人人よ、彼を世々に讃め揚げよ。  
奇跡の淵を世界の爲に流し給ふ讚美たる童貞女よ、我等の諸慾の流を涸らして、我等疑はざる信を以て爾を尊む者の爲に赦罪の露を注ぎ給へ。

讚美たる潔き生神女よ、義の日は爾より輝き出でて、爾を諸慾の幽暗に坐する者の爲に光と爲せり。故に我等職として爾を讃め歌ふ。

至りて光明なる神の殿と爲りし潔き者よ、爾の聖堂に集まりて、常に爾を讚榮する爾の諸僕を聖神の居所と爲し給へ。

生神女よ、爾は己の産の光にて靈妙に全地を照し給へり、眞の神を爾の手に抱き

第七調 水曜日の早課 五九九

第七調 水曜日の早課 六〇〇

たればなり。彼に照さるる者は常に信を以て呼ぶ、主の悉くの造物は主を歌ひて、世世に彼を讃め揚げよ。

### 第九歌頌

イルモス、神の母又童貞女、生みし者又童貞を守る者、此れ天性の事に非ずして、神の寛容の事なり。故に我等は爾が獨斯る神の奇跡に勝ふる者と爲りしを常に崇め讃む。

有能なる主宰ハリストスよ、爾木の上に在りて力を以て爾の無原なる父に呼びて、爾の散らされし羊を爾を識る智識に呼び集めしに、敵の力は全く盡きたり。

主宰救世主よ、爾は羔の如く甘じて十字架に擧げられて、爾の靈智なる羊を狼より奪ひ出して、其爾を歌頌する者を爾の誠の牢に閉し給へり。

### 致命者讚詞

人を愛する主ハリストスよ、至榮なる受難者は爾の苦に效ふ者と爲りて、多種の苦難を忍びたり。故に光榮の冠を受けて、爾の國を嗣ぐを得たり。

### 致命者讚詞

尊き受難者の讃むべき慶賀は光明なる恩寵を輝かして、信者を照す。故に我等も、常に之を行ふ者は、罪惡の幽暗より救はる。

### 生神女讚詞

純潔無玷なる者よ、爾の子は十字架に於て靈智なる光を輝かして、幽暗の魁を逐ひ、日の光を晦まし、衆信者を照し給へり。

### 又

イルモス、汚に染まずして生み、萬の物を造りし言に肉體を予へし夫を識らざる母、生神童貞女、容れ難き者の器、限りなな爾の造成主の住所よ、我等爾を崇め讃む。

夫を識らざる母、聖なる生神女よ、爾は天上の軍に超えて聖にせられし者と現れたり、萬有の造成主を生みたればなり。故に我等諸天使と偕に爾を讚榮して、絶えず爾の偉大なるを讃め歌ふ。

生神童貞女よ、聖にせられし預言者は聖神の光に照さるる者として、昔爾を樹蔭の繁

き山と見たり。故に我等地上の者は諸天使と偕に爾を讃頌す、爾が神福たる者よ、  
預言せしが如し。

獨夫を識らざる生神童貞女よ 爾は神聖なる「マンナ」を納れし壺と現れ、人人を地  
より登す梯と見られたり。故に我等信者は集まりて、職として爾神の恩寵を蒙れ  
る者を讃榮す。

第七調 水曜日の早課 六〇一

第七調 水曜日の早課 六〇二

神の居所と爲りし少女よ、我靈を滅す盜賊の巢窟、及ぞ凡の不法を行ふ處と爲り  
し者を涙の洗を以て洗ひて、聖神の居所と爲し給へ。

獨永久の光を生みし女宰童貞女よ、我を永遠の幽暗より脱れしめて、度生の諸慾に全  
く味まされたる吾が靈を照し給へ、我が愛を以て恒に爾を讃榮せん爲なり。

次ぎて「常に福にして」。小聯禱、光耀歌、及び常例の聖詠。

挿句に十字架の讃頌、第七調。

人を愛する主、生命を賜ふ者よ 爾は主宰として爾の十字架を以て世界を贖ひ給へ  
り。主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。  
爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はく  
は爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

眞の葡萄の樹が十字架に釘せられしに、異邦民は盜賊と偕に樂園を獲たり、是れ教會  
の光榮、是れ國の富なり。我等の爲に苦を受けし主よ、光榮は爾に歸す。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に助け給  
へ、我が手の工作を助け給へ。

致命者讃詞

至りて讃美たるハリストスの受難者よ 爾等は全地の爲に光體と現れて呼べり、主  
よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

純潔なる者は爾が甘じて木に釘せられしを見たる時、泣きて爾の權柄を歌へり。

次ぎて「至上者よ、主を讃榮し」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、聯禱、及び  
第一時課、其他、并に發放詞。

~~~~~

水曜日の眞福詞、第七調。

美しくして食ふに善き果は我を殺せり。ハリストスは生命の樹なり、我是より食ひ
て死せず、乃盜賊と共に呼ぶ、主よ、爾の國に於て我を憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

慈憐なる主よ、爾は十字架に手を伸べて、爾の大なる仁慈に因りて、アダムが誠に

第七調 水曜日の眞福詞 六〇三

第七調 水曜日の眞福詞 六〇四

られし樹に手を伸べたる罪を抹し給へり。故に洪恩の主よ、我等爾を讚榮す。

句、人我の爲に爾等を詈り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

ハリストス王よ、エウレイの會は爾を髑髏の處に十字架に釘せしに、爾は凶悪者の滅を爲す首を砕きて、我等の爲に爾の聖なる脅より赦罪の河を流し給へり。

句、喜び樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

致命者讚詞

至りて讚美たる致命者よ、爾等は尊貴にして救を施すハリストスの苦に效ひて、多種の苦難を忍びて、不死に移り給へり。故に崇め讚めらる。

光榮

嗚呼聖なる三者よ、我等爾を歌ふ爾の諸僕を護り、十字架の力を以て堅めて、我等の途を天上の域邑に向はしめ給へ、我等彼處に在りて慈憐を蒙らん。

今も

潔き母よ、爾より生れし者の十字架に釘せらるるを見て、爾は心裂けて泣きて呼べり、子よ、爾人類を諸の苦より救はんと欲して、如何ぞ甘じて斯く苦しむ。



水曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に聖使徒の讚頌、第七調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

光榮なる使徒よ、爾等は神を識る智識の犁を以て全地を耕して、信者の大數を育て給へり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

福たる使徒よ、我が諸欲の暴風を鎮めて、我に潔き痛悔の穩静を輝かし給へ。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

爾等は言の門徒として異邦民の會を無智より神を識る智識に攜へ給へり。

次ぎて若し之あらば、月課經の聖人の讚頌。光榮、聖人の、今も、調の生神女讚詞。

第七調 水曜日の晩課 六〇五

第七調 水曜日の晩課 六〇六

若し月課經なくば、又聖大奇跡者ニコライの讚頌、第七調。

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼

はイズライリを其 悉 くの不法より贖はん。

神父ニコライよ、曩に死に定められたる軍將を救ひし如く、斯く今も爾の祈祷を以て我等を救ひ給へ。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

至りて福たる成聖者ニコライよ、信と愛とを以て爾を呼び、爾を歌ふ衆人を諸の憂より脱れしめ給へ。

句、蓋、彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

睿智なる成聖者ニコライよ、爾の諸僕を饑饉と疫病、地震と憂愁と凡の危難より護り給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

純潔なる者よ、爾の諸僕の禱りを爾の子に攜へ給へ、其造りし者を悉く救はん爲なり。

次ぎて「穩なる光」。本日ポロキメンの提綱。

挿句に聖使徒の讃頌、第七調。

光榮なる使徒、教會の柱、眞實の傳道師、光明なる燈よ、爾等は屬神の火を以て凡の迷を焚き、信を以て人類を照し給へり。故に爾等に祈る、世界に平安を與へ、我等の靈を救はんことを我が救世主及び神に祈り給へ。

句、天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

ハリストスの使徒、救世主の耕作者よ、爾等は十字架を犁の如く肩に荷ひて、偶像の迷に由りて荒れたる地を潔めて、信の言を播き給へり。ハリストスの聖なる使徒よ、爾等は宜しきに合ひて尊まる。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に鑿き足れり、我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに鑿き足れり。

致命者讃詞

至りて讚美たる致命者、屬神の羔、靈智なる全燔、神の嘉して納れたる祭祀なる者よ、地は爾等を隠ししに非ずして、天は爾等を受けたり、爾等は諸天使の侶と爲り給へり。祈る、彼等と偕に世界に平安を與へ、我等の靈を救はんことを我が救世主及び神に祈り給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

第七調 水曜日の晩課 六〇七

第七調 水曜日の晩堂課 六〇八

我等は産の後に獨至淨なる童貞女を、神言の母として、歌頌して言はん、光榮は爾に歸す。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひ」。聖三祝文。「天に在す」の後にトロバリ讃詞、聯禱、并に發放詞。



水曜日の晩堂課

至聖なる生神女カノンの規程、第七調。

第一歌頌

イルモス、主よ、曾て流れ易き性の水は爾の瞬にて地の姿に變れり、故にイズラ
イリは足を濡らさず渡りて、凱歌を爾に歌ふ。

潔き童貞女よ、活ける水を罪の熱に由りて涸れたる吾が靈に飲ませ給へ、我か神聖
なる傷感の實れる穂を生育せん爲なり。

潔き少女よ、慈憐の点滴を以て我に傷感の点滴を雨らし給へ、我が此を以て簡慢に由
りて得たる吾が靈の汚を悉く洗はん爲なり。

光榮

聘女ならぬ女幸よ、爾は己の造成主を腹に受けて、赤子と爲りし神を産苦なく生み給
へり。驚くべき奇跡や、爾は其婢及び母なり。

今も

至淨なる童貞女母よ、爾は我等の爲に人類の贖罪主及び救世主ハリストスを生み給
へり。故に我等爾を永遠の生命の中保者と知りて、嚴に讚榮す。

第三歌頌

イルモス、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの能力を備
へし主・救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。

童貞女よ、變易なき國を有つ萬有の王は爾の至淨なる血より肉體の緋袞衣を織り、
人性の朽壞以外に之を衣て、神及び人として爾より出で給へり。

童貞女よ、爾は神より衆に賜はりたる言ひ難き諸善の寶藏としして、我等誘惑、患難、
諸病の時に爾に祈る者に豊に恩寵の靈妙なる賜を予へ給ふ。

光榮

潔き者よ、奇妙なるダニエルは爾を山と預見せり、此より石たるハリストスは斫り分
けられて、悪鬼の偶像を碎き給へり。故に我等爾の産に由りて救はれし者は爾を萬善

第七調 水曜日の晩堂課 六〇九

第七調 水曜日の晩堂課 六一〇

の縁由として讚め歌ふ。

今も

潔き者よ、神の言を宜べし者は昔爾を巻軸と預見せり、其中に言は父の指にて録
されたり。故に我が罪惡の書券を裂きて、我を生命の書に録さんことを祈り給へ。

第四歌頌

イルモス、父の懷を離れずして、地に降りしハリストス神よ、我爾の慮の秘密

を聞きて、爾獨人を愛する主を讚榮せり。
生神女よ、爾より生れし主に悗を捧げ給へ、我等彼の苦を讚榮する者が誘惑の時に其助を得ん爲なり。

至聖至潔なる者よ、爾より流れし香料たる造成主は萬有を神聖なる智識の香氣に満てて、悪臭の迷を拂ひ給へり。

光榮

潔き者よ、ハリストス神は爾を地上に居る者の爲に靈智なる梯と建てて、慈憐なる主として、爾を以て信者を天に屬する神聖なる行に升せ給ふ。

今も

仁慈なる者よ、我諸罪の重き任に壓せられて、爾に呼ぶ、世の罪を任ふ神を生みし者よ、我が爲に潔淨と爲り給へ。

第五歌頌

イルモス、主我が神よ、我夜より寤めて爾に祈る、我に諸罪の赦を與へて、我が途を爾の誠の光に向はしめ給へ。

仁愛の主及び神の母、讚美たる生神女よ、我信と愛とを以て常に讚歌を爾に奉る者に爾の祈禱を以て我が諸罪の潔淨を降し給へ。

至淨なる生神女、變易なき神聖なる光の殿よ、祈る、我が味まされたる靈を爾の光線にて照し給へ。

光榮

人人に生命を賜ふ主我が神よ、爾に祈る、潔く爾を生みし童貞女、至淨なる少女に由りて我放蕩と者を救ひ給へ。

今も

女宰神の母、世界の爲に實在の生命を生みし至りて無玷なる者よ、我に諸罪の赦を與へ給へ。

第六歌頌

イルモス、ハリストスよ、我世の慮の淵に漾ひ、我を覆へる諸罪の濤に溺れ、靈を滅す猛獸に擲うたれて、イオナの如く爾に呼ぶ、死を致す深處より我を引き上げ給へ。

第七調 水曜日の晩堂課 六一一

第七調 水曜日の晩堂課 六一二

生神女よ、我等は爾の種なき産に因りて死の朽壞及びアダムの因る罪より救はれたり、蓋惟一の神及び人、又子なる者は信者に諸罪の赦を與へ給ふ。

女宰よ、爾の神聖なる祈禱を以て我が諸罪の書券を裂きて、我を救はれし者の書に録し給へ、我が爾ヘルロイムよりも聖なる者を讚歌を以て讚美せん爲なり。

光榮

ハリストスよ、昔爾の義なる審判を以て爾の顔より逐はれたる者を、爾は慈憐なる主として、肉體の降臨を以て召し給へり。仁慈なる主よ、今も我等罪を犯しし者を納れて、諸悪より釋き給へ。

今も

至淨なる童貞女よ、我は爾罪人等の潔淨たる恩主を生みし者に祈る、爾の母たる祈禱

を以て我を無量の罪より釋き給へ、爾は母として子の前に能はざる所なければなり。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第七調。

仁慈なる童貞女よ、我等衆地上の者は爾の帡幪の下に趨り附く、我等の靈を永遠の火より救ひ給へ。

第七歌頌

イルモス、昔少者は燃ゆる爐を露を出す者と顯して、一の神を歌ひて曰へり、爾は崇め讃めらるる先祖の神なり。

純潔なる者よ、眠に由りて重くなりたる吾が智慧を善行の爲に起し給へ、我が爾凡の造物より最尊き者を讚美せん爲なり。

潔き者よ、三人の少者は爐の中に在りて爾の産を預象せり、蓋爾は火を生みて焚かれざりき。祈る、我が心の物質の慾を焚き給へ。 **光榮**

華麗なる主は爾を女の中に美しく且善なる者と知りて、爾より身を取り給へり。至聖なる少女よ、我を救はんことを彼に祈り給へ。 **今も**

至りて無玷なる者よ、神聖なる露は爾より出でて、罪の熱に由りて枯れたる者を潤す。故に爾に祈る、我が枯れたる靈を潤し給へ。

第八歌頌

イルモス、燃ゆれども焚けざるシナイの棘は口鈍く言澁るモイセイに神を顯せり。神を慕ふ熱心は三人の少者を火に焚かれざる者と爲して、歌はしめたり、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

第七調 水曜日の晩堂課 六一三

第七調 水曜日の晩堂課 六一四

潔き者よ、シナイに於て火に焚かれざる棘は爾の靈妙なる産を見神者モイセイに顯せり。故に彼は斯の靈妙なる産を奇として、歡びて呼べり、主の悉くの造物は主を歌ひて、世世に彼を讃め揚げよ。

生命を生みし潔き童貞女よ、罪に殺されたる吾が心を活かし、神に捧ぐる爾の母たる祈禱を以て我を救ひて、常に歌はしめ給へ、主の悉くの造物は主を歌ひて、世世に彼を讃め揚げよ。 **光榮**

潔き者よ、我爾を夜に晝に離れざる守護者と有ち、見ゆると見えざる諸敵の悪謀を聊も畏れずして、ハリストスに歌ふ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に彼を讃め揚げよ。

今も

生神女よ、爾の子は、仁慈なるに因りて、己の仁愛に促されて、爾を信者に、敵に對する援助、諸愆に對する醫治として與へて、呼ばしむ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に彼を讃め揚げよ。

第九歌頌

イルモス、汚に染まずして生み、萬の物を造りし言に肉體を予へし夫を識らざる母、
生神童貞女、容れ難き者の器、限なき爾の造成主の住所よ、我等爾を崇め讃む。
夫を識らざる聘女、童貞の奪はれざる寶を有つ生神童貞女よ、爾は身にて全能者の母
と現れ、造成者として全世界を養ひ、之を聖にする主を赤子として養ひ給へり。
至りて仁愛なる言、世界の罪を任ふ主を生みし童貞女よ、我等疑はざる信を以て職
として爾を讃美する者に諸罪の赦を降さんことを彼に祈り給へ。

光榮

我罪に耽る者として、生命の終の俄に我に至らんことを戦きて懼る。潔き女宰、凡
そ憂ふる者の轉達者よ、祈る、痛悔の方法を我に與へ給へ。

今も

大仁慈にして洪恩なる主よ、我が爲に備へられたる火に我を遣す勿れ、爾を生みし
童貞女と神聖なる無形の品位、使徒と預言者、致命者と成聖者、及び諸義人の靈は之
を爾に祈る。

次ぎて「常に福にして」。及び叩拜。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞。其他常例
の如し、并に發放詞。

~~~~~

第七調 水曜日の晩堂課 六一五  
第七調 木曜日の早課 六一六

### 木曜日の早課

#### 第一の誦文の後に使徒の坐誦讃詞、第七調。

言よ、爾は使徒等を以て爾の田疇の耕作 偶像を斫る者と顯し給へり。故に彼等は  
爾主宰を諸民の中に傳へて、敬みて爾の宏大なるを顯せり。

句、其聲は全地に傳はり、其言は地の極に至る。

光榮なる者よ、爾等は地上に在りて地の光榮を慕はずして、天の神を人人に傳へて、  
衆を彼に攜へ給へり。

#### 光榮、今も、生神女讃詞。

造物は爾を母と識りたれども、造物主は爾を童貞女と現し給へり、爾は我等の靈  
を救ふハリストス神を身にて生みたればなり。

#### 第二の誦文の後に坐誦讃詞、第七調。

我等は歌頌と詩賦とを以て宜しきに合ひてハリストス神の睿智なる使徒を我等の救  
の嚮導師として尊まん。蓋彼等言の實見者及び役者、友及び兄弟と爲りし者は迷  
の不虔を逐ひて、世界を救ひ給へり。

句、諸天は神の光榮を傳へ、穹蒼は其手の作爲を誦ぐ。

爾がハリストス、神の子、世界の救主なることを預言者は傳へ、使徒は教へ、致命者

は承け認め、我等は信じたり。  
句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

致命者讚詞

主ハリストスよ、爾の致命者は爾の十字架の力を武器として、敵に勝ちて、偶像の迷を辱かしたり。故に諸天使と偕に爾を歌頌し、爾を讚榮して、凱歌を歌ふ。彼等の祈祷に由りて我等の靈に潔淨と大なる憐とを與へ給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

變易せざる言が肉體と成りて我等の中に居りしことの緣由なる者よ、慶べ、使徒と致命者との喜悅、我等信者の救なる潔き者よ、慶べ、ハリストス神の母よ、慶べ。

第三の誦文の後に坐誦讚詞、第七調。

至りて讚美たる主の門徒、光體の如く普天下を輝かしし者よ、我諸愆諸罪の幽暗の中に居る者を照さんことを祈り給へ。  
世界の爲に光體たる主の使徒よ、爾等は絶えず信者の爲に言を輝かして、迷の幽暗を逐ひ拂ふ。常に尊まるる者よ、爾等は聖三者の傳道師として、洗禮を以て異邦民を照らし給ふ。

第七調 木曜日の早課 六一七

第七調 木曜日の早課 六一八

光榮、今も、生神女讚詞。

世界の歡喜なる童貞女よ、使徒等と偕に常に爾の子に祈りて、我等に諸罪の赦免と生命の改易とを賜はんことを求め給へ。

光榮にして讚美たる聖使徒の規程。フェオファンの作。第七調。

第一歌頌

イルモス、主よ、曾て流れ易き性の水は爾の瞬にて地の姿に變れり、故にイズラエリは足を濡らさず渡りて、凱歌を爾に歌ふ。  
主の瞬にて神の實見者と爲りし最尊き使徒よ、爾等は無神者の諸神を滅して、神を信ぜし者を悉く神聖なる愛に升せ給へり。二次。  
全地の鹽と爲りし主の使徒、神の言を宣べたる者よ、我が心の朽つるを止めて、鹽の味を失ひし者を鹹に返し給へ。  
神聖なる使徒よ、衆人の至りて義なる審判者が再來りて爾等と偕に坐せん時、其時我等を凡の定罪より脱れしめ給へ。

生神女讚詞

至淨なる生神童貞女よ、無形の天使及び預言者、致命者及び使徒と偕に主に祈りて、我等に諸罪の赦と豊なる憐とを賜はんことを求め給へ。

又聖大奇跡者ニコライの規程、其冠詞は、ニコライよ、第七の禱を受け給へ。イオシフの作。第七調。

イルモス、エジプトに於てモイセイにイズラエリ民を引き出すことを助け給ひし神、

ひとりかれ うた かれ こうえい あらわ  
獨彼に歌はん、彼光榮を顯したればなり。  
ちじょう しえい いのち わた  
地上に至榮なる生を度りしニコライよ、爾を讚榮する者を彼處に在る光榮に與る者  
な  
と爲し給へ。

いた ふく もの われら ざいあく うみ ただよ どせい いざない なみ う これら われら  
至りて福たる者よ、我等は罪惡の海に濺ひて、度生の誘惑の浪に打たる。此等より我等  
すく たま  
を救ひ給へ。

しんぶ ニコライよ、いまわれ たすけ あた て さず み み てき われ のが  
神父ニコライよ、今我に援助を與ふる手を授けて、見ゆると見えざる敵より我を脱れ  
たま  
しめ給へ。

### 生神女讚詞

しょうしんじょ み えきしゃ つく しゅ い がた じれん よ なんじ うま ひとびと み  
生神女よ、見えざる役者を作りし主は言ひ難き慈憐に因りて爾より生れて、人人に見  
もの たま  
らるる者と爲り給へり。

### 第三歌頌

イルモス、はじめ ぜんとう ことば てん かた あた せいしん そのことごと ちから そな  
イルモス、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの力を備  
しゅ きゆうせいしゅ なんじ うげとめ うご いし われ かた たま  
へし主・救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。

しんせい えいち もんと なんじら よげんしゃ ことば かな しょてん ごと かみ こうえい つた  
神聖にして睿智なる門徒よ、爾等は預言者の言に合ひて、諸天の如く神の光榮を傳

第七調 木曜日の早課 六一九

第七調 木曜日の早課 六二〇

その じんたい と そのくるしみ あきらか つ これら もつ われら しゅう しょよく し  
へ、其人體を取りしことと其苦とを明に誥げたり。此等を以て我等衆を諸愆と、死  
きゆうかい のが たま  
と、朽壞より脱れしめ給へ。二次。

えいち しゅ もんと ゆうとう と や あらわ もの われら きょうあくしゃ  
睿智なる主の門徒、有能なるハリストスの磨がれたる矢と現れし者よ、我等に凶悪者  
や のが はなはだ つみ ぶき きず わ ころ いや たま  
の矢を逃れしめて、甚しく罪の武器にて傷つけられし吾が心を醫し給へ。

てき きけい ことごと あらわ これ はじ き もんと われはなはだ いざな  
敵の詭計を悉く露して、之に恥を衣せたるハリストスの門徒よ、我甚しく誘はれ  
しんせい ころも は もの また こ ころも かざ たま  
て、神聖なる衣を褫がれたる者を復此の衣にて飾り給へ。

### 生神女讚詞

ことば てん ぐん つく おんちやう よげんしゃ もんと しゅう ちめいしゃ たま かみ じれん しゅ  
言にて天軍を造り、恩寵を預言者と、門徒と、衆致命者と共に賜ひし神よ、慈憐なる主  
かれら およ なんじ しじやう はは きとう よ われら しゅう あわれ すく たま  
として、彼等及び爾の至淨なる母の祈祷に因りて、我等衆を憐みて救ひ給へ。

### 又

イルモス、ことば もつ てん かた ち もとい たすい うえ さだ じんあい しゅ わ ちえ なんじ  
イルモス、言を以て天を堅め、地の基を多水の上に定めし仁愛の主よ、我が智慧を爾  
むね かた たま  
の旨に堅め給へ。

せい ニコライよ、ぜんち ため いのり たてまつ われら わざわい むすう うれい すく たま  
聖ニコライよ、全地の爲に禱を奉りて、我等をその禍と無数の憂より救ひ給へ。

せい ニコライよ、きとう もつ われ かみ わぼく たま  
聖ニコライよ、緊く縛られし者を獄より救ひし如く、我が諸惡の桎梏を斷ちて、爾  
の祈祷を以て我を神と和睦せしめ給へ。

せい ニコライよ、われら ひる よる なんじ てんたつしゃ とな われら きとう しゅ たずさ つね  
聖ニコライよ、我等は晝に夜に爾を轉達者と稱ふ、我等の祈祷を主に攜へて、常に  
われら まも たま  
我等を護り給へ。

### 生神女讚詞

しんせい やけずみ と ひばさみ しじやう どうていじよ これ なんじ しんせい はら い いささか  
神聖なる熾炭を取りし鉗たる至淨なる童貞女、之を爾の神聖なる腹に容れて、聊  
や もの われら しよざい や たま  
も焚かれざりし者よ、我等の諸罪を焚き給へ。

### 第四歌頌

イルモス、父の懐を離れずして、地に降りしハリストス神よ、我爾の慮の秘密を聞きて、爾獨人を愛する主を讚榮せり。

父と同寶座なる子は人として地上に現れて 爾等を選びて門徒と爲し、其神性を衆民に傳へしめ給へり。二次。

我不當の者は諸愆の魁たる盜賊に遇ひて、心に傷つけられたり。故に祈る、病者の醫師たる使徒等よ、我を醫し給へ。

光榮なる使徒等よ、我等を諸愆と、諸難と、憂愁、及び諸の誘惑と甚しき苦より脱れしめ給へ。 生神女讚詞

選ばれたる神の母よ、聖にせられし使徒、致命者、及び預言者と偕に我等が諸難、憂愁、

第七調 木曜日の早課 六二一

第七調 木曜日の早課 六二二

諸罪より救はれんことを祈り給へ。

又

イルモス、ハリストス神、人を愛する主よ、爾の攝理に由りて、爾の言ひ難き智慧の光榮は天を蔽へり。

聖ニコライよ、爾は己の睿智を以て異端に味まされたるアライの智慧を無智と爲して、彼に惑はされし者を照し給へり。

神福なる父ニコライよ、神に悦ばるる爾の祈禱を以て我が多くの傷を醫して吾が心を照し給へ。

至福なる者よ、我を殺しし諸愆を殺し、爾の祈禱を以て我を活かして、新なる者と爲し給へ。

生神女讚詞

純潔なる者よ、爾は年に由らざる者を身にて生み給へり、爾を歌ふ我等を多年の罪惡より救はんことを彼に祈り給へ。

第五歌頌

イルモス、主我が神よ、我夜より寤めて爾に祈る、我に諸罪の赦を與へて、我が途を爾の誠の光に向はしめ給へ。

昔爾の使徒に平安を賜ひし主我が神よ、彼等の祈禱に因りて衆人に平安と諸罪の赦とを與へ給へ。二次。

吾が靈の諸罪と吾が心の頑なる習慣とを知り給ふ主我が神よ、使徒の祈禱に因りて、我が功なきに我を憐みて救ひ給へ。

主我が神よ、爾は多くの慈憐に因りて盜賊と淫婦とを救ひ給へり。爾の使徒の祈禱に因りて我放蕩の者をも憐み給へ。

生神女讚詞

婚姻に與らざる童貞女より生れし主我が神よ、彼及び爾の使徒の祈禱に因りて我に諸罪の潔淨を與へ、我を將來の苦より脱れしめ給へ。

又

イルモス、仁愛なる主神よ、我が神は夙に寤めて爾に祈る、蓋爾は光なり、爾の戒は爾の諸僕の爲に醫治と爲れり。

神父ニコライよ、常に我等に對して設くる所の教なき人人の謀を爾の祈祷を以て無効と爲し給へ。

靈を滅す凶悪の蛇を縛りたる至聖なるニコライよ、爾の祈祷を以て我等の諸悪の極梏を斷ち給へ。

神父ニコライよ、我等常に靈にて罪に陥りて、多くの禍に圍まるる者は爾熱切な

第七調 木曜日の早課 六二三

第七調 木曜日の早課 六二四

る轉達者を呼ぶ。

生神女讚詞

衆造物の女君たるマリヤ神の母よ、我が卑微なる心を、強ひて之を制せんと謀る悪敵より防ぎて護り給へ。

第六歌頌

イルモス、ハリストスよ、我世の慮の淵に濼い、我を覆へる諸罪の濤に溺れ、靈を滅す猛獸に擲たれて、イオナの如く爾に呼ぶ、死を致す深處より我を引き上げ給へ。

睿智なる者よ、爾等は實在の智慧の神聖なる門徒と爲りて、エルリンの智慧を愚と爲らしめ、凶悪の智者を滅し、無智の中に迷へる者を敬虔の光にて照し給へり。二次。

昔ペトルの罪過を其涙にて潔め給ひしハリストスよ、彼の祈祷に因りて爾の無量の慈憐と大なる仁慈とを以て、我が靈の無数の罪惡を潔め給へ。

昔痛悔せしニネロイヤ人を宥め給ひし主よ、我をも爾の常の慈憐を以て、爾の使徒に因りて、憐み給へ。救主よ、求む、我が多くの罪惡の爲に我に多くの苦を加ふる勿れ。

生神女讚詞

光を生みし者よ、諸慾に昧まされたる吾が靈を照し給へ。使徒と預言者及び致命者と偕に主に祈りて、我を凡の罪、凡の害、凡の敵の悪謀より救はんことを求め給へ。

又

イルモス、イオナは地獄の腹より呼べり、我が生命を淪滅より引き上げ給へ、我等は爾に呼ぶ、全能の救世主よ、我等を憐み給へ。

神父ニコライよ、爾を呼ぶ者の爲に熱切なる扶助者として、爾は死に定めたる非義なる裁判を破りて、爾の慈憐を以て死せんとする者を救ひ給へり。

至りて聖にせられし牧者よ、我等の靈の不能を醫し、爾を愛する者に對して妄に開きたる口を塞ぎ給へ。

成聖者ニコライよ、爾は己の言の力を以てアリーの憎むべき不虔の教を滅して、正教者の爲に保固と爲り給へり。

生神女讚詞

純潔なる者よ、我が不當なる靈、度生の誘惑と多くの罪とに因りて大く病める者を醫し給へ。

### 第七歌頌

イルモス、昔少者は燃ゆる爐を露を出す者と顯して、一の神を歌ひて曰へり、爾は崇め讃めらるる先祖の神なり。

第七調 木曜日の早課 六二五

第七調 木曜日の早課 六二六

光榮なる使徒よ、爾等は昔神聖なる傳道の露を以て憎むべき無神の爐を滅して呼べり、爾は崇め讃めらるる先祖の神なり。二次。

ハリストス言よ、祈る、爾の使徒の祈祷に因りて、我を滅を爲す罪と、地獄の苦と、「ゲエナ」の苦痛より脱れしめて、我を救ひ給へ。

言の網を以て人人を無知の深處より引き出ししハリストスの門徒よ、無量の罪過に溺らされて荒らさるる我をも救ひ給へ。生神女讃詞

純潔なる者よ、諸天使、致命者、及び使徒と偕に爾の子及び主に、爾の諸僕が種種の災禍と憂愁より救はれんことを祈り給へ。

又

イルモス、救世主よ、爾は燃ゆる爐に露を注ぎ、少者を救ひて歌はしめたり、主我が先祖の神よ、爾は世世に崇め讃めらる。

教會の裝飾と爲りし睿智なる成聖者ニコライよ、我を凡そ醜くして恥づべき諸慾より潔めんことを常に全世界の恩主に祈り給へ。

睿智なる成聖者ニコライよ、爾の祈祷の雨を以て我等衆の心に飲ませ給へ、我等が悔改に合ふ果を結ばん爲なり。

己の祈祷にてアルテミダの宮を壊ちし者よ、爾の祈祷を以て我等夙に興きて忠信に神を讃榮する者の念を照し給へ。生神女讃詞

至福なる潔き生神女よ、凡の舌は信を以て爾、我が族の眞の光榮及び美譽にして、迷ふ者の嚮導師たる者を讃榮す。

### 第八歌頌

イルモス、燃ゆれども焚けざるシナイの棘は口鈍く言溢るモイセイに神を顯せり。神を慕ふ熱心は三人の少者を火に焚かれざる者と爲して、歌はしめたり、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

ハリストスの門徒よ、爾等は靈智なる火に焼かる炭として、凡の偶像の迷ひを藁の如く焚き、信者の靈を照らして呼ばしむ、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。二次。

永在の光に興る者たるハリストスの使徒よ、罪に昧まされたる吾が靈、恥づべき慾に由りて暗くなりたる吾が心を照し給へ、我が絶えず呼ばん爲なり、主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

にくたい きず う たま しゅ ごうまん もの どく がい は か きず わ たましい  
肉體の傷を受け給ひし主よ、傲慢なる者の毒害の齒に嚙まれて傷つけられし吾が靈

第七調 木曜日の早課 六二七

第七調 木曜日の早課 六二八

なんじ せい もんと きとう よ いや われ すく うた たま しゅ ことごと ぞうぶつ  
を爾の聖なる門徒の祈祷に由りて醫して、我を救ひて歌はしめ給へ、主の悉くの造物  
は主を歌ひて萬世に讃め揚げよ。 生神女讃詞

しじょう どうていじょ なんじ ひ う や もの まも ゆえ なんじ う しゅ  
至淨なる童貞女よ、爾は火を生みて焚かれぬ者として護られたり。故に爾の生みし主  
に無形の品位及び使徒と偕に我等が救はれんことを祈りて、信を以て歌はしめ給へ、  
主の悉くの造物は主を歌ひて、萬世に讃め揚げよ。

又

イルモス、我等屬神の露を受けし者は、爐に在る少者に效ひて、信を以て呼ばん、主  
の造物は主を崇め讃めよ。

しせい せい なんじ こうば たい これ はし つ ひとびと ため こうりょう なが しよびょう  
至聖なるニコライよ、爾の芳しき體は之に趨り附く人人の爲に香料を流して、諸病  
を癒す。

せい せかい ぞうせいしや およ しゅ なんじ せかい ため てんたつしや あらわ たま ゆえ きなん  
聖ニコライよ、世界の造成者及び主は爾を世界の爲に轉達者と顯し給へり。故に危難  
の中に爾を呼ぶ者の爲に爾は常に備はりたる救助者として獲らる。

せい うれい うち ねつせつ なんじ よ すみやか ながさめ え もの ゆえ なんじ いの  
聖ニコライよ、憂の中に熱切に爾を呼びて亟に慰を得ざる者なし。故に爾に祈  
る、我等の諸病を醫し給へ。 生神女讃詞

どうていじょ かんみ よめ およそ した なんじ うた さんえい なんじ いた さんび かんみ う  
童貞女、神の聘女よ、凡の舌は爾を歌ひて讃榮す、爾は至りて讃美たる神を生みた  
ればなり。絶えず彼に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

次ぎて生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」、附唱と共に、及び叩拜。

### 第九歌頌

イルモス、汚に染まずして生み、萬の物を造りし言に肉體を予へし夫を識らざる母、  
生神童貞女、容れ難き者の器、限なき爾の造成主の住所よ、我等爾を崇め讃む。

しんせい した かみ ちち ことば なんじら ひかり およ ひる こ な なんじら くれ あい ぜんち  
神聖なる使徒よ、神父の言は爾等を光及び晝の子と爲せり。爾等彼を愛して、全地  
の光體、悪鬼を滅す者、迷へる人人の嚮導師、教會の堅き基と現れ給へり。二次。

ことば すき ことば くれ いた に お もの よく よ あ わ たましい たら  
言の犁、首に彼の至りて輕き任を負ひし者よ、慾に因りて荒れたる吾が靈を新に  
して、痛悔の種を以て之を豊に實る者と爲し給へ。

ことば なんじ こうえい した きとう よ ひと あい しゅ われ しんせい ほうりつ かえり  
言よ、爾の光榮なる使徒の祈祷に因りて、人を愛する主として、我神聖なる法律を顧  
みずして、悪鬼の居所と爲り、凡の罪を行ひし者を宥め給へ。

ち さんび した しんせい ふきゅう たい せいしん もつ せい てん あ ちようし きようかい  
地は讃美たる使徒の神聖なる不朽體にて聖神を以て聖にせられ、天に在る冢子の教會  
は彼等の神にて絶えず輝く。救世主よ、彼等に因りて我等衆を宥め給へ。

第七調 木曜日の早課 六二九

第七調 木曜日の早課 六三〇

### 生神女讃詞

だいじんじ こうおん しゅ わ ため そな ひ われ つかわ なか なんじ う  
大仁慈にして洪恩なる主よ、我が爲に備へられたる火に我を遣す勿れ、爾を生みし  
童貞女と神聖なる無形の品位、使徒と預言者、致命者と成聖者、及び諸義人の靈は之



を爾に祈る。

又

イルモス、性に超えて母、性に順ひて童貞女、女の中に獨祝讚せらるる者を、我等信者は歌を以て生神女として崇め讚む。

至榮なるニコライよ、爾は尊き成聖者として、聖にせられし使徒の風習に順ひて、彼等の座を繼ぎ給へり。

福たる者よ、熱切に爾を呼ぶ者の爲に、造成主は爾を全世界に神聖なる熱心者、及び一切に於て至大なる扶助者と爲し給へり。

神父ニコライよ、我等は傷める心を以て爾に呼ぶ、我等の爲に憂の中に慰と爲りて、常に我が靈より悲を拂ひ給へ。

嗚呼靈よ、樹が斧を以て斫らるる如く、斯く爾は死を以て斫られん、故に怠る勿れ、務めて悔改の果を神に捧げよ。

生神女讚詞

潔き者よ、爾は萬有を保つ主を己の聖なる手に保ち給へり。彼に我等が敵の害毒に悩まされぬ者として救れんことを祈り給へ。

次ぎて「常に福にして」、及び叩拜。小聯禱、光耀歌、及び常例の聖詠。

挿句に使徒の讚頌、第七調。

光榮なる使徒、教會の柱、眞實の傳道師、光明なる燈よ、爾等は屬神の火を以て凡の迷を焚き、人類を照し給へり。故に爾等に祈る、世界に平安を與へ、我等の靈を救はんことを我が救世主及び神に祈り給へ。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

ハリストスの使徒、救世主の耕作者よ、爾等は十字架を犁の如く肩に荷ひて、荒れたる地を偶像の迷より潔めて、信の言を播き給へり。ハリストスの聖なる使徒よ、爾等は實に宜しきに合ひて尊まる。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に助け給へ、我が手の工作を助け給へ。

致命者讚詞

受難者致命者は一の事を慕ひ、一の事に目を注ぎ、一の事を生命の道と爲せり、是

第七調 木曜日の早課 六三一

第七調 木曜日の眞福詞 六三二

れ互に勵みてハリストスの爲に死を受くることなり。嗚呼奇跡や、競ひて寶の如くに苦を求めて、相語りて云ふ、我等若し今日死せずば、後に必死せん、是れ生ける者の免れざる分なり、然らば最必要なる事を行ひ、公の事を己に歸し、死を以て生を買はんと。神よ、彼等の祈禱に因りて我等を憐み給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

ハリストスよ、爾は言ひ難く童貞女より生れて、幽暗に在る者を照して呼ばしむ、主よ、光榮は爾に歸す。

次ぎて「至上者よ、主を讚榮し」。聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞、聯禱、及び第一時課、并に發放詞。



木曜日の眞福詞、第七調。

美しくして食ふに善き果を我を殺せり。ハリストスは生命の樹なり、我是より食ひて死せず、乃盜賊と共に呼ぶ、主よ、爾の國に於て我を憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

睿智にして光榮なる使徒よ、爾等は異邦人の群を邪宗の深處より引き出して、眞神の教に導きて、靈を永世の爲に養ふ筈に就かしめ給へり。

句、人我の爲に爾等を詈り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

主の使徒よ、爾等は傳道の光を以て深き迷の幽暗を拂ひて、敬虔の者の心を明に照し給へり。故に我等屬神の歌を以て爾等を讚揚す。

句、喜樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

致命者讚詞

神聖なる受難者よ、爾等は劍を以て百體を斷たれて、救世主の愛より斷たれずして止まれり。故に彼の許に升りて、今歡喜の中に在りて、皆天の光榮に輝やかさる。

光榮

人類の至りて凶悪なる敵は我を執へたり。全能なる聖三者よ、爾の傳道師の祈禱に因りて、我を其手より脱れしめ給へ、我が爾の無量なる慈憐を讚め揚げん爲なり。

今も

至淨なる童貞女よ、爾は父と同寶座の子を爾の潔き血より生み給へり、彼が死に屬する身を取りしは人の性に不死を賜はん爲なり。故に我等皆職として爾を讚揚す。



第七調 木曜日の眞福詞 六三三

第七調 木曜日の晩課 六三四

木曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に十字架の讚頌、第七調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん、然れども爾に赦あり人の爾の前に敬まん爲なり。

至仁なるハリストスよ、爾は人を神と爲さん爲に人と成りて、十字架に釘せられたり。光榮は爾に歸す。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

イイススよ、エウレイの會が爾を擬定して十字架に釘せし時、地は震ひ、日の光は隠れたり。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

不死にして聖なる王よ、不法の會は爾迷の棘を根より絶す主に棘を冠せたり。

次ぎて若し之あらば、月課經の聖人の讚頌。光榮、聖人の、今も、調の十字架生神女讚詞。若し月課經なくば、又至聖なる生神女の讚頌。第七調。

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

無玷なる牝羊及び童貞女は羔が二の盜賊の間に木に懸けられしを見て呼べり、嗚呼吾が甘愛なる子よ、此の奇異にして至榮なる秘密は何ぞや、如何ぞ不法の會は爾を十字架に擧げたる、「マンナ」を以て人人を養ひし者に膽を飲ませたる。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

我がハリストスよ、童貞女爾の母は爾がイウデヤ人の法に戻る裁判に由りて罽縠の處に十字架に釘せられしを見し時呼べり、嗚呼吾が至愛なる子よ、此の奇異なる顯現は何ぞや、如何ぞエウレイの無知なる諸人は爾萬有の主を十字架に釘する。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

至聖なる女宰よ、我等皆獨爾が産の後に童貞女と現れしを知れり。至淨なる者は種なく生みし主が木の上に甘じて其手を釘せられしを見て、哭きて呼べり、恒忍なる主よ、爾は甘じて死して、爾を歌ふ衆人を死より救ひ給ふ。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

女宰、至聖なる童貞女よ、爾が生みし主、慈憐に由りて十字架に釘せられて、世界の爲に生命の流れを注ぎし者に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。我等信者は

第七調 木曜日の晩課 六三五

第七調 木曜日の晩課 六三六

獨爾を避所と垣牆、及び保護として有てばなり、故に爾の帡幪の下に趨り附く。

次ぎて「穩なる光」。本日の提綱。「主よ、我等を守り」。

挿句に十字架の讚頌、第七調。

我等は爾の十字架を恃頼として有ちて、已に生命の樹に就くを禁ぜられず。主よ、光榮は爾に歸す。

句、天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む。視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を憐むを俟つ。

不死なる者よ、爾は木に懸けられて、悪魔の網を悉く破り給へり。主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に贖き足れり、我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに贖き足れり。

致命者讚詞

ハリストス神よ、光榮は爾に歸す、爾は使徒の譽、致命者の悦なり。彼等の教は一體の三者なり。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

純潔なる者は爾が甘じて木に釘せられしを見し時、泣きて爾の權柄を歌へり。

次ぎて「主宰よ、今爾の言に循ひ」。聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞。聯禱、及び發放詞。



木曜日の晩堂課

至聖なる生神女の規程、第七調。

第一歌頌

イルモス、ファラオンを紅の海に揺り墜しし神に凱歌を歌はん、彼光榮を顯したればなり。

女宰よ、我は我が生命り終の近づきしを見て呼ぶ、神の聘女よ、爾我に諸罪の潔淨を與へ給へ。

我爾の慈憐の淵に趨り附きて呼ぶ、仁慈なる女宰よ、我を諸の苦より脱れしめ給へ。

光榮

第七調 木曜日の晩堂課 六三七

女宰よ、我等信を以て爾に趨り附く者を納れて、諸の禍及び憂より脱るるを得しめ給へ。今も

至淨なる者よ、爾は救世主及び神を胎内に宿して、預言者の言ひし如く、アダムの墜ちたる幕を興し給へり。

第三歌頌

イルモス、ハリストスの教會は信を以て堅められたり、蓋絶えず歌を奉りて呼ぶ、主よ、爾は聖なり、我が神は爾を歌ふ。

言ひ難く神及び主宰を孕みし至淨なる者よ、我罪の暴風に圍まるる者を之より脱れしめて、救ひ給へ、

少女よ、我不當なる諸罪の夜に蔽はるる者を痛悔の光線を以て照して、常に我に光の業を行ふを得しめ給へ。光榮

衆信者の心を養ふ天の糧を生みし生神女よ、吾が慾に耽る飢えたる靈を飽かせ給

へ。

今も

童貞女よ、我爾の神聖なる産を知るを以て堅められ、爾の轉達を得て呼ぶ、我等の靈を救ふ主よ、爾は聖なり。

第四歌頌

イルモス、主よ、我爾の風聲を聞きて懼れたり、爾の作爲を悟りて驚けり。女宰よ、我爾の前に歎息して。吾が心より熱切に呼ぶ者を棄つる勿れ、辱しむる勿れ。

神聖なる火を生みし女宰よ、肉體の逸樂の棘、吾が不當なる靈を刺す者を焚き給へ。

光榮

祝讚せらるる潔き者よ、我に諸罪の赦を與へて、畏るべき永遠の苦より脱れしめ給へ。

今も

至りて潔き者よ、爾の内に入りし言は罪過に由りて陥りたる吾が性を新にし給へり。

第五歌頌

イルモス、仁愛なる主神よ、我が神は夙に寤めて爾に祈る、蓋爾は光なり、爾の戒は爾の諸僕の爲に醫治と爲れり。

我至りて不當なる者は無智なる慾を以て吾が不當の肉體に役して、無知なる禽獸に似たる者と爲れり。生神女よ、爾我に起くるを得しめ給へ。

生神童貞女よ、我衆人に超えて罪を犯して、爾の熱切なる庇護に趨り附く者を憐みて、苦より救ひ給へ。

光榮

第七調 木曜日の晩堂課 六三九

第七調 木曜日の晩堂課 六四〇

母童貞女よ、願はくは爾を生神女と承け認むる者は、爾神の母に因りて、終らざる國と福樂とを受くるを得ん。

今も

婚姻に與らざる祝福讚榮せらるる母よ、制し難き慾に屈められて、諸罪に殺されたる吾が靈を活かし給へ。

第六歌頌

イルモス、イオナは地獄の腹より呼べり、我が生命を淪滅より引き上げ給へ、我等は爾に呼ぶ、全能の救世主よ、我等を憐み給へ。

童貞女よ、罪の暴風は我を圍みて、失望の淪滅に引く。祈る、爾の堅固にして有能なる援助の手を我に伸べ給へ。

女宰よ、爾に在る熱切なる慈憐の油を我に沃ぎて、我が諸罪を痊し、我を永遠の火より救ひ給へ。

光榮

爾の至淨なる産を以てエワの病を醫しし童貞女よ、我が靈體の諸慾の病を醫し給へ。

今も

じゅんけつ わてん はは どうていじょ なんじ にくたい なんじ と かみ かしょう その じゅうじか あ  
純潔無玷なる母童貞女よ、爾は肉體を爾より取りし神を歌頌して、其十字架に擧げ  
られしを見て泣き給ふ。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第七調。

いさぎよ もの なんじ はら み じゅうじか しきよく き せかい きゆうかい すく たま ゆえ  
潔き者よ、爾の腹の果は十字架を四極に樹てて、世界を朽壞より救ひ給へり。故に  
われら なんじ しえい もの あが ほ  
我等爾を至榮なる者として崇め讃む。

第七歌頌

イルモス、けいけん しょうしゃ ひ いろり なげう ひ か つゆ な うた もつ よ  
イルモス、敬虔の少者は火の爐に擲たれて、火を易へて露と爲し、歌を以て籲べり、  
しゅ わ せんぞ かみ なんじ あが ほ  
主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

わ しょうざい あた しんぼん おどし ますますくわ いさぎよ もの われ なんじ まえ ふふく よ おわり  
我が諸罪に當る審判の恐嚇は益加はれり。潔き者よ、我爾の前に俯伏して呼ぶ、終  
の先に我に潔淨と、傷感の涙と、風習の矯正とを與へ給へ。

しじょう どうていじょ われ げがら つみ いた や しつぽう はか ゆ なんじ ばんしゅう いのち  
至淨なる童貞女よ、我汚はしき罪を痛く病みて、失望の墓に適く、爾は萬衆の生命  
を生みし者として、神聖なる行爲にて我を活かし給へ。

光榮

じんじ しみ じんせい しわざ われ い たま  
仁慈なる神の母よ、信を以て爾の永存なる恩寵を呼ぶ者を神靈の死より脱れしめて、  
爾の至淨なる祈禱を以て天國を得しめ給へ。

今も

われら どうていじょ さと 難き さん さんえい これ よ われら し まぬか ふきゆう たため うま よ  
我等は童貞女の悟り難き産を讃榮す。之に因りて我等死を免れ、不朽の爲に生れて呼  
ぶ、主我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

第七調 木曜日の晩堂課 六四一

第七調 木曜日の晩堂課 六四二

第八歌頌

イルモス、ゆいいち むげん こうえい おう てん ぐん あが ほ てん し ひんい おのの しゅ しい  
イルモス、唯一無原なる光榮の王、天軍の崇め讃め、天使の品位の戦く主を、司祭  
よ、歌へ、人人よ、彼を世に讃め揚げよ。

どうていじょ しょうよく いろり われ こが いつらく ひ もつ か すみやか なんじ じれん つゆ もつ  
童貞女よ、諸愆の爐は我を焦して、逸樂の火を以て嚙む。速に爾の慈憐の露を以  
て之を滅して、吾が靈を堅むる爽涼を與へ給へ。

われ いつらく ふけ たましい げが からだ みだ ひとびと はずかしめ しょうてき わらい な じよさい  
我逸樂に耽りて靈を汚し、體を擾し、人人の詬辱、諸敵の嘲笑と爲れり。女宰・  
生神女よ、我が爲に扶助者と爲り給へ。

光榮

どうていじょ なんじ う かみ いの しん もつ なんじ どうと もの しょうなん と しょうびょう  
童貞女よ、爾が生みし神に祈りて、信を以て爾を尊む者に諸難の解かるること、諸病  
の速なる醫治、永遠の恩寵及び救を賜はんことを求め給へ。

今も

おのれ ぞう したが つく のち その ごうせい う はじ のろい と たま しゅ しい  
アダムを己の像に循ひて造り、後に其合成を受けて、始の詛を解き給ひし主を、司祭  
よ、歌ひて、世に彼を讃め揚げよ。

第九歌頌

イルモス、てん たか きんび もの なんじ むげん ことば たね はら にくたい と  
イルモス、天より高き讚美たる者よ、爾は無原なる言を種なく孕みて、肉體を取り  
し神を人人の爲に生み給へり。故に我等皆爾を崇め讃む。

いた こうめい しょうしん どうていじょ はは にくよく はなはだ くら わ ふとう たましい なんじ  
至りて光明なる生神童貞女母よ、肉慾に甚しく味まされたる吾が不當なる靈を爾  
の祈禱の光を以て神を畏るる畏に導き給へ。

しせい じよさい われ しょうざい おお よ すくい のぞみ うしな もだ もの なんじ おんけい なんじ  
至聖なる女宰よ、我諸罪の多きに因りて救の望を失ひて悶ゆる者に、爾の恩恵と爾

の慈憐とを降し給へ。 **光榮**  
生神女よ、爾の性に超ゆる産は諸天使を驚かし、人人を惧れしむ、衆の爲に言ひ難く、悟り難ければなり。我等は敬虔に之を歌ひて、爾を讚榮す。 **今も**  
生神女よ、死囚及び朽壞の衣を我より脱がせ給へ、蓋爾は人人の爲に救の衣たる身を取りし言を生み給へり。故に我等皆常に爾を崇め讚む。

次ぎて「常に福にして」及び伏拜。聖三祝文。「天に在す」の後に讚詞。其他、并に發放詞。

~~~~~

第七調 木曜日の晩堂課 六四三

第七調 金曜日の早課 六四四

金曜日の早課

第一の誦文の後に十字架の坐誦讚詞、第七調。

ハリストス神よ、教會は杉、黄楊、及び松に於て爾に伏拜して呼ぶ、生神女に由りて吾が皇帝に勝利を與へて、我等を憐み給へ。

句、主我が神を崇め讚め、其足凳に伏し拜めよ、是れ聖なり。

私の爲に十字架に釘せらるるを忍び給ひしハリストス神よ、我が警醒の讚美を納れて、我を救ひ給へ、爾は人を愛する主なればなり。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

聘女ならぬ聘女、生神童貞女よ、我等は爾の子の十字架に由りて護られて、悪鬼の攻撃より救はる、故に職として爾を讚め歌ひて讚榮す。

第二の誦文の後に坐誦讚詞、第七調。

ハリストスよ、爾は己の十字架の木を火よりも明に、焰よりも力ある者と顯して、爾が甘じて其上に受けし死を歌ふ人人の罪を焚き、心を照す者と爲し給へり。ハリストス神よ、光榮は爾に歸す。

句、神我が古世よりの王は救を地の中に作せり。

主よ、我等は爾の十字架の擧げらるるを見て、常に信を以て之に就き、歌頌と詩賦とを捧げ、畏懼と歡喜とを以て之に接吻す。獨大仁慈なる主よ、斯の表章を以て爾の諸僕を聖にし、爾の世界を平安ならしめ給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

聖なる致命者よ、祈る、我等に諸罪の赦を賜ひ、我等を苦しき死及び將來の苦痛より救はんことを主に俵り給へ。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

潔き生神女永貞童女、婚姻に與らざる女宰よ、爾は己の子の十字架に懸れるを見て、母として泣きて、彼の驚くべき寛容を讚榮せり。

第三の誦文の後に坐誦讚詞、第七調。

ハリストスよ、爾の尊セダレンき十字架は世界の武器及び勝たれぬ勝利なり。我等は此を以て見えざる敵を斃して、感謝の心を抱きて爾を讃め歌ふ。

十字架の木を以てアダムセダレンの定罪を除きし主よ、吾が心の痛傷を除きて、我等を救ひ給へ。

光榮、今も、十字架生神女讚詞。

至りて潔いたき者よ、爾の腹いさぎよの果は十字架を四極なんじに樹てて、世界を朽壞はらより救ひ給へり。故に我等爾至榮みなる者を崇め讃む。

第七調 金曜日の早課 六四五

第七調 金曜日の早課 六四六

尊貴にして生命を施す十字架カノンの規程、其冠詞は、ハリストスは木に於て古の害を止めたり。イオシフの作。第七調。

第一歌頌

イルモス、ファラオンくれを紅ないの海に揺り墜しし神に凱歌うみを歌はん、彼光榮ゆを顯したればなり。

ハリストスは十字架じゅうじかに擧げられて、衆人を己あに引き寄せ、衆を墜しし敵しゅうじんを墜し給へり。

イススよ、爾は生いのちを施す脅ほどこより我が爲わに生命の水ためを流し、主宰いのちよ、爾は死者みずと爲りて、敵ながを殺し給へり。致命者讚詞

受難者じゆなんしゃよ、我等われらの爲ためにハリストスねつせつに熱切なるいのり禱たてまつを奉りて、我等衆われらが畏しゅうるべきおそ審判しんぱんより救はれんことを求め給へ。致命者讚詞

睿智えいちなる致命者ちめいしゃよ、爾等なんじらはハリストスための爲ひくに卑しんせいくなりて、神聖おんちようなる恩寵もつを以て傲慢ごうまんの敵たかを斃し給へり。生神女讚詞

女宰じよさいよ、至大しだいなる慈憐じれんを以て爾もつより輝なんじき出でたる主かがやの十字架いに在るしゆを見て、爾泣じゅうじかきて彼あを讃榮みせり。なんじ

又至聖なる生神女の規程、第七調。

イルモス同上

至淨しじようなる者ものよ、爾は身なんじにて神みを生かみみて、犯罪うに由りて朽壞はんざいに陥りし原祖よアダムきゆうかいを新おちいにし給へり。げんそ

潔いさぎよき者ものよ、我等われら樂たのしみてガウリイルこえの聲もつを以て爾なんじに呼ぶ、衆人しゅうじんの特頼たのみ、至淨しじようなる者ものよ、慶よろこべ、神の聘女かみよ、慶よろこべ。

至淨しじようなる童貞どうていじよ女じつよ、實うまに爾しゆより生いのちれし主ほどこの生こうどうを施す行動よに因りて我が殺わされたる智慧ちえを活いかし給へ。たま

獨ひとり讚美さんびたる者ものよ、信しんを以て爾もつを祝讚なんじする者は神しゆくさんより明ものに祝福かみせらる、爾は祝福あきらかの泉しゆくふくを生なんじみたればなり。いずみ

第三歌頌

イルモス、ハリストスの教會は信を以て堅められたり、蓋絶えず歌を奉りて呼ぶ、主よ、爾は聖なり、我が神は爾を歌ふ。
本性に由りて苦に與らざる者は如何ぞ苦を忍ぶ、生命を我に嘘き入るる者は如何ぞ木の上に死する。救世主よ、爾の仁慈と恒忍とは大なる哉。
言よ、爾は十字架に盜賊の間に非義に擧げられて、爾を自由に苦を受くる萬物の造成主と承け認めし者を信に由りて義と爲し給へり。

第七調 金曜日の早課 六四七
第七調 金曜日の早課 六四八

致命者讃詞

受難者は體の削がるること、四肢百體の斷たるることを忍びしに因りて、光榮を獲得、我等の爲に祈り給ふ。 致命者讃詞
睿智なる者は最多くの苦を神の爲に忍びしに因りて、今最大なる光榮を嗣ぎて、常に我等の靈の爲に祈り給ふ。 生神女讃詞
人と爲りし神言、十字架に釘せられし者を生みたる潔き童貞女よ、爾の母たる祈禱を以て我等に罪債の釋を與へ給へ。

又 イルモス同上

神は爾童貞女を至聖なる幕として山上に於て立法者に預象せり、蓋爾は萬有を聖にする主の居所と爲り給へり。
童貞女よ、我等皆爾を聖なる地なりと知れり、蓋爾は種なくして我等の爲に美しき穂たるイイスス、ハリストス、信と愛とを以て爾を讚美する者を養ふ主を生育し給へり。
童貞女よ、爾に依りて至上なる神、言ひ難く身を取りし者の行動は見られたり、蓋爾は萬有を司る主の母と爲り給へり。
童貞女よ、我爾の神聖なる産を知るを以て堅められ、爾の轉達を得て呼ぶ、我等の靈を救ふ主よ、爾は聖なり。

第四歌頌

イルモス、主よ、我爾の風聲を聞きて懼れたり、爾の作爲を悟りて驚けり。
仁愛なる主宰よ、爾は最美しき葡萄の房として、十字架に擧げられて、樂の酒を滴らせ給へり。
主宰よ、爾は甘じて爾の身に苦を受けて、最疾しき人人の苦を實に鎮め給へり。

致命者讃詞

受難者は傷つけられて戦ふ敵に傷を負はせて、我等の靈の醫師と顯れたり。

致命者讃詞

受難者は窘逐者と戦ひて、之に勝ちて、勝利の榮冠を冠らせられたり。

生神女讃詞

童貞女よ、爾は種なくして言、其仁慈に因りて十字架の上に朽壞を滅しし主を生み給へり。

又 イルモス同上

至^{しじょう}淨^{もの}なる者よ、アウラクム^{なんじ}は爾^{せいしん}を聖^{かげ}神^{おお}の蔭^{やま}に蔽^みはるる山^{けだしなんじ}と見^みたり、蓋^と爾^とより身^とを取^とりし神^とは現^とれ給^とへり。

第七調 金曜日の早課 六四九

第七調 金曜日の早課 六五〇

正^{せいきょうしゃ}教^{かい}者^{あつ}の會^{なんじ}は集^{しせい}まりて、爾^{もの}至^{かみ}聖^{はは}なる者^{うた}を神^{てんししゅ}の母^{とも}として歌^{なんじ}ひて、天^よ使^よ首^よと偕^よに爾^よに呼^よぶ、^{よろこ}慶^よべ。

爾^{なんじ}潔^{いさぎよ}き者^{もの}を生^{しょうしんじょ}神^{みと}女^{ほつ}と認^{おもて}むるを欲^{はず}せざりしネストリイ^{けだしなんじ}の面^{けだしなんじ}は辱^{けだしなんじ}かしめらる、蓋^と爾^と至^と淨^となる者^とは實^とに神^とを生^とみ給^とへり。

純^{じゆんけつ}潔^{もの}なる者^{しゆさい}よ、主^{なんじ}宰^{うるわ}は爾^{ばんとく}を美^{かがや}しくして萬^{もの}德^みに輝^{なんじ}く者^{うち}と見^いて、爾^{しょうしんじょ}の内^しに入りて、生^と神^と女^とと爲^とし給^とへり。

第五歌頌

イルモス^{じんあい}、仁^{しゆ}愛^{かみ}なる主^わ神^{しん}よ、我^{つと}が神^きは夙^{なんじ}に寤^{いの}めて爾^{けだしなんじ}に祈^{ひかり}る、蓋^{なんじ}爾^{いましめ}は光^いなり、爾^いの戒^いは爾^いの諸^い僕^いの爲^いに醫^い治^いと爲^いれり。

仁^{じんあい}愛^{しゆさい}なる主^{なんじ}宰^みよ、爾^きは身^あにて木^{しゅうぞうぶつ}に擧^{むち}げられて、衆^{あな}造^ひ物を無^い智^いの穴^{なんじ}より引^いき出^いして、爾^いを知る^し知識^{ちしき}に上^{のぼ}せ給^{たま}へり。

イイスス^{ふほう}よ、不^{たみ}法^{なんじ}の民^{じどく}は爾^{がい}毒^{へび}害^{かしら}の蛇^{くだ}の首^{たま}を碎^{しゆ}き給^さふ主^{されこうべ}を髑^{ところ}髑^{てい}の處^もに釘^もせんことを求^もめたり。

致命者讚詞

ハリストス^{ちめいしや}の致^{なんじ}命^ら者^{おのれ}よ、爾^{しんせい}等^ちは己^{じやしゅう}の神^{ながれ}聖^{とど}なる血^{ぼうぎやくしや}にて邪^{とど}宗^{とど}の流^{とど}を止^{とど}め、暴^{ぼうぎやくしや}虐^{ぼうぎやくしや}者^{ぼうぎやくしや}ファラ^{ぼうぎやくしや}オン^{ぼうぎやくしや}を其^{そのうち}内^{おぼ}に溺^{たま}らし給^{たま}へり。

致命者讚詞

受^{じゆなんしや}難^{なんじ}者^らよ、爾^{ざんこく}等^{くまで}は殘^か酷^{げんせき}に鐵^{もつ}搭^{もうしんしや}にて搔^{もつ}かれ、嚴^{もうしんしや}責^{こころ}を以^さて妄^{しやうり}信^{もの}者^{しやうり}の心^{しやうり}を裂^{しやうり}きて、勝^{しやうり}利^{もの}者^{しやうり}と爲^{しやうり}り給^{しやうり}へり。

生神女讚詞

聖^{せい}潔^{けつ}なる者^{もの}よ、神^{かみ}は爾^{なんじ}の腹^{はら}を聖^{せい}にして、其^{そのうち}内^いに入り、十^{じゅうじか}字^あ架^あに擧^{ぞうぶつ}げられて、造^{おのれ}物を己^{おのれ}と偕^{おのれ}に擧^{おのれ}げ給^{おのれ}へり。

又 イルモス同上

女^{じょくん}君^{どうていじょ}・童^{しゆさい}貞^{なんじ}女^{いと}よ、主^{うるわ}宰^{かんあい}は爾^{もの}を最^{ばんとく}と美^{かがや}しくして甘^{もの}愛^あなる者^あ、萬^あ德^あに輝^あく者^あとして愛^あして爾^{なんじ}の内^{うち}に入り給^{たま}へり。

恩^{おんちよう}寵^{こうめい}の光^{もん}明^{なんじ}なる門^{かがや}、爾^{ひかり}の輝^{ぜんち}く光^{てら}にて全^{しせい}地^{しょうじょ}を照^{なんじ}しし至^{うた}聖^{もの}なる少^{てら}女^{てら}よ、爾^とを歌^とふ者^とを照^とし給^とへ。

母^{はは}童^{どうていじょ}貞^{ねが}女^{なんじ}よ、願^{しょうしんじょ}はくは爾^うを生^と神^{もの}女^{なんじ}と承^{なんじ}け認^{はは}むる者^よは、爾^{おわ}神^くの母^くに因^くりて、終^くらざる國^くと福^く樂^くとを受^くくるを得^くん。

純^{じゆんけつ}潔^{かみ}なる神^{はは}の母^{なんじ}よ、爾^{ぜんちしや}は全^{ぜんちしや}知^{ぜんちしや}者^{ぜんちしや}全^{ぜんちしや}能^{ぜんちしや}者^{ぜんちしや}の殿^{でん}と現^{あらわ}れたり、蓋^{けだしかれ}彼^{なんじ}は爾^{はら}の腹^{てん}を天^いよりも潔^いき者^いと見^いて、其^{そのうち}内^いに入り給^{たま}へり。

第六歌頌

イルモス^{じごく}、イオナ^{はら}は地^よ獄^わの腹^{いのち}より呼^{ほろび}べり、我^ひが生^あ命^{たま}を淪^{われ}滅^らより引^{なんじ}き上^{なんじ}げ給^{なんじ}へ、我^{われ}等^らは爾^{なんじ}に呼^{なんじ}ぶ、全^{ぜんちしや}能^{きゆうせいしゆ}の救^{われ}世^ら主^{あわれ}よ、我^{たま}等^{たま}を憐^{たま}み給^{たま}へ。

病む者の醫師よ、爾は仁慈慈憐に由りて現れて、爾の十字架及び苦を以て病める人

第七調 金曜日の早課 六五一

第七調 金曜日の早課 六五二

の性を醫し給へり。

昔アダムは木に縁りて定罪せられたり、今彼は十字架の木に縁りて義とせられ、樂園に入るを得、又福樂を享けたり。

至仁なる王よ、我等は爾身にて十字架に釘せられし者を歌ひ、棘を冠りて光榮を人人に冠らせし主を讚榮す。

致命者讚詞

受難者は拜偶像の滅を爲す害を斥けて、苦に付され、死して、今ハリストスと偕に王たる尊榮を享く。

致命者讚詞

窘逐も、飢渴も、裸裎も、苦難も、死も、敢て神聖なる受難者をハリストスの愛より離さざりき。

生神女讚詞

至聖純潔なる母童貞女よ、爾は肉體を爾より取りし神を讚榮して、其十字架に擧げられしを見て泣き給ふ。

又 イルモス同上

生神童貞女よ、爾は神人として人の中に在しし唯一の恩者、人人に存在を賜ふ主を生み給へり。

生神女よ、爾は「エムヌイル」、二性を有つ者、完全なる言、身を取りし神、我等に救贖を賜ふ主を生み給へり。

生神女よ、律法の石板を納れし約匱は爾己の腹に我等の爲に身を取りし神言を納れ給ひし者を預象せり。

潔き者よ、完全なる天使の舌も爾の讚美を言ひ盡す能はず。我等は今僕としてガウリイルの言を受けて、爾に奉りて呼ぶ、慶べ。

第七歌頌

イルモス、昔少者は燃ゆる爐を露を出す者と顯して、一の神を歌ひて曰へり、爾は崇め讃めらるる先祖の神なり。

至仁なる主よ、爾は十字架に不法者の間に擧げられて、我が不法の重任を軽くし給へり。讚美たる主先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

救世主よ、爾は戈を以て爾の神聖なる脅を刺されて、脅の肋骨より造られたる者の墮落を改め、焰の劍に我が爲に樂園に入るを許すことを命じ給へり。

致命者讚詞

致命者よ、爾等は教會の穹蒼に堅められたる星と爲りて、苦の光明と醫治の光とを以て造物を照し給ふ。

致命者讚詞

録されたる神の命を熱心に守りて、之が爲に勇ましく苦を受けし主の致命者の名は生命の書に録されて永遠に到らん。

第七調 金曜日の早課 六五三

生神女讃詞

至聖なる者は彼より輝き出でたる至聖なる言が聖なる十字架に擧げられて地上の者を聖にするを見て、泣き給へり。

又 イルモス同上

純潔なる者よ、爾の産は昔火の爐に在りし者を救へり。今は我等言に超ゆる彼の降臨を讃揚して、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらると呼ぶ者を救ひ給へ。

純潔なる童貞女よ、神の先祖ダウイドは爾の光榮を録して、爾造物の女王が我が先祖の神の右に立ち給ふを明に預言す。

潔き者よ、爾は己の産を以て地上の者の性を新たにし給へり。故に我等爾に呼ぶ、女君よ、爾の腹の果は萬世に崇め讃めらる。

至淨なる者よ、定罪せられて死に執はれたるアダムを第二のアダムは憐みて、爾に由りて召して呼ばしむ、生れて我を新にせし主よ、爾は崇め讃めらる。

第八歌頌

イルモス、唯一無原なる光榮の王、天軍の崇め讃め、天使の品位の戦く主を、司祭よ、歌へ、人人よ、彼を世世に讃め揚げよ。

智識の樹は我を死者と爲せり、爾は、我がハリストスよ、木の上に殺されて、我を活かして歌ふを教へたり、司祭よ、歌へ、人人よ、萬世に讃め揚げよ。

王よ、法に戻る會は爾、始めて造られしアダムの不順の棘を根より絶す主に棘を冠らせ、衆人を迷の深處より引き出し主を十字架に擧げたり。致命者讃詞

救世主よ、無智の民は爾智慧を以て天を張り、爾の苦にて我が苦を止め、釘の傷にて我が傷を醫し給ふ主を木の上に張りたり。致命者讃詞

致命者の不朽體は疑なき心を以て來る者の爲に奇跡の芳香を放ち、常に諸慾の悪臭を拂ひ、神に因りて衆に健康を與ふ。生神女讃詞

潔き童貞女よ、聖人の品位は爾の胎より出でし主宰、十字架に在りて彼等に苦の道を示しし主に祈りて、爾を萬有の女王として讃榮す。

又 イルモス同上

神の母童貞女よ、悟り難き萬有の主宰、諸天の容るる能はざる主は爾の腹の内に入り給へり。故に我等信者は愛を以て爾を世世に讃め揚ぐ。

少女よ、萬物より上なる智慧、生れたる性の見る能はざる主を爾は己の至淨なる手に抱き給へり。故に我等信者は愛を以て爾を萬世に讃め揚ぐ。

童貞女よ、爾が生みし神に祈りて、信を以て爾を尊む者に諸難の解かるること、諸病の速なる醫治、永遠の恩寵及び救を賜はんことを求め給へ。

至聖なる童貞女よ、我等は爾を萬徳に裝飾せられて輝ける至上者の殿と知りて、敬虔

に爾を歌ひて、萬世に讚榮す。

次に生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」。

第九歌頌

イルモス、天より高き讚美たる者よ、爾は無原なる言を種なく孕みて、肉體を取りし神を人人の爲に生み給へり、故に我等皆爾を崇め讚む。

世世の王、全能なるイイススよ、爾が十字架に擧げられしを見て、日は晦み、地は震ひ、殿の美しき幔は裂けたり。

我がハリストスよ、不法の人人は爾眞實の神の手と足とに釘うち、生を施す脅を戈にて刺し、爾萬衆の甘味なる主に膽と醋とを飲ませたり。

致命者讚詞

勇敢なる受難者は多種の苦を以て壞られて、悪の魁の網を壞り、榮冠を冠れる勝利者と爲りて讚揚せらる。

致命者讚詞

受難者は殺されて、其聖軀の葬らるるを以て全地を聖にし、火に投げられ、其中に焚かれて、拜偶像の祭を燔く火を滅し給へり。

生神女讚詞

至善にしてヘルワィムより聖なる童貞女、神の言及び神、甘じて十字架に擧げられし主を身にて生みし者よ、衆人の爲に熱切に彼に祈り給へ。

又 イルモス同上

至淨なる少女よ、神言は爾の内に於て活ける身と智識に飾られたる靈とに合せられて、爾に藉りて完全なる人性を受け給へり。故に我等衆信者は爾を崇め讚む。

辯論家の空言は黙すべし、使徒の角は朗に爾童貞女を讚美して、眞の生神女なりと傳ふべし。

童貞女よ、人類は爾に由りて憐を蒙りたり、蓋永在の言は爾の内に人性に合せられて、神人と爲り給へり。故に我等皆常に爾を崇め讚む。

少女よ、預言者は遠きを見る目を以て爾の産の秘密、爾が人人の爲に身を取りし神、爾の祈祷に由りて我等を諸難より救ふ主を生まんとするを預見せり。

第七調 金曜日の早課 六五七

第七調 金曜日の早課 六五八

次ぎて「常に福にして」、及び伏拜。小聯禱、光耀歌、及び常例の聖詠。

挿句に十字架の讚頌、第七調。

人を愛する主、生命を賜ふ者よ、爾は主宰として爾の十字架を以て世界を贖ひ給へり。主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂しまん。

爾我等を撲ちし日、我等が禍に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん。

眞の葡萄の樹が十字架に釘せられしに、異邦民は盜賊と偕に樂園を獲たり、是れ教會の光榮、是れ國の富なり。我等の爲に苦を受けし主よ、光榮は爾に歸す。

句、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に助け給

へ、我が手の工作を助け給へ。

ハリストスよ、我等は爾の聖なる受難者の記憶を祭りて、爾を歌ひて呼ぶ、主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、十字架生神女讃詞。

至淨なる者は昔己の子の木に在るを見し時、其心悲哀の劍に刺されたり。

次ぎて「至上者よ、主を讃榮し」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、聯禱、及び第一時課、并に發放詞。



金曜日の眞福詞、第七調。

美しくして食ふに善き果は我を殺せり。ハリストスは生命の樹なり、我是より食ひて死せず、乃盜賊と共に呼ぶ、主よ、爾の國に於て我を憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

萬有の王よ、爾は敵の勸に因りて得たるアダムアダムの病を醫さん爲に木に上り、手と足とに釘うたれて、苦を忍び給へり。言よ、故に我等は爾の恒忍を讃榮す。

句、人我の爲に爾等を語り、窘逐し、爾等の事を譎りて諸の悪しき言を言はん時は、爾等福なり。

ハリストスよ、エウレイエウレイの會は爾唯一の立法者及び救世主、人類を凡の不法より救ふ主を二人の不法者の間に釘せり。故に我等爾を讃め歌ふ。

句、喜樂しめよ、天には爾等の賞多ければなり。

致命者讃詞

第七調 金曜日の眞福詞 六五九

第七調 金曜日の晩課 六六〇

受難者は勇敢を以て多くの苦の傷を美しき飾として受けて、教會の光明なる裝飾と知られて、恒に我等の靈の爲に祈り給ふ。

光榮

嗚呼聖なる三者よ、爾の信なる諸僕、爾唯一の神性に於て絶えず敬虔に讃榮せらるる神を信ずる者を苦難より脱れしめて、爾の永遠の國を彼等に與へ給へ。

今も

ハリストスよ、純潔なる童貞女は爾が姿致も華榮もなく身にて十字架の木に擧げられしを見て、傷ましく呼べり、嗚呼吾が子よ、如何ぞ不法の者は爾に傷つけたる。



金曜日の晩課

「主よ、爾に籲ぶ」に聖致命者と成聖者と克肖者との讃頌、第七調。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人

の爾の前に敬まん爲なり。

致命者は無神の幽暗を逐ひて、衆人に神智の光を示し給へり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

至りて睿智なる諸牧師よ、爾等は醇正の教の神聖なる光を以て主の教會を照し給へり。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

克肖なる諸神父よ、爾等は常に過られぬ野に居りて、悪鬼の網を破り給へり。

又致命者の讚頌、同調。

句、願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

救世主よ、全世界を審判せん爲に來る時、我恥づべき行爲を行ひし者を辱かしむる勿れ。

句、萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ。

ハリストス神よ、光榮は爾に歸す、爾は使徒の譽、致命者の悦なり。彼等の教は一體の三者なり。

句、蓋彼が我等に施す憐みは大なり、主の眞實は永く存す。

聖なる致命者、善く難を受けて榮冠を冠りし者よ、我等の靈の救はれんことを主に祈

第七調 金曜日の晩課 六六一

第七調 金曜日の晩課 六六二

り給へ。

光榮、今も、生神女讚詞。

生神女よ、爾は性に超えて母と識られ、言と智識とに超えて童貞女に止まれり、舌は爾の産の奇跡を言う能はず。蓋潔き者よ、爾の降孕は至榮にして、産の状は悟り難し、神の欲する所には天性の法勝たるればなり。故に我等皆爾を神の母と識りて、切に爾に求む、我等の靈の救はれんことを禱り給へ。

次ぎて「穩なる光」。本日の提綱。

挿句に致命者の讚頌、第七調。

聖なる致命者よ、爾等は一切地上の事を顧みずして、勇ましく審判處にハリストスを傳へて、苦の爲に彼より報賞を受け給へり。祈る、勇敢を有つ者として、爾等に趨り附く我等の靈を救はんことを、其全能の神なるに因りて、彼に祈り給へ。

至りて讚美たる致命者、屬神の羔、靈智なる全燔、神の嘉して納れたる祭祀なる者よ、地は爾等を隠ししに非ずして、天は爾等を受けたり、爾等は諸天使の侶と爲り給へり。祈る、彼等と偕に世界に平安を與へ、我等の靈を救はんことを我が救世主及び神に祈り給へ。

死者の讚頌

主よ、爾は始に人を爾の像と肖とに因りて造り、之を樂園に立てて爾の諸造物を治

めしめたり。然れども彼は悪魔の嫉に誘はれて食を嘗め、爾の誠を干す者と爲れり。故に主よ、爾は彼が復其出でし地に返りて、安息を爾に求めんことを定め給へり。

死者の讚頌

我が救世主、生を施す主よ、爾が暫時の生命より移しし我等の兄弟を安ぜしめ給へ、蓋彼等呼ぶ、主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讚詞。

獨容られぬ者を受けて、身を取りし神言を生みし者よ、我等の靈の救はれんことを祈り給へ。



第七調 金曜日の晩課 六六三

第七調 金曜日の晩堂課 四九八

金曜日の晩堂課

至聖なる生神女に祈る規程、第七調。

第一歌頌

イルモス、主よ、曾て流れ易き性の水は爾の瞬にて地の姿に變れり、故にイズライリは足を濡らさず渡りて、凱歌を爾に歌ふ。

女宰生神女よ、恃頼を爾に負はせて、爾に趨り附く者を諸難と、憂愁と、墮落、及び永遠の焰と、苦より脱れしめ給へ。

潔き童貞女よ、爾の慈憐の露を以て我が墮落の焰を滅し給へ、我が凡の定罪と將來の火とに遇はざらん爲なり。

光榮

童貞女よ、爾の慈憐の滴を我常に逸樂の熱に焼かるる者に雨らし給へ、我が絶えず爾より生れたる我等の神及び救世主を讚榮せん爲なり。

今も

童貞女よ、爾の祈祷の水を悲哀の熱にて燃ゆる吾が靈に飲ませ給へ、我が神聖なる樂の果を爾より生れし主に捧げん爲なり。

第三歌頌

イルモス、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの能力を備へし主救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。

童貞女よ、爾に祈る、有能にして仁慈なる少女、人を愛する者として、我が靈に潔淨と、豊なる恩寵と、救とを與へて、不朽の生命を得しめ給へ。

造成主を生みし潔き童貞女、世界の眞の救及び轉達者よ、信を以て爾を歌ふ者を度生の諸難と誘惑、及び永遠の定罪より脱れしめ給へ。

光榮

少女よ、我等熱心に爾の仁慈に祈る、卑微なる諸僕を棄つる勿れ、至仁なる者として、爾の慈憐の眼を以て顧みて、我等を悪魔の息めざる攻撃より脱れしめ給へ。

今も

童貞女よ、我今甚しき悲愁に苦しめられ、我が悉くの力を失ひて、地に仆れて臥す。然れども靈より爾に呼ぶ、爾復我を起こして、爾の慰めを以て固め給へ。

第四歌頌

イルモス、父の懷を離れずして、地に降りしハリストス神よ、我爾の慮の秘密を聞きて、爾獨人を愛する主を讚榮せり。神の母よ、我を朽壞及び詭譎の暴虐者たる蛇、常に我を繞りて、神に向ふ吾が途を遮る者より脱れしめ給へ。

第七調 金曜日の晩堂課 六六五

第七調 金曜日の晩堂課 六六六

生命の靈智なる門よ、我が爲に痛悔の門を啓き給へ、蓋我不當の者は多くの罪に由りて今失望の門に近づはたり。光榮

至聖なる者よ、爾の慈憐を以て善く我が諸愆と逸樂との不潔を拂ひ、我を淨き者と爲して、光明なる恩寵の衣を我に衣せ給へ。今も

至淨なる者よ、爾の慈憐なる祈祷を以て吾が靈體の不潔不淨を潔めて、我に潔き者として常に爾を歌頌讚榮するを得しめ給へ。

第五歌頌

イルモス、ハリストスよ、夜は信ぜざる者の爲に明るからず、信者の爲には爾の言を甘ずるに因りて明るし、故に我朝の禱を爾に奉りて、爾の神性を讚め歌ふ。

純潔なる童貞女よ、至仁なる言に我等の救はれんことを祈り給へ、我等は爾を轉達者、及び危難に於ける堅固なる援助として得たればなり。

潔き者よ、我が罪の爲に常に我を滅さんと謀る敵に我を付す勿れ、爾の慈憐を以て我を其害より脱れしめ給へ。光榮

ハリストスよ、我等爾、萬有の神及び萬有の造成主、我等の爲に人と爲りし主を知りて、獨爾に救の恃頼を負はせたり。今も

活ける水を流す雲たる潔き者よ、慶べ、致命者及び使徒の保固なる童貞女よ、慶べ、尊貴光榮なる無玷の者よ、慶べ。

第六歌頌

イルモス、ハリストスよ、我世の慮の淵に漾ひ、我を覆へる諸罪の浪に溺れ靈を滅す猛獸に擲たれて、イオナの如く爾に呼ぶ、死を致す深處より我を引き上げ給へ。

女宰よ、我不當の事を行ひて、洗禮に因りて受けたる無罪と華美とを失へり。爾熱切なる轉達を以て之を忠信に爾を尊む者に與へ給へ。

純潔なる生神女よ、我を苦と、禍と、悲より脱れしめて、爾の慰を我に與へ給へ、我爾の僕には爾の外に他の保護者なければなり。光榮

贖罪主、恩主、及び救世主を生みし至りて無玷なる者よ、爾は能力を有ちて欲する所
を行ふを能す。故に我等爾の諸僕は爾に祈る、我等を諸慾の擾亂より脱れしめ給へ。

今も

第七調 金曜日の晩堂課 六六七

第七調 金曜日の晩堂課 六六八

至淨なる童貞女母よ、昔預言者イサイヤは聖神に照されて、爾を輕ろき雲として見
る、光榮の主は之に乗りて、來りて、エジプトの偶像を盡く斃し給へり。

次ぎて主憐めよ、三次。光榮、今も、

坐誦讚詞、第七調。

我等爾の産に伏拜する者を永遠の火より脱れしめ給へ、ハリストスは我等爾を歌ふ者
の爲に爾を保護者と爲したればなり。

第七歌頌

イルモス、昔少者は燃ゆる爐を露を出す者と顯して、一の神を歌ひて曰へり、爾
は崇め讃めらるる先祖の神なり。

罪の大數は我を壓して、失望と滅亡との淵に降す。生神女よ、急ぎて救の援助を我
に與へ給へ。

至淨なる者よ、我を凡の敵の悪事と、誘惑と、憂愁より脱れしめて、吾が靈を穩静
と平安とに護り給へ、我が喜びて爾の力を歌はん爲なり。

光榮

至淨なる者よ、我不當の者は我が悪しき行の定罪せられんことを預知りて、吾が心
の深處より爾に呼ぶ、女宰よ、爾我が爲に保護者と爲りて、我を救ひ給へ。

今も

純潔なる者よ、諸致命者、天使、及び使徒と偕に爾の子及び主に爾の諸僕を誘惑と、
災禍と、悲愁より救はんことを祈り給へ。

第八歌頌

イルモス、我等屬神の露を受けし者は、爐に在る少者に效ひて、信を以て呼ばん、主
の造物は主を崇め讃めよ。

至聖なる童貞女よ、我爾に趨り附きて、信を以て呼ぶ者の爲に援助と爲り給へ。潔
き者よ、憐みて、終の前に我に諸罪の潔淨を與へ、終の時には救、終の後には安息

を與へ給へ。

我不當者の行ひし如き悪事を行ひたる者を待つ畏るべき詰問と、威嚴なる審判者と、
夫の終なき苦とを思ふ時、甚しき畏懼は我を圍む。世界の女宰よ、我が爲に救と爲
り給へ。

光榮

嗚呼地に生るる者の救の緣由、信者の救助、罪人の潔淨や、嗚呼萬善の泉、福樂の
賦予者、潔き神の母や、爾我が靈の諸病を醫して、我に永遠の恩寵と、光榮と、歡樂

とを流し給へ。今も

われら じんるい ささげもの しゅさい けん しじょう もの わ いのり うるわ ささげもの
我等人類より獻物として主宰に獻ぜられたる至淨なる者よ、我が禱を美しき獻物

第七調 金曜日の晩堂課 六六九

第七調 金曜日の晩堂課 六七〇

として受けて、我等に報いて爾の助を予へ給へ、我等が絶えず爾より生れし主を歌
ひて、世に讃め揚げん爲なり。

第九歌頌

イルモス、神の母又童貞女、生みし者又童貞を守る者、此れ天性の事に非ずして、神
の寛容の事なり。故に我等は爾が獨斯る神の奇蹟に勝ふる者と爲りしを常に崇め讃
む。

童貞女よ、我今爾の帡幪の下に趨り附きたり。救世主及び造成主を生みし者よ、我多
くの罪に荒らされて亾ぶる者を救ひて、永遠の定罪より脱れしめ給へ。

潔き者よ、爾の至淨なる血より身を取りし造物主、神及び主に我等の爲に祈りて、望
を失ひし人人を爾の慈憐に因りて宥めんことを求め給へ。

光榮

嗚呼至聖至潔なる生神女よ、神の前に於ける爾の熱切なる轉達を以て、我定罪に當
る者を滅えざる火、外の幽暗、及び永遠の涕泣より救ひ給へ。

今も

生神女よ、我爾の恩寵の下に護られて、悪敵の攻撃に滅されずして止まる。故に爾
を神聖なる保固めとして拜み、歌ひて讃め揚ぐ。

次ぎて「常に福にして」、伏拜。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、及び其他常例
の如し、并に發放詞。

~~~~~

### 「スポタ」の早課

#### 第一の誦文の後に致命者の坐誦讃詞、第七調。

聖なる者よ、祈る、我等に諸罪の赦を賜ひ、我等を苦しき死及び將來の苦痛より救  
はんことを主に禱り給へ。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

主よ、爾の聖者は地上に戦ひて、敵に勝ちて、偶像の迷を虚しくせり。故に爾人を愛  
する主宰、仁慈なる神、世界に大なる憐を賜ふ主より榮冠を受けたり。

### 光榮、今も、生神女讃詞。

讚美たる者よ、爾我が復活の寶藏として、爾を頼む者を諸罪の坎及び淵より引き上  
げ給へ。蓋爾生む前に童貞女、生む時も童貞女、生みて後も猶童貞女に止まる者は、

第七調 「スポタ」の早課 六七一

第七調 「スポタ」の早課 六七二

われら すくい う つみ ふく もの すく たま  
我等の拯救を生みて、罪に服せし者を救ひ給へり。

第二の誦文の後に坐誦讃詞、第七調。

ぎじん よるこ てんじょう もの たの ちめいしゃ ちじょう たたか てき ふ ぐうぞう  
義人よ、慶べ、天上の者は楽しむべし、致命者が地上に戦ひて、敵を踐みて。偶像  
まよい むな きょうかい がいせん うた たてまつ ひとりたか もの かしら しょうり  
の迷ひを虚しくしたればなり。教會は凱旋の歌を奉りて、獨戦ふ者の首にして勝利  
あた せかい おおい あわれみ たま しゅ まつ  
を與ふるハリストス神、世界にお大なる憐れみを賜ふ主を祭るべし。

句、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。

しゅ なんじ ちめいしゃ なんじ じゅうじか ちから ぶき てき か ぐうぞう まよい  
主ハリストスよ、爾の致命者は爾の十字架の力を武器として、敵に勝ちて、偶像の迷  
はず ゆえ しよんし なんじ かしょう なんじ さんえい かちうた うた くれら  
を辱かしめたり。故に諸天使と偕に爾を歌頌し、爾を讚榮して、凱歌を歌ふ。彼等  
きとう よ われら たましい きよめ おおい あわれみ あた たま  
の祈禱に由りて我等の靈に潔淨と大なる憐れみを與へ給へ。

句、義人には憂多し、然れども主は之を悉く免れしめん。

じんあい しゅ われら きおく おこな ひとひと たましい い もの ち ぎじん ら すまい い たま  
仁愛なる主よ、我等が記憶を行ふ人人の靈を生ける者の地、義人等の居所に入れ給  
その ざいせい とし おか つみ じんじ かんよう しみ これ ゆる たま なんじ せかい おおい  
へ。其在世の時に犯しし罪あらば、仁慈寛容の神として之を赦し給へ、爾は世界に大  
あわれみ たま しゅ  
なる憐れみを賜ふ主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

こんいん あずか じゅんけつ しょうじょ なんじ ち み と わ かみ つね しょう よげんしゃ  
婚姻に與らざる純潔なる少女よ、爾の血より身を取りし我が神に、常に諸預言者、  
せいせいしゃ およ ちめいしゃ とも われら たましい すく いの たま  
成聖者、及び致命者と偕に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

聖致命者、成聖者、克肖者、及び死者の規程。其冠詞は、我イオシフは詠會と偕に諸  
牧師及び致命者を歌ふ。第七調。

第一歌頌

イルモス、エギペトに於てモイセイにイズライリ民を引き出すことを助け給ひし神。

ひとりかれ うた くれ ころえい あらわ  
獨彼に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

ぎ ちめいしゃ かい てき ことごと いざない か くれら つく しゅ おもて まえ よるこ いわ  
義なる致命者の會は敵の悉くの誘惑に勝ちて、彼等を造りし主の面の前に歡びて祝  
たま  
ひ給ふ。

せいせいしゃ およ きんろう こくしょうしゃ みなおんちよう よ えいえん かに え たま  
ハリストスの成聖者及び勤勞せし克肖者は皆恩寵に因りて永遠の糧を得給へり。

しょう よげんしゃ こくしょうしゃ およ せい おんな きとう よ われら およそ  
ハリストスよ、諸預言者、克肖者、及び聖にせられし婦の祈禱に因りて、我等を凡  
いかり のが わ たましい すく たま  
の怒より脱れしめて、吾が靈を救ひ給へ。 光榮

われ つち つく またわれ つち かせ めい ことば しん おい うつ もの やすん  
我を土より造りて、復我に土に歸らんことを命ぜし言よ、信に於て移しし者を安ぜ  
たま  
しめ給へ。

生神女讃詞

しじょう はは しせい かみことば う もの あい もつ なんじ さんえい しゅうじん せい たま  
至淨なる母、至聖なる神言を生みし者よ、愛を以て爾を讚榮する衆人を聖にし給へ。

第七調 「スポタ」の早課 六七三

第七調 「スポタ」の早課 六七四

又死者の規程、月課經の規程なき時に序を逐ひて之を歌ふ。フェオファンの作。第七  
調。

しゅ かつ なが やす せい みず なんじ またたき ち すがた かわ ゆえ  
イルモス、主よ、曾て流れ易き性の水は爾の瞬にて地の姿に變れり、故にイズラ  
あし ぬ わた かちうた なんじ うた  
イリは足を濡らさず渡りて、凱歌を爾に歌ふ。

附唱、神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり。  
徳行に裝飾せられ、敬虔を以て輝ける致命者は、神聖にして飾られたる祭祀として、  
ハリストス神に獻ぜられたり。

附唱、主よ、寝りし爾の諸僕の靈を安ぜしめ給へ。  
大仁慈なる主よ、移されたる爾の諸僕を凡の疾病と、悲愁と、歎息との遠ざかれる處  
に入れて、近づき難き三日光に輝かざるを得しめ給へ。

### 光榮

實在の生命にして、親ら生命を賜ふハリストスよ、爾は死に定められたる性を起し給  
へり。故に獨洪恩なる主として、信を以て爾に移されし者を安ぜしめ給へ。

### 今も

至淨なる者よ、爾は墮落せし原母を起せり、蓋神の權を以て彼を復活せしめ、墓に在  
る者に生命を嘘き入れたる主言を生み給へり。

### 第三歌頌

イルモス、言を以て天を堅め、地の基を多水の上に定めし仁愛の主よ、我が智慧を爾  
の旨に堅め給へ。

致命者よ、爾等は石にて壞られ、穿に投げられて、誘惑者の悉くの力を壞りて、心  
の壞られぬ者と止まり給へり。

睿智なる成聖者よ、爾等は神聖なる教の光と諸徳の光線とを以て信者を照らして、  
諸異端の幽暗を悉く散じ給へり。

言よ、爾の克肖者は世の爲に死して、實に世より上なる生命を繼ぎたり。憐深き主  
よ、彼等に因りて我等衆を憐み給へ。

### 光榮、死者讃詞。

我等皆信と望とに於て移りたる者の爲に仁慈なる主宰に祈りて、審判の時に彼等を憐  
まんことを求む。

### 生神女讃詞

至淨なる者よ、言は父の懷を離れずして、赤子として爾の懷に抱かれ、始なき者  
にして爾より始を受けし者と現れたり。

### 又

イルモス、元始に全能の言にて天を堅め、能はざるなき聖神にて其悉くの能力を備

第七調 「スボタ」の早課 六七五

第七調 「スボタ」の早課 六七六

へし主・救世主よ、爾が承認の動かざる石に我を堅め給へ。

救世主よ、致命者の會は強壯にして堅固なる忍耐を勇ましく顯せり、蓋爾の不朽な  
る光榮と華美とを慕ひて、己を無数の傷と苦とに付せり。

仁慈なる主宰よ、望を抱きて寝りし者の靈を爾の永遠の生命に受け、聖なるアウ  
ラアムの慕ふべき神聖なる懷に入れて、福たるラザリに加へ給へ。

### 光榮

人類を救はん爲に天より降りし仁慈なる救世主よ、敬虔を抱きて移されし者に、爾の慈憐に因りて、無形の光と、爾の神聖なる光榮と、歡喜とに飽くを得しめ給へ。

### 今も

潔き者よ、爾悟り難き言を孕みし者に於て性の法は解かれ、神聖なる法は我等に與へられて、神の愛の恩寵に因りて凡そ諸罪を悔ゆる者に赦免は賜はる。

### 第四歌頌

イルモス、ハリストスよ、預言者アウワクムは爾が肉體を以て來るを信ぜしめて呼べり、主よ、光榮は爾の力に歸す。

致命者は主を愛する愛に堅められて、敵の力を空しくせり。故に讚美せらる。福たる成聖者は牧師の羔として、靈智なる群に入りて、神の恩寵を以て之を牧し給へり。

克肖なる我が諸神父よ、爾等は諸徳の輝を以て光明なる星の如く信者の會を照し給へり。

### 光榮

勇ましくハリストスに奉事せし聖なる婦の群及び聖なる預言者の會は天の福樂を得たり。

### 生神女讚詞

讚美たる者よ、爾の生みし子に爾の諸僕が諸の誘惑及び及び憂愁より救はれんことを祈り給へ。

### 又

イルモス、父の懷を離れずして、地に降りしハリストス神よ、我爾の慮の秘密を聞きて、爾獨人を愛する主を讚榮せり。

ハリストスよ、忍耐を以て甚しき苦を忍びたる致命者は爾の義の榮冠に飾られて、爾の力を讚榮す。

洪恩にして大仁慈なる主よ、爾の光榮の中に諸天使と偕に來らん時、敬虔を抱きて移されし者に爾の最盛なる光に輝かざるを得しめ給へ。

### 光榮

第七調 「スボタ」の早課 六七七

第七調 「スボタ」の早課 六七八

仁慈仁愛なる主よ、先に逝世して爾を讚榮する者に三光の輝煌と唯一の神性の光とを樂しむを得しめ給へ。

### 今も

獨讚美たる者よ、父の懷を離れずして、童貞女の懷に入り給ひし ハリストスは爾神の母を讚美する者を死より救ひ給へり。

### 第五歌頌

イルモス、仁愛なる主神よ、我が神は夙に寤めて爾に祈る、蓋爾は光なり、爾の戒は爾の諸僕の爲に醫治と爲れり。

肉體の傷を顧りみざりし堅固なる受難者よ、爾等は己の神聖なる傷に因りて衆の傷及び苦を醫し給ふ。

ハリストスの成聖者よ、爾等は地上に於て釋き及び縛る權を受けたり。故に我等の釋き難き罪の縲紲を釋き給へ。

修齋者、預言者、義者、及び尊き婦の會は潔き心を以て神に合はせられて、奪はれざる歡喜を喜びて祝ふ。 **光榮、死者讚詞。**

人を愛するハリストスよ、爾獨大仁慈なる主として、信を以て現生より移されし者を樂園の住民と爲し給へ。 **生神女讚詞**

神の壞たれぬ宮と現れし至聖なる童貞女よ、我を無形の宮と住者と爲さんことを彼に祈り給へ。

又

イルモス、主我が神よ、我夜より寤めて爾に祈る、我に諸罪の赦を與へて、我が途を爾の誠の光に向はしめ給へ。

苦を以て織られたる死の状、生を得しむる者を美しく衣たる讚頌すべき致命者よ、先に寢りし靈の爲に神聖なる安息を求め給へ。

盡くされぬ寶藏より慈憐を流し給ふ救世主よ、爾が移しし靈に爾の冢子等と偕に天の居所に居るを得しめ給へ。 **光榮**

ハリストス救世主よ、重任を卸し、桎梏を解かれて、上なる生命に移りし爾の諸僕に爾の聖なる光照を樂しむを得しめ給へ。 **今も**

女宰、神の母、世界の爲に實在の生命を生みし純潔なる者よ、我を諸罪より釋きて、我に罪過の赦を與へ給へ。

第六歌頌

イルモス、イオナは地獄の腹より呼べり、我が生命を淪滅より引き上げ給へ、我等は爾に呼ぶ、全能の救世主よ、我等を憐み給へ。

第七調 「スポタ」の早課 六七九

第七調 「スポタ」の早課 六八〇

至榮なる軍士よ、爾等は苦の中に神に擧げられ、敵の傲慢を倒して、天の國民と爲り給へり。

ハリストスの眞の成聖者よ、爾等は諸異端の冬を逐ひて、敬虔者の大數を眞の春に攜へ給へり。

ハリストスよ、克肖者、預言者、及び聖なる婦の大數は爾の能力に義とせられて、暮れざる光を樂しむ。 **光榮、死者讚詞。**

洪恩なる主よ、爾は暫時の生命より爾の諸僕を移し給へり、求む、彼等を永遠の樂と眞の生命とに與る者と爲し給へ。 **生神女讚詞**

至聖なる童貞女よ、爾の諸僕を聖にし給へ、蓋爾は至聖なる言、凡そ呼吸ある者を聖にして、此等より歌はるる主を身にて生み給へり。

又

イルモス、ハリストスよ、我世の慮の淵に滌い、我を覆へる諸罪の濤に溺れ、靈

を滅す猛兽に擲たれて、イオナの如く爾に呼ぶ、死を致す深處より我を引き上げ給へ。

致命者の會は忍耐を以て勝へ難き苦を忍びしに因りて、苦なき甘樂を繼ぎて、生命を施す右の手より義の榮冠を受け給へり。二次。

### 光榮

仁慈なる主よ、爾は不死の神として、先に寢りし爾の諸僕を義人等と偕に、聖者の會の處、克肖者の光照と永遠の生命の樂との處に入れ給へ。

### 今も

潔き者よ、神聖なる旨と造成の力を以て萬物を無より造りし主は爾の胎より出でて、死の幽暗に在る者を神元の輝にて照し給へり。

### 第七歌頌

イルモス、アウラアムの少者はハルデヤの爐の中に在りて、天使と偕に樂しみて云へり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

受難者は血の流を以て不虔の焰を滅して歌へり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

我等は世界の光照者と爲りし成聖者を讃揚して歌ふ、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

預言者及び克肖者の聖なる會は詩賦を以て尊まるべし、蓋彼等歌ふ、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。光榮

第七調 「スポタ」の早課 六八一

第七調 「スポタ」の早課 六八二

洪恩なるハリストスよ、爾が受けし信なる諸僕を「ゲエンナ」より脱れしめ給へ、蓋彼等呼ぶ、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。生神女讃詞

我等は生神女を諸天使より至りて尊き者として歌頌して呼ぶ、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

### 又

イルモス、昔少者は燃ゆる爐を露を出す者と顯して、一の神を歌ひて曰へり、爾は崇め讃めらるる先祖の神なり。

榮冠を冠れる致命者の會は天使の品位と偕に無形に嚴にハリストス王を環りて立ちて呼ぶ、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

死と生との權を有ち給ふ洪恩なる救世主よ、爾を信ずる信に於て移されし者に神聖なる糧を得しめ給へ、蓋彼等呼ぶ、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

### 光榮

ハリストスよ、爾が移しし靈を無形の光の輝煌を以て照して、之を天の居處に入れて、爾の悦を得たる者と偕に常に爾を讃榮せしめ給へ。

### 今も



童貞女よ、先に母なく父より生れ、今は父なくして言ひ難く爾より生れたるハリスト  
トスは我等人人の爲に肉體を衣給へり。至淨なる者よ、爾の腹の果は祝福せられた  
り。

### 第八歌頌

イルモス、我等屬神の露を受けし者は、爐に在る少者に效ひて、信を以て呼ばん、主  
の造物は主を崇め讚めよ。

至榮なる受難者よ、爾等は偶像の殿を毀ち、己を聖神の殿と爲して、勇敢に馳すべ  
き程を盡し給へり。

成聖者よ、爾等は芳しき花の如き者と顯れて、敬虔の智慧を以て信者の靈を樂し  
ましむ。故に宜しきに合ひて讚美せらる。

克肖者及び預言者よ、爾等は神の寄寓者として、全地を過ぎて、上なる城邑及び恒  
に存する光榮を慕ひ給へり。

### 光榮、死者讚詞。

言よ、生者死者の主として、信を以て寝りし爾の諸僕を悉くの救はるる者の會に合  
せ給へ、爾獨人を愛する主なればなり。

### 生神女讚詞

至淨なる者よ、齋と苦難とを以て主に奉事せし悉くの婦女の會は常に爾の神聖な

第七調 「スボタ」の早課 六八三

第七調 「スボタ」の早課 六八四

る顔を拜む。

### 又

イルモス、唯一無原なる光榮の王、天軍の崇め讚め、天使の品位の戦く主を、司祭  
よ、歌へ、人人よ、彼を世に讚め揚げよ。

致命者はハリストスの降臨の天の光榮に目を注ぎて、地上の光榮を顧みずして、敬虔  
に彼を王として萬世に讚め歌ふ。

生命の望を抱きて寝りし者の地上の幕屋を壊ちし主よ、彼等に天上の幕屋を與へて、

義人の居所に萬世に安ぜしめ給へ。

### 光榮

生命の泉を有つ神として死者に復活を賜ふ主よ、獨仁慈なる主として、先に寝りし者  
に萬世に福樂の流を飲ませ給へ。

### 今も

爾の胎内に近づかれぬ光を言ひ難く受けし生神童貞女よ、爾は度生の幽暗に在る者  
を照して、不可思議に爾より生れしハリストスを敬虔に讚榮せしめ給ふ。

次ぎて生神女の歌を歌ふ、「我が靈は主を崇め」。

### 第九歌頌

イルモス、性に超えて母、性に順ひて童貞女、女の中に獨祝讚せらるる者を、我等信者  
は歌を以て生神女として崇め讚む。

ハリストスよ、聖にせられし致命者と、預言者と、義人等、凡そ古世より善を盡して  
度生せし者の祈祷に因りて、我等の靈を憐み給へ。

主宰の奉事者として其悦を獲たる機密の聖務者よ、爾等は天の奉事者に合せられたり。彼等と偕に我等の爲に禱を捧げ給へ。

我等は善く馳すべき道を盡しし修齋者及び福たる婦女の聖なる會を尊まん。願はくは彼等の祈禱に因りて我等聖にせらるるを得ん。 **光榮、死者讚詞。**

ハリストスよ、正教を以て爾に奉事して移されし者に衆聖人の會の受けたる光榮に與るを得しめ給へ。 **生神女讚詞**

潔き者よ、我は罪を愛する者にして、爾より生れし主の畏るべき審判に戦く、仁慈なる者として、其時我を定罪より護り給へ。

又

イルモス、神の母又童貞女、生みし者又童貞を守る者、此れ天性の事に非ずして、神

第七調 「スポタ」の早課 六八五

第七調 「スポタ」の早課 六八六

の寛容の事なり。故に我等は爾が獨斯る神の奇跡に勝ふる者と爲りしを常に崇め讃む。

勇敢なる致命者は明に世界を照す、彼等は信の柱、諸教會の動かされぬ固、敬虔の垣牆なり。我等信者は宜しきに合ひて彼等を讃揚す。

主宰よ、我等より移りし者に永遠の火を免れしめ給へ。獨人を愛する主として、爾の脅の戈を以て彼等の罪の書券を裂きて、彼等に諸聖人の光照を得しめ給へ。

光榮

救世主よ、爾は本性の仁慈仁愛なる神、慈憐にして洪恩なる主、不死の生命の盡されぬ寶藏として、先に信を以て寝りし者に不朽なる甘樂を獲しめ給へ。

生神女讚詞

律法の影と先の預象とは爾の産を以て過ぎたり、蓋ハリストスは律法と諸預言者との成就なりき。我等は彼を二性の主として歌ひて、爾潔き永貞童女を讃揚す。

次ぎて「常に福にして」、**聯禱、光耀歌、及び常例の聖詠。**

「凡そ呼吸ある者」に致命者の讚頌、第七調。

ハリストスよ、我等は爾の聖なる受難者の記憶を祭りて、爾を歌ひて呼ぶ、主よ、光榮は爾に歸す。

ハリストスよ、受難者は法に戻る者の裁判所に在りて、歡びて呼べり、主よ、光榮は爾に歸す。

受難者致命者は一の事を慕ひ、一の事に目を注ぎ、一の事を生命の道と爲せり、是れ互に勵みてハリストスの爲に死を受くることなり。嗚呼奇跡や、競ひて寶の如くに苦を求めて、相語りて云ふ、我等若し今日死せずば、後に必死せん、是れ生ける者の免れざる分なり、然らば最必要なる事を行ひ、公の事を己に歸し、死を以て生を買はんと。神よ、彼等の祈禱に因りて我等を憐み給へ。

死者讚詞

仁慈仁愛なる主よ、爾を信ずる信を以て暫時の生命より移されし者を爾の義人等の地に入れ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

童貞女よ、使徒及び致命者と偕に祈りて、寢りし者が審判に於て大なる憐を得んことを求め給へ。

挿句に死者の讃頌、第七調。

獨不死なる主よ、爾は殺されて十字架に見られ、死者として墓に置かれて、人人を

第七調 「スポタ」の早課 六八七

第七調 「スポタ」の早課 六八八

死及び朽壞より救ひ給へり。求む、仁慈の盡されぬ淵、慈憐の泉として、我等より移されし爾の諸僕の靈を安ぜしめ給へ。

句、主よ、爾が選び近づけし者は福なり。

死者讃詞

仁慈なる主よ、爾に移りしものに爾の不朽の華美と甘樂とに與り、爾の神聖なる光の光線に照され、爾の無形なる流光の中に諸天使と偕に爾、主宰、主、光榮の王の周圍に慶賀するを得しめ給へ。

句、彼等の靈は福に居らん。

死者讃詞

諸恩の豊なる富、仁慈慈憐の盡されぬ寶藏を有つ神として、爾に移りし者を爾の選びたる者の地に、安息の處に、爾の光榮の家に、天堂の福樂に、婚筵の宮に居らしめ給へ。

光榮、今も、生神女讃詞。

童貞女よ、爾は律法の成就たる主、身にて贖罪者と爲りしを生み給へり、蓋先の者は律法に於て義とせらるるを得ざりき、ハリストスは我等の爲に十字架に釘せられて我等を義と爲せり。讃美たる者よ、爾母として勇を有ちて、爾の慈憐なる子に敬虔を抱きて我等より移れし者の靈を安ぜしめんことを祈り給へ。

次ぎて「至上者よ、主を讃榮し」。聖三祝文。「天に在す」の後に讃詞、聯禱、第一時課、并に發放詞。



「スポタ」の眞福詞、第七調。

美しくして食ふに善き果は我を殺せり。ハリストスは生命の樹なり、我是より食ひて死せず、乃盜賊と共に呼ぶ、主よ、爾の國に於て我を憶ひ給へ。

句、義の爲に窘逐せらるる者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

讃美たる致命者、諸天使の同住者よ、爾等は善き戰を終へ、信を守りて、神より不朽

の榮冠<sup>えいかん</sup>を享<sup>う</sup>け、其<sup>その</sup>光榮<sup>こうえい</sup>を獲<sup>え</sup>給<sup>たま</sup>へり。

句、人<sup>ひと</sup>我<sup>われ</sup>の爲<sup>ため</sup>に爾<sup>なんじ</sup>等<sup>ら</sup>を詔<sup>ののし</sup>り、窘<sup>きんちく</sup>逐<sup>なんじ</sup>し、爾<sup>なんじ</sup>等<sup>ら</sup>の事<sup>こと</sup>を譎<sup>いつわ</sup>りて諸<sup>もろもろ</sup>の悪<sup>あ</sup>しき言<sup>ことば</sup>を言<sup>い</sup>はん時<sup>とき</sup>は爾<sup>なんじ</sup>等<sup>ら</sup>福<sup>さいわい</sup>なり。

聖<sup>せいむしや</sup>務<sup>せ</sup>者<sup>こくしようしや</sup>攻<sup>やぶ</sup>び克<sup>よげんしや</sup>肖<sup>およ</sup>者<sup>とうと</sup>の壞<sup>おんな</sup>、預<sup>むれ</sup>言<sup>いま</sup>者<sup>ちようし</sup>及<sup>でん</sup>び尊<sup>よろこび</sup>き婦<sup>うち</sup>女<sup>お</sup>の群<sup>むけい</sup>、今<sup>ひんい</sup>冢<sup>とも</sup>子<sup>あ</sup>の殿<sup>もの</sup>に歡<sup>つつし</sup>喜<sup>とうと</sup>の中<sup>とうと</sup>に居<sup>とうと</sup>り、無<sup>とうと</sup>形<sup>とうと</sup>なる品<sup>ひんい</sup>位<sup>とも</sup>と偕<sup>あ</sup>に在<sup>もの</sup>る者<sup>つつし</sup>は敬<sup>とうと</sup>みて尊<sup>とうと</sup>まるべし。

句、喜<sup>よろこ</sup>び樂<sup>たの</sup>しめよ、天<sup>てん</sup>には爾<sup>なんじ</sup>等<sup>ら</sup>の賞<sup>むくい</sup>ひ多<sup>おお</sup>ければなり。

第七調 「スポタ」の眞福詞 六八九

第七調 「スポタ」の眞福詞 六九〇

神<sup>かみ</sup>の言<sup>ことば</sup>よ、爾<sup>なんじ</sup>が我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>より移<sup>うつ</sup>しし爾<sup>なんじ</sup>の諸<sup>しよ</sup>僕<sup>ぼく</sup>が知<sup>し</sup>ると知<sup>し</sup>らずして地<sup>ちじよう</sup>上<sup>おか</sup>に犯<sup>たましい</sup>しし靈<sup>しよ</sup>の諸<sup>しよ</sup>罪<sup>ざい</sup>を顧<sup>かえり</sup>みずして、彼<sup>なんじ</sup>等<sup>ら</sup>を憐<sup>あわれ</sup>みて、諸<sup>しよ</sup>聖<sup>せい</sup>人<sup>じん</sup>の殿<sup>でん</sup>に入れ<sup>い</sup>給<sup>たま</sup>へ。

### 光榮

嗚<sup>あ</sup>呼<sup>あ</sup>聖<sup>せい</sup>なる三<sup>さん</sup>者<sup>しや</sup>よ、爾<sup>なんじ</sup>の死<sup>し</sup>する諸<sup>しよ</sup>僕<sup>ぼく</sup>は爾<sup>なんじ</sup>に來<sup>きた</sup>り、審<sup>しん</sup>判<sup>ばん</sup>の時<sup>とき</sup>に夫<sup>か</sup>の畏<sup>おそ</sup>るべき苦<sup>くるしみ</sup>を免<sup>まぬか</sup>れて、爾<sup>なんじ</sup>の聖<sup>せい</sup>なる光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>の福<sup>ふく</sup>を獲<sup>え</sup>んことを求<sup>もと</sup>む。

### 今も

至<sup>しせい</sup>聖<sup>しせい</sup>至<sup>しせい</sup>潔<sup>しせい</sup>なる者<sup>もの</sup>よ、父<sup>ちち</sup>の光<sup>ひかり</sup>なる主<sup>しゆ</sup>は爾<sup>なんじ</sup>の胎<sup>たい</sup>内<sup>ない</sup>に入りて、敵<sup>てき</sup>の悪<sup>あく</sup>謀<sup>ぼう</sup>に誘<sup>いざな</sup>はれて朽<sup>きゆう</sup>壞<sup>かい</sup>に陥<sup>おちい</sup>りし者<sup>もの</sup>を新<sup>あらた</sup>にし給<sup>たま</sup>へり。